高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集

天ヶ城跡 上巻

地域づくり事業（天ヶ城公園整備）に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1998. 3
宮崎県高岡町教育委員会

高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集

天ヶ城跡 上巻

地域づくり事業（天ヶ城公園整備）に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1998. 3

宮崎県高岡町教育委員会

序　文

この報告書は、地域づくり事業に伴い1991年から1992年にかけて実施した天ヶ城跡における埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

この調査により、縄文時代早期と中近世の城館跡における遺構や遺物が多数検出され、南九州の当時の歴史を解明するうえで多大な成果あげることができました。この発掘調査で明らかにされたものは、先人が残した私たちの文化遺産であり、これらの成果を活かすことが、我々に課せられた重大な責務と考えております。本書が町内に所在する文化財の保存に役され、また本町の学術資料として学校教育、社会教育などに幅広く活用頂ければ幸いに存じます。

尚、発掘調査を実施するにあたり、関係各社より頂いたご指導とご協力に対し、心から感謝を申し上げます。

1998年３月

高岡町教育委員会
教育長　篠原和民

例　言

1　本書は、自治省の地域づくり事業に伴い1991年から1992年にかけて実施された埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2　遺跡は宮崎県東諸県郡高岡町大字内山3003―56に所在した。

3　石材の鑑定は宍戸章氏に依頼した。また、黒耀石の原産地分析は藁科哲男氏（京都大学原子炉実験所）のご厚意による。

4　写真測量は㈱スカイ・サーベイに委託し実施した。

5　遺物の実測ならびに製図は、[redacted]（埋蔵文化財調査室）のほか、[redacted]の協力を得た。

6　執筆は、天ヶ城（上）Ⅳ章を藁科哲男氏、天ヶ城（下）Ⅱ章を今城正広、それ以外を島田正浩でおこなった。

7　調査された遺構の一部（現パターゴルフ場敷地）は埋め戻しをして保存している。

8　この遺跡の遺跡番号は407、出土遺物は高岡町教育委員会で保管している。遺物の注記は、「407―調査区名―グリット名―層位―遺物取り上げ番号―整理番号」である。

9　本書表紙にある題字は教育長篠原和民による。

10　本書の編集は島田がおこなった。

凡　例

1　表1、2　集石遺構構成礫重量百分率の記号は次のとおりである。

A…1～50ｇ、B…51～100ｇ、C…101～200ｇ、D…201～300ｇ、E…301～400ｇ、F…401～500ｇ、G…501～1,000ｇ、H…1,001～1,500ｇ、Ⅰ…1,501～2,000、Ｊ…2,001ｇ以上

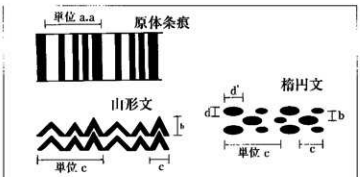
2　包含層出土土器観察表内の記号は次のとおりである。

●文様・調整の数字は部位を表す。

①口唇部、②口縁部、③胴部、④底部

●表6～9の包含層出土土器観察表(2)～(5)の「原体」の記号は次のとおりである。

押型文土器の口縁部内面にある原体条痕が回転押捺施文による場合は櫛状文[1]とし、条痕施文の場合はそのまま原体条痕とした。その回転押捺施文の場合はその原体の単位数を単位ａ、周期長（単位はmm）をａとした。文様一単位の幅（C）は原体一周（周期長）の長さ（単位はmm）を文様の反復単位（単位C）で除した数値。ちなみに、文様の原体径は、原体の断面を円形と仮定し、原体一周の長さを円周率で除した数値である。また、ｂは原体1条の平均幅である。ｄおよびd'は楕円文の原体1単位の凸部の平均値である。



第1図　凡例略図[2]

●土器の色調は農林水産省農林水産技術会事務局監修による標準土色帳による。

●胎土中にある金色の鉱物は「雲母」と表現している。

3　表11 石器計測表について

●石材の分類基準はⅢ章第2節石器の本文中に記載している。

●石器の重量単位はグラム（ｇ）である。

●石器の計測値は最大値とし、単位はセンチ（㎝）である。

註（1）矢野健一1996「九州地方の押型文土器」『宮崎県埋蔵文化財担当者専門研修会資料』

註（2）黒色部分は文様の凸部を表す。

目　次

天ヶ城跡　上巻　目次

Ⅰ　はじめに ……11
第1節　調査に至る経過 ……11
第2節　調査組織 ……11

Ⅱ　遺跡の概要 ……12
第1節　遺跡の環境 ……12
第2節　遺跡の概要 ……17

Ⅲ　縄文時代の調査 ……20
第1節　概　　要 ……20
第2節　遺構と遺物 ……20

Ⅳ　分　　析 ……187

Ⅴ　ま　と　め ……207

挿図目次

第1図　凡例略図 ……8
第2図　高岡町遺跡分布図 ……13～14
第3図　遺跡周辺地形図 ……16
第4図　遺跡近辺の旧地形と区割図 ……18
第5図　基本層序柱状図 ……19
第6図　縄文時代遺構配置図 ……21～22
第7図　縄文時代焼礫分布図 ……23
第8図　集石遺構実測図(1) ……25
第9図　集石遺構実測図(2) ……26
第10図　集石遺構実測図(3) ……27
第11図　土坑実測図(1) ……32
第12図　土坑実測図(2) ……33
第13図　土坑実測図(3) ……36
第14図　土坑実測図(4) ……35
第15図　土坑実測図(5) ……36
第16図　遺構内出土遺物実測図 ……39
第17図　包含層出土遺物分布状況図 ……41～43
第18図　包含層出土遺物実測図(1) ……50
第19図　包含層出土遺物実測図(2) ……51
第20図　包含層出土遺物実測図(3) ……52
第21図　包含層出土遺物実測図(4) ……53
第22図　包含層出土遺物実測図(5) ……54
第23図　包含層出土遺物実測図(6) ……55
第24図　包含層出土遺物実測図(7) ……56
第25図　包含層出土遺物実測図(8) ……57
第26図　包含層出土遺物実測図(9) ……58
第27図　包含層出土遺物実測図(10) ……59
第28図　包含層出土遺物実測図(11) ……60
第29図　包含層出土遺物実測図(12) ……61
第30図　包含層出土遺物実測図(13) ……62

第31図　包含層出土遺物実測図(14)……63
第32図　包含層出土遺物実測図(15)……64
第33図　包含層出土遺物実測図(16)……65～66
第34図　包含層出土遺物実測図(17)……67
第35図　包含層出土遺物分布図(1)……68
第36図　包含層出土遺物分布図(2)……69
第37図　包含層出土遺物分布図(3)……70
第38図　包含層出土遺物分布図(4)……71
第39図　包含層出土遺物分布図(5)……72
第40図　包含層出土遺物分布図(6)……73
第41図　包含層出土遺物分布図(7)……74
第42図　包含層出土遺物分布図(8)……75
第43図　包含層出土遺物分布図(9)……76
第44図　包含層出土遺物分布図(10)……77
第45図　包含層出土遺物分布図(11)……78
第46図　包含層出土遺物分布図(12)……79
第47図　包含層出土遺物分布図(13)……80
第48図　包含層出土遺物分布図(14)……81
第49図　包含層出土遺物実測図(18)……82
第50図　包含層出土遺物実測図(19)……83
第51図　包含層出土遺物実測図(20)……84
第52図　包含層出土遺物実測図(21)……85
第53図　包含層出土遺物実測図(22)……86
第54図　包含層出土遺物実測図(23)……87
第55図　包含層出土遺物実測図(24)……88
第56図　包含層出土遺物実測図(25)……89
第57図　包含層出土遺物実測図(26)……90
第58図　包含層出土遺物実測図(27)……91
第59図　包含層出土遺物実測図(28)……92
第60図　包含層出土遺物実測図(29)……93
第61図　包含層出土遺物実測図(30)……94
第62図　包含層出土遺物実測図(31)……95
第63図　包含層出土遺物実測図(32)……96
第64図　包含層出土遺物実測図(33)……97
第65図　包含層出土遺物実測図(34)……98
第66図　包含層出土遺物実測図(35)……99
第67図　包含層出土遺物分布図(15)……101
第68図　包含層出土遺物分布図(16)……102
第69図　包含層出土遺物分布図(17)……103
第70図　包含層出土遺物分布図(18)……104
第71図　包含層出土遺物分布図(19)……105
第72図　包含層出土遺物分布図(20)……106
第73図　包含層出土遺物分布図(21)……107
第74図　包含層出土遺物分布図(22)……108
第75図　包含層出土遺物分布図(23)……109
第76図　包含層出土遺物分布図(24)……110
第77図　包含層出土遺物分布図(25)……111
第78図　包含層出土遺物分布図(26)……112
第79図　包含層出土遺物分布図(27)……113
第80図　包含層出土遺物分布図(28)……114
第81図　包含層出土遺物分布図(29)……115
第82図　包含層出土遺物分布図(30)……116
第83図　包含層出土遺物分布図(31)……117
第84図　包含層出土遺物分布図(32)……118
第85図　包含層出土遺物分布図(33)……119
第86図　包含層出土遺物分布図(34)……120
第87図　包含層出土遺物分布図(35)……121
第88図　包含層出土遺物分布図(36)……122
第89図　包含層出土遺物分布図(37)……123
第90図　包含層出土遺物分布図(38)……124
第91図　包含層出土遺物分布図(39)……125
第92図　包含層出土遺物分布図(40)……126
第93図　包含層出土遺物分布図(41)……127
第94図　包含層出土遺物分布図(42)……128
第95図　包含層出土遺物分布図(43)……129
第96図　包含層出土遺物分布図(44)……130
第97図　包含層出土遺物実測図(36)……131
第98図　包含層出土遺物実測図(37)……132
第99図　包含層出土遺物実測図(38)……133
第100図　包含層出土遺物実測図(39)……134
第101図　包含層出土遺物実測図(40)……135
第102図　包含層出土遺物実測図(41)……136
第103図　包含層出土遺物実測図(42)……137
第104図　包含層出土遺物実測図(43)……138

第105図　包含層出土遺物分布図(15) ……139
第106図　包含層出土遺物分布図(16) ……140
第107図　L 7グリット黒耀石出土状況図 ……141
第108図　包含層出土遺物石材分布図(1) ……142
第109図　包含層出土遺物石材分布図(2) ……143
第110図　包含層出土遺物石材分布図(3) ……144
第111図　包含層出土遺物石材分布図(4) ……145
第112図　包含層出土遺物石材分布図(5) ……146
第113図　黒耀石原産地 ……188

表　目　次

表1　集石遺構構成礫重量百分率(1) ……28
表2　集石遺構構成礫重量百分率(2) ……29
表3　黒耀石原産地重量百分率……147
表4　出土石器石材別集計表……147
表5　包含層出土土器観察表(1)……149
表6　包含層出土土器観察表(2)……168
表7　包含層出土土器観察表(3)……175
表8　包含層出土土器観察表(4)……180
表9　包含層出土土器観察表(5)……181
表10　包含層出土土器観察表(6)……183
表11　包含層出土石器計測表……186
表12　九州西北地域原産地採取原石が各原石群に同定される割合の百分率（%）……191
表13　各黒耀石の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値……192
表14　天ヶ城跡出土黒耀石の元素比分析結果……195
表15　天ヶ城跡出土の黒耀石製遺物の現在産地推定結果……201
表16　天ヶ城跡出土の黒耀石製遺物の原石産地別頻度分布……206
表17　天ヶ城跡縄文早期出土遺物集計表……208
表18　天ヶ城跡出土押型文土器（山形文・楕円文）原体計測表……210
表19　天ヶ城跡出土土器法量値別数量表……213

写真図版目次

図版1　調査前全景(南から)、1区全景(東から)…119
図版2　1区全景、1区西側（北から）、1区西側礫群出土状況（北から）……220
図版3　2区全景（北から）、3区北側（東から）、3区南側（南から）……221
図版4　4区全景、5区全景（西から）、1号集石遺構　222
図版5　3号集石遺構、4号集石遺構、5号集石遺構　223
図版6　6号集石遺構、7号集石遺構、8号集石遺構　224
図版7　9号集石遺構、10号集石遺構、11号集石遺構　225
図版8　11号集石遺構底石、12号集石遺構、13号集石遺構　226
図版9　14号集石遺構、15号集石遺構、16号集石遺構　227
図版10　17号集石遺構、17号集石遺構底石、18号集石遺構……228
図版11　19号集石遺構、20号集石遺構、1号土坑　229
図版12　2号土坑、3号土坑、4号土坑……230
図版13　土　坑(1)……231
図版14　土　坑(2)……232
図版15　黒耀石（L7グリット）出土状況、遺物出土状況（152）、遺物出土状況（529）……233
図版16　出土遺物(1)……234
図版17　出土遺物(2)……235
図版18　出土遺物(3)……236
図版19　出土遺物(4)……237
図版20　出土遺物(5)……238
図版21　出土遺物(6)……239
図版22　出土遺物(7)……240

天ヶ城跡　下巻　目次

Ⅰ　歴史時代の調査……9
第1節　概　　要……9
第2節　遺構と遺物……9

Ⅱ　高岡の歴史と天ヶ城……35
第1節　天ヶ城築城以前の高岡……35
第2節　高岡郷成立と天ヶ城……39

Ⅲ　ま　と　め……53

付録目次

付　録　「天ヶ城」資料関係……00

挿図目次

第1図　遺跡の旧地形と区割図……9
第2図　天ヶ城跡遺構配置図……11～12
第3図　土坑実測図(1)……13
第4図　土坑実測図(2)……14
第5図　土坑出土遺物実測図……15
第6図　溝状遺構断面図(1)……16
第7図　溝状遺構断面図(2)……17
第8図　溝状遺溝出土遺物実測図(1)……19
第9図　溝状遺溝出土遺物実測図(2)……20
第10図　掘立柱建物跡実測図(1)……22
第11図　掘立柱建物跡実測図(2)……23
第12図　掘立柱建物跡実測図(3)……24
第13図　掘立柱建物跡実測図(4)……25～26
第14図　掘立柱建物跡実測図(5)……27～28
第15図　掘立柱建物跡実測図(6)……29
第16図　柵列跡実測図……31
第17図　ピット内出土遺物実測図……32
第18図　高岡町内山城分布図……54
第19図　天ヶ城跡中心部旧地形図……55
第20図　天ヶ城跡遺構変遷図……58
付　図　天ヶ城跡遺構図

表目次

表1　掘立柱建物跡計測表……30
表2　出土遺物観察表……32
表3　「高岡名勝志」に見る天ヶ城の曲輪の大きさ…42
表4　出土遺物集計表……56
表5　報告書登録抄……76

写真図版目次

図版1　調査区調査前遠景と天ヶ城全景（東から）、1区遠景と天ヶ城全景（北から）……63
図版2　曲輪12近景（東から）、曲輪11近景（南から）、大手門跡（南から）……64
図版3　曲輪13近景（北から）、堀F近景（北から）、搦手門周辺から下を見る（北から）……65
図版4　1区全景（西から）、1区全景……66
図版5　3区全景（西から）、3区全景……67
図版6　4区全景、5区全景……68
図版7　1号土坑、　3号・4号土坑（北から）、3号土坑（北から）……69
図版8　4号土坑（南から）、2号土坑、1号溝（南から）……70
図版9　1号溝東側断面（東から）、2号溝（南から）、6号溝南側（西から）……71
図版10　6号溝西側（東から）、6号溝西側断面（東から）、6号溝南側断面（北から）……72
図版11　6号溝南側遺物出土状況（南から）、5号・6号建物跡、8号建物跡（西から）……73
図版12　出土遺物(1)……74
図版13　出土遺物(2)……75

I　はじめに

第1節　調査に至る経過

宮崎県は、リゾート法の影響を視野に入れ宮崎市周辺にある観光施設の整備を計ることとなった。それにより、高岡町では、「天ヶ城は高岡のシンボルである」という発想のもと、昭和63年から始まった自治省のふるさとづくり特別対策事業を用いて天ヶ城公園の整備が計画された。天ヶ城跡は中世の山城であるが、山城の遺構は昭和40年代に運動広場建設により曲輪のほとんどは調査することもなく破壊された。残る曲輪はわずかである。そのなかのひとつである本丸跡といわれる曲輪に平成2年から自治省の地域づくり事業により城郭型資料館及び付属施設を建設する計画が具体化された。教育委員会では建物の外観も含めて事業担当課である企画調整課と協議を進めたが計画変更出来ないとのことから、平成3年6月から平成4年10月まで記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

第2節　調　査　組　織

調査の組織は次のとおりである。

町　　長	志知島　敏身	企画調整課長	井上　重男
助　　役	田原　喜久雄	企画調整係長	赤池　敏寛
収　入　役	北　　照雄		

調査主体

高岡町教育委員会

調　査

1991年度		1992年度		1996～1997年度	
教　育　長	篠原　和民	教　育　長	篠原　和民	教　育　長	篠原　和民
教育課長	樋口　律夫	社会教育課長	岩崎　健一	社会教育課長	小谷　清男
社会教育係長	岩崎　健一	兼社会教育係長		課長補佐	梅元　利隆
主　　事	島田　正浩	主　　事	島田　正浩	主　　事	島田　正浩

整　理

また、発掘調査並びに整理にあたり、千田嘉博（国立歴史民俗博物館）、矢野健一（辰馬歴史資料館）、坂本嘉弘（大分県文化課）、大橋康二（佐賀県文化財課）、新東晃一、前迫亮一、八木澤一郎（鹿児島県埋蔵文化財センター）、上田耕（知覧町教育委員会）、岩永哲夫、北郷泰道、菅付和樹、谷口武憲（宮崎県埋蔵文化財センター）、桑畑光博（都城市教育委員会）、金丸武司（田野町教育委員会）、岡本武憲（日南市教育委員会）、廣田晶子（奈良大学学生）の各諸氏からは指導、助言を頂いた。記して感謝の意としたい。

Ⅱ　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

1　地形的環境

高岡町は山林が70%以上を占める。その町中央を蛇行しながら大淀川が東流し、それによって形成された河岸段丘からその東側に広がる宮崎平野を一望する。この大淀川に起因する自然環境が大きく人々の生活を左右していたことはいうまでもなく、しかるに歴史的要因にも導かれていた。遺跡は大淀川南岸の独立した丘陵である。周囲は一段低い台地が四方に広がり遺跡がある丘陵のみが突出している。このような地形について合原敏幸氏[1]は「高岡町南部の高岡山地中央部及び東部には白亜紀の四万十累層群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、一部玄武岩、凝灰岩などの塩基性岩類が含まれる。内之八重付近の砂岩頁岩互層中には塩基性岩類に伴って、厚さ１ｍ～２ｍのチャートが見られる。高岡山地西部には、古第三紀の四万十累群に属する砂岩を伴う頁岩、砂岩頁岩互層が分布しており、高岡山地を南北に横切る高岡断層によって前述の白亜紀の層に接している。高岡町の中心部付近及び高岡山地北部には、新第三紀の宮崎層群に属する砂岩、泥岩、砂岩泥岩互層が広い範囲で分布している。本層は四万十累層群を傾斜不整合の覆う海成層で、貝、カニ、ウニ等の化石を含む。さらに、町中心部付近に及び西部は宮崎層群を不整合に覆い第四紀の礫、砂、及び粘土からなる段丘堆積物、主にシラスからなる姶良噴出物、及び主に礫、砂シルトからなる沖積層がみられる。段丘堆積物、姶良火山噴出物は急傾斜とその上の広い平坦面や緩斜面から形成される台地状の地形を有している。沖積層は、大淀川、浦之名川、内山川、飯田川等の河川流域沿いに分布している。」（高岡町埋蔵文化財調査報告書12集より抜粋）としている。

(1)高岡町役場都市計画課主任主事

2　歴史的環境

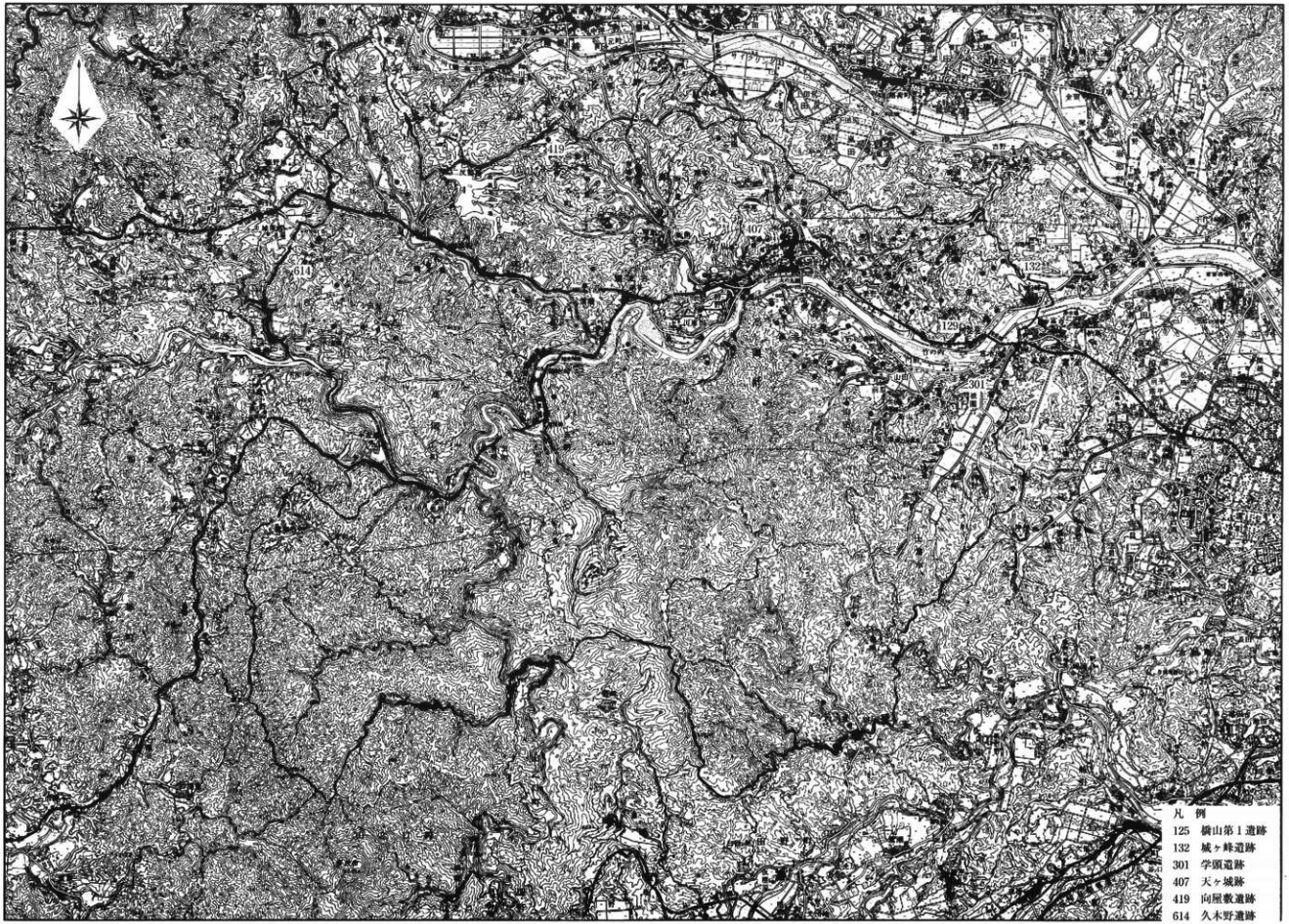
高岡町の遺跡は、現在140箇所以上ありそのほとんどは河川により形成された台地上に位置している。

旧石器時代

調査は綾町との町境付近に位置する向屋敷遺跡のみ実施されている。集石遺構とともにナイフ形石器やスクレイパーが出土した。また、石材で五女木産の黒曜石が１点ではあるが確認されている。さらに表採資料としては、野尻町に近い大字浦之名一里山地区で剥片尖頭器がある。

縄文時代

この時代は調査例が多く草創期以外はすべて確認されている。なかでも早期の調査例は多く、宗栄司遺跡、久木野遺跡、橋山第１遺跡、橋上遺跡、八久保第２遺跡、板原遺跡、中原遺跡が調査されている。橋山第１遺跡は集石遺構が検出され、前平、吉田、下剥峰、桑ノ丸、平椎、塞ノ神、苦浜、押型文等の各形式の土器が出土した。また、久木野遺跡では轟１式がアカホヤより下層から出土した。その他の遺跡でもそれぞれの遺物は出土しているが、石坂式だけは出土例がなく出土例が少ない県内にあっては同じような状況である。さらに遺構は集石遺構が中心で高岡町では住居跡は検出されていない。



第２図　高岡町遺跡分布図

また、交易圏を考えるうえでひとつの鍵となる黒耀石も九州島各地のものが出土しておりデータの蓄積をおこなっている。前期は久木野遺跡第1区で包含層から轟B式が出土している。中期は同じく久木野遺跡で春日、大平、岩崎下層の各形式のものが出土している。後期は横山第1遺跡で阿高系の土器や疑似縄文の土器が出土した。さらに久木野遺跡では円形竪穴住居跡とともに北久根山式が出土している。城ヶ峰遺跡では市来式や北久根山式が出土した。また、表採資料ではあるが山子遺跡、赤木遺跡等でも確認されている。晩期は黒色磨研土器が学頭遺跡から出土している。

弥生時代

調査された遺跡からはⅣ～Ⅴ期が中心に出土しておりⅠ～Ⅲ期は出土例がない。標高15メートル程の微高地状のところに位置する学頭遺跡からは断面V字状を呈する溝状遺構や竪穴住居跡が検出された。

古墳時代

調査は、まず、住居址の調査としては学頭遺跡や高岡麓遺跡第5地点がある。高岡麓遺跡では2軒の竪穴住居跡が検出され5世紀中頃に比定されている。両遺跡とも標高がほぼ同じで大淀川の氾濫源である低地に位置しており、農耕集落の一端をみることが出来る。次に墳墓の調査としては久木野地下式横穴墓群がある。今まで3基の調査がおこなわれ、人骨とともに鉄斧や玉類が出土し6世紀前半としている。また、町内には3基の県指定古墳があり円墳となっている。その古墳の近くで耕作中に壷が2点と鉄製品が発見されている。

古　代

高岡周辺は浄平年間（931～938年）の和名抄から、その当時は「穆佐郷」いわれていた。それより遡る時代の遺跡が確認された。ひとつは麻野遺跡で、大淀川北岸の丘陵（大字花見）に位置し、9世紀後半の土師器の椀、皿などを生産した焼成遺構が6基以上検出された。また、宗栄司遺跡や二反野遺跡で類似した土師器椀が出土している。八児遺跡では方形の竪穴住居跡にともない煙道付きのカマドが検出された。

中　世

建久図田帳によると高岡は、12世紀には「島津庄穆佐院」といわれていた。その後、南北朝期を経て、島津氏と伊東氏の対立を迎える。その中心となったのが穆佐城である。穆佐城は足利尊氏が九州の拠点としたことからはじまる。その後、島津久豊・忠国の居城、そして伊東氏48城のひとつとなっていく。そのなかで、穆佐城周辺の大淀川沿いにも小規模な山城が点在し、戦国の時代へと入っていく。平成3年には穆佐城の縄張り調査を実施し、その成果として、南九州特有の特徴をもつとともに機能分化のみられる山城であることがわかった。

近　世

中世までは高岡の中心地は穆佐城周辺だったのに対して江戸の時期なると天ヶ城周辺に一変する。鹿児島藩は、天ヶ城と穆佐城の麓地に多くの郷士を移住させ麓を形成させた。そして、綾、倉岡とともに関外四ヶ郷として、特に高岡郷はその中心として鹿児島藩の東方の防衛の要として発展する。高岡の地頭仮屋を中心に広がる高岡麓遺跡は、計画的な街路設計がなされ、郷士屋敷群と町屋群に分割されている。調査はすでに11箇所で実施され、町屋を調査した第1地点では大火跡と思われる焼土層の下から素堀の井戸や土坑を検出した。さらに、第5地点では郷士屋敷群の一角を調査し建物跡や陶磁器類を検

第3図　遺跡周辺地形図

出、第8地点では武家門の下部構造を明らかにさせた。このように近世の遺跡の調査は高岡麓遺跡だけに留まっているが、道路脇などにある石塔類からも当時の状況を知ることができる。

第2節　遺跡の概要

1　調査経過

調査対象面積が約1万m²で、それを4層に分けて調査をすることになった。そのため、調査地を5地区に区分けし、調査地全体を被せるためのグリットを設定した。グリットは10m四方とし、任意の記号を西側からA・B・・と付し、北から1・2・・と付した。調査は、資料館建設予定敷地部分を第1区として1991年6月から伐採作業を始めた。ここは、アカホヤ火山灰層（Ⅱ層）上面までは耕作による攪乱を受けていた。そのため、まずその面で遺構検出をおこなったが、蜜柑栽培による攪乱坑がかなり密在しており、残存遺構も部分的に削平を受けていた。そこではL字状の中世の溝やピット群を検出。次にⅡ・Ⅲ層を除去後、Ⅳ層とⅤ層の掘削をおこない縄文早期の遺構や遺物を検出し、11月に終了した。次に1区の西側を2区とし12月から調査をはじめ、2月に終了した。3区は当初の計画では施設建設予定だったところで、調査区域の一番西側にあたる。4月から表土剥ぎを実施し遺構検出をおこなった。それにより断面V字状でL字状に延びる溝とその溝に囲まれるように2棟からなる堀立柱建物が検出された。この遺構は残存状況が良好なことから新聞報道がなされ、高岡町ではこの遺構の取り扱いについて検討することとなった。そのため、3区の調査は一時中断し、資料館建設予定敷地の北側を4区として5月から調査を実施した。その間、3区の遺構については町議会の視察があり、さらに保存整備して活用することを中心に町三役を含めた協議がおこなわれた。その結果、遺構（L字状溝の西側のみ）は埋め戻して保存することとなり、その活用についてはさらに協議を続けることとなった。そのため、その溝で囲まれた外側のみ下層の調査を実施し8月に調査を終了した。5区は3区の南側に設定され、断面V字のL字状の溝の延長部分とここでも堀立柱建物跡が検出された。そのため、この部分も埋め戻して保存することとなった。ただし、下層（縄文期）の状況を把握するために調査区南端にトレンチを設定し、1992年10月をもって全調査を終了した。

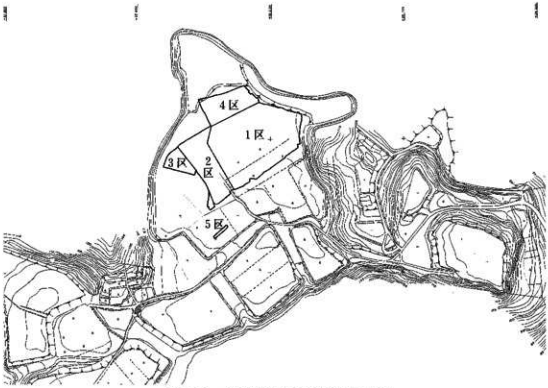
2　遺跡概要

(1)　位置と地形

遺跡は宮崎県東諸県郡高岡町大字内山3,003―56番地である。大淀川の北岸に位置する標高120m程度で頂上面積約10万m²程の独立した丘陵である。周囲は急傾斜が巡り東側を一望できることから中世の山城としても機能していた。すぐ南側の麓が高岡の中心地であり、近世から発展した町並みが広がる。調査地はその丘陵の1画であり、山城の中では主郭といわれる。その区画は面積にして約1万m²、東側で標高124mと一番高く西側へ緩やかに傾斜していく。

(2)　基本層序

調査地は部分的な造成が頻繁におこなわれていたと思われるが、耕作土が深く造成面を検証することは出来なかった。耕作土下はアカホヤ火山灰層（Ⅱ層）となり二次アカホヤ層も含めている。牛のすね



第4図　遺跡近辺の旧地形と区割図

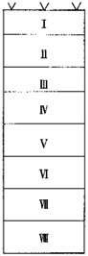
ローム相当層がⅢ層。Ⅳ層下位とⅤ層が縄文早期包含層である。Ⅵ層は小林軽石を含む。Ⅶ層は淡い茶褐色土である。全体に緩やかではあるが南西側に傾斜している。Ⅳ層は調査地東側と北側（10グリット以北）で10～20cmの堆積が確認されたが、それ以南では5cm以下の堆積でほとんど確認できない。また、ATは確認されていない。

(3) 概　要

調査面積はⅡ層が約7,000m²、Ⅴ層が約5,200m²であった。

Ⅱ層調査では、遺構は土坑が10基、堀立柱建物跡9棟、溝状遺構8条を検出し、遺物は土師質皿をはじめ瓦質土器、須恵質土器、青磁や染付などの輸入陶磁器、国産陶器、土錘、軒平瓦が出土した。まず、東西南北に軸をもつL字状の溝が二条検出された。そのうちの一条が断面V字状の溝で、それに囲まれて2間×4間の2面庇と2間×5間の3面庇の堀立柱建物跡（2棟とも総柱）が検出された。さらにその溝が短期間で埋め戻され、その上に堀立柱建物跡が検出された。また、土坑は10基確認した。それ以上に存在したことは間違いないがかなりの量の攪乱坑が入り、土坑の形状がほとんど確認できないものが多かった。また、調査区西側は上層面の攪乱が激しく耕作土を剥ぐとⅤ層が露呈していた。そのため、中近世の遺構検出はⅤ層面でおこなった。

Ⅴ層調査では、遺構は集石遺構20基、土坑は床面に2つのピットをもつ陥し穴状遺構の4基を含めて38基を検出した。包含層出土遺物は土器総数3,320点、石器総数487点である。遺物から縄文早期の包含層とした。アカホヤ火山灰層の下から出土した土器は、貝殻文系（吉田式、下剥峰式、桑ノ丸式）、条痕文系（轟式、一野式）、押型文系（下菅生B式、沈目式、田村式）、桑ノ丸式と山形押型文の折衷したものや、押型文土器のなかでも従来の形式設定では当てはまらないものも出土している。遺物の出土



Ⅰ層　耕作土である。暗褐色土で弱粘性をなし小砂粒を含む。アカホヤ面で確認されたピット群はこれよりもやや暗い感じの弱粘性土である。

Ⅱ層　アカホヤ火山灰層である。上面に粒子が細かい暗黄色の２次アカホヤが堆積し、下部にはブロック上の黄色土が堆積する。

Ⅲ層　牛のすねローム層である。堆積は10cm程度であるが、堅くしまっており淡い青灰色をなす。ここからの遺物は無い。

Ⅳ層　淡い褐色土である。粘性があるが部分的に暗褐色土がブロック状に含まれる。北側ないし東側で厚く（20cm前後）堆積するが、南側にいくほどみられなくなる。包含層であり遺物が数点出土している。

Ⅴ層　縄文早期の包含層で黒褐色土をなす。全体的に10～20cmの堆積である。

Ⅵ層　弱砂性のにぶく灰色がかった褐色土で非常に硬質である。下部に黄色の小林軽石が堆積する。

Ⅶ層　淡い茶褐色で粘性は弱いが砂性ではない。

Ⅷ層　にぶい黄褐色土で硬質

第５図　基本層序柱状図

量は押型文土器と桑ノ丸式土器がそのほとんどである。また、石器は石鏃、石槍、スクレイパー、石斧、敲石、磨石、門石、台石が出土している。

Ⅲ　縄文時代の調査

第1節　概　　要

地形は東側が高くKグリット列からⅠグリット列にかけては傾斜がやや大きいが、Hグリット列から西側にかけては傾斜が緩み、平坦気味となる。全体的には南西側に緩やかに傾斜する。調査は調査区を1～5区で分割して実施したが、3区については東側のみの調査である。遺構や遺物はⅣ層下位とⅤ層で検出され、遺構は集石遺構20基、土坑38基を検出し、包含層出土遺物は土器総数3,320点、石器総数487点である。集石遺構は土坑と底石を設けるものや礫の集積だけのものが中心である。土坑は平面隅丸長方形状のものが多く出土した。その中には床面にピットをもつ陥し穴状遺構も4基出土している。包含層は遺物から縄文早期としたが、包含層は後世の削平によりJグリット列とKグリット列は存在しない。またC14・15グリット付近は包含層の調査は実施していないが、歴史時代検出面ですでにⅤ層が露呈しており、そこからも遺物の出土があった。遺物は貝殻文系円筒土器（吉田、下剥峰、桑ノ丸）や押型文土器が出土した。さらに、それらが折衷した土器も数点出土している。石器では石槍（サヌカイト製）が出土した他、黒耀石原石が集中して検出され交易の一端を見ることができる。

第2節　遺構と遺物

1　遺　　構

(1) 礫　　群

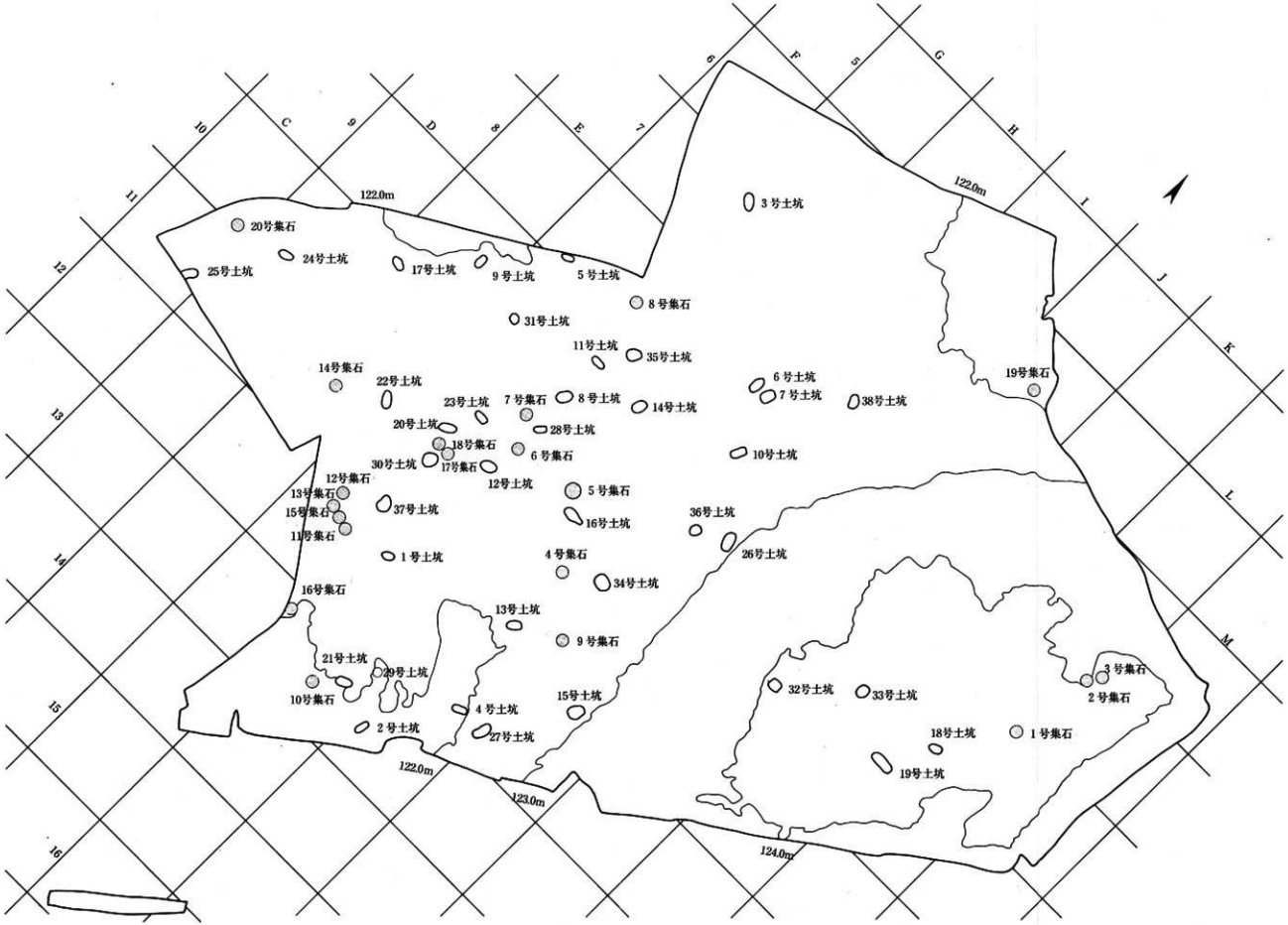
礫群は第Ⅴ層上面を中心に検出された。分布域は調査区全域であるが、Jグリット列とKグリット列は後世の削平によりほとんど確認されない。また、7グリット列から北側もほとんど確認されておらず分布域の北端である。また、C14・C15グリット近辺もⅤ層の露呈部分から多くの礫が散在していたことで、分布域がそこらあたりまで広がっていることがわかる。第7図は礫群の分布状況をグリット毎の礫数で表したものである。これによると礫が集中するところは、11グリット列西側と12グリット列西側で集石遺構の分布に重なる。数量にしてH12グリットが4,768点、F12グリットが3,961点の出土である。石材もほとんどが砂岩で赤化していた。

(2) 集石遺構

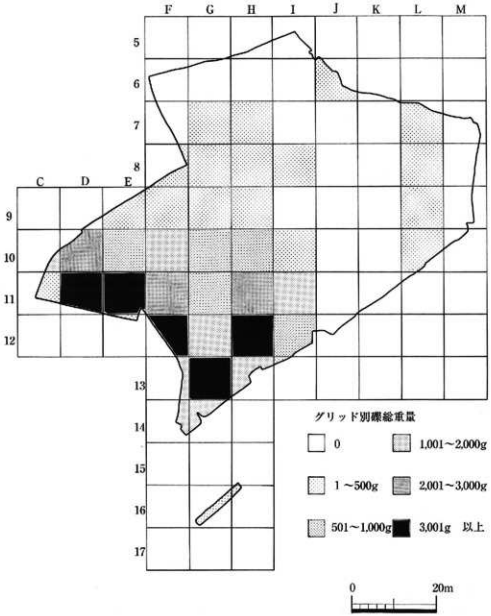
1号集石（10図）

L9グリットで検出された。径0.9mのほぼ円形状に集積する。礫の規模は20cm大の長楕円状のものを数点とその他は拳大程度の礫で、扁平な礫は3点ほどである。礫の堆積は中心部で堆積深度幅0.2mでやや深くなるがそれ以外は0.1mである。また、礫同士の密着具合や方向からは規則性は感じられない。礫は全体的に赤化しており、それにおいての極端な強弱は見られない。

2号集石（9図）



第6図　縄文時代遺構配置図



第7図　縄文時代焼礫分布図

L 8グリットで検出された。構成礫は97点で径0.6mのなかに密に集積する。礫の堆積深度幅は10～15cmで深さは一定している。構成礫の重量は700g以上のものはなく、100～200gが37点で一番多い。

3号集石（10図）

L 8グリットで検出された。構成礫は72点で径0.6mに密集して集積する。礫は重量のあるものが多く、200g以下がそのほとんどを占める他の集石遺構とは異なる。砂岩を使用しており、赤化した礫が多いがそうでない礫も数点ある。

4号集石（10図）

H11グリットで検出された。径1.1mと0.8mの楕円形状に集積する。礫の規模は拳大の礫がほとんどであるが20cm以上の扁平な礫も数点存在する。この扁平な礫の出土状況はこの遺構に配石遺構が伴うと断言できるものではない。扁平な礫が配石として使用された可能性は否定するものではないが、この遺構での出土状況は床面が攪乱を受けたものかまたは移動後廃棄された痕跡かどちらかであろうと思わ

れる。礫の堆積は浅く、掘り込みも確認できない。

5号集石（9図）

G10グリットで検出された。径1.8mと1.6mの楕円形状の浅い掘り込みの中に強い熱を受けた礫が遺構内北側に集積する。礫は全体が密集することがなく散乱しており、土坑床面よりやや浮いた状態で出土する。

6号集石（10図）

G10グリットで検出された。径0.6mに105点の礫が堆積する小規模な集石遺構である。中央に偏平な礫1枚を置きその周りに拳大以上の礫が集積する。礫の堆積深度幅は底石部分が15cmで一番深くなる。礫は全体的に焼けており赤化している。

7号集石（9図）

G10グリットで検出された。この遺構は掘り込み検出面の上面にあった礫群の礫を除去した段階で確認された。長軸1.1mと短軸1.0mの円形に近い掘り込みがある。その中に構成礫94点が散在する。構成礫は50～200gが多く1.5kg以上の礫はない。

8号集石（9図）

G8グリットで検出された。構成礫は267点で、長軸1.0mと短軸0.8mの楕円形状に集積する。

礫の重量はそのほとんどが200gまでのものである。礫の堆積状況は、外側が密で中央部分は粗となるが、中央部分は深く外側は浅い。石材は砂岩が使用され、そのほとんどは赤化している。

9号集石（10図）

H11グリットのV層上位で検出された。北側部分で底石と思われる偏平な礫がありその部分のみ拳大の礫が比較的密に集積する。それ以外は散漫で径1.1mと0.7mの楕円形状に広がる。礫は全体的に赤化している。構成礫は全部で336点を数え、100gまでの礫は215個でそれらの礫は完形ではなくほとんどが欠損している。この遺構の中心は底石がある部分と思われ、南側に散在する礫は底石を覆っていた礫の一部であろうと推測する。

10号集石（8図）

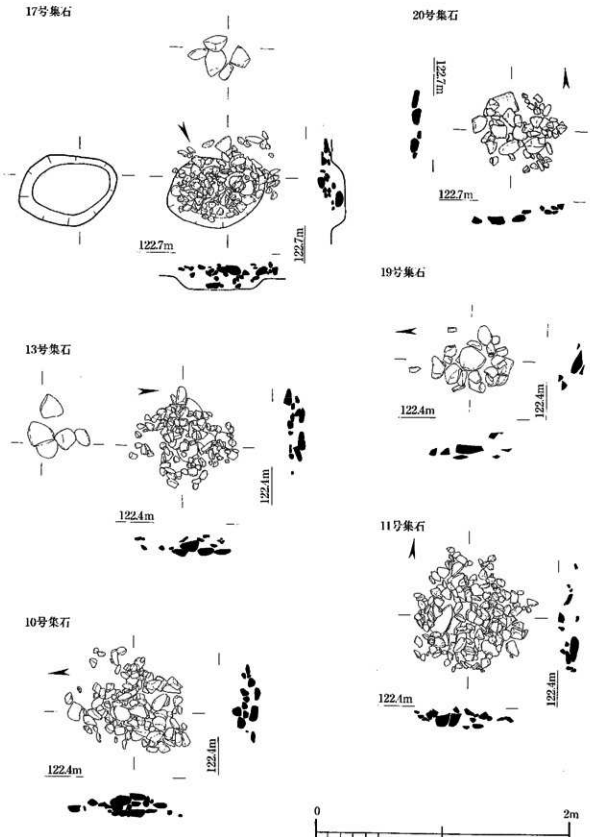
G13グリットのV層下位で検出された。構成礫142点が短軸0.7mと長軸0.9mのなかに集積する。礫の重量は50～200gが多いが、2kg以上の礫はない。礫の堆積深度幅は10～20cmで中央部が密に堆積している。石材は砂岩が主としていており、全体に強く赤化している。

11号集石（8図）

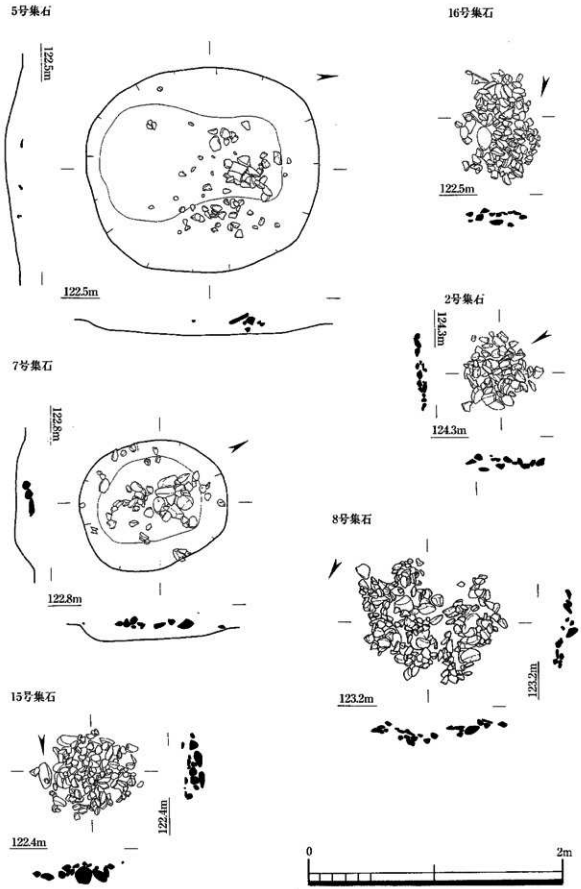
F12グリットで検出された。北西側に15号集石があり集石遺構の形成過程における意味から関係が深いものと推測する。底石は確認されたが掘り込みはない。構成礫は424点でこの遺跡の中では一番多く、200gまでの小規模な礫が327点で全体の77%を占める。礫は径0.9mの円形状に底石は25～30cmほどで2kg以上の扁平な礫が2枚と長方形状の礫の一側面を利用しているが密に敷き詰めた風ではなく、底石が部分的に撹乱を受けたものと思われる。北側を構成する礫は赤化しておらず、それ以外の構成礫や底石は焼けて赤化している。

12号集石（10図）

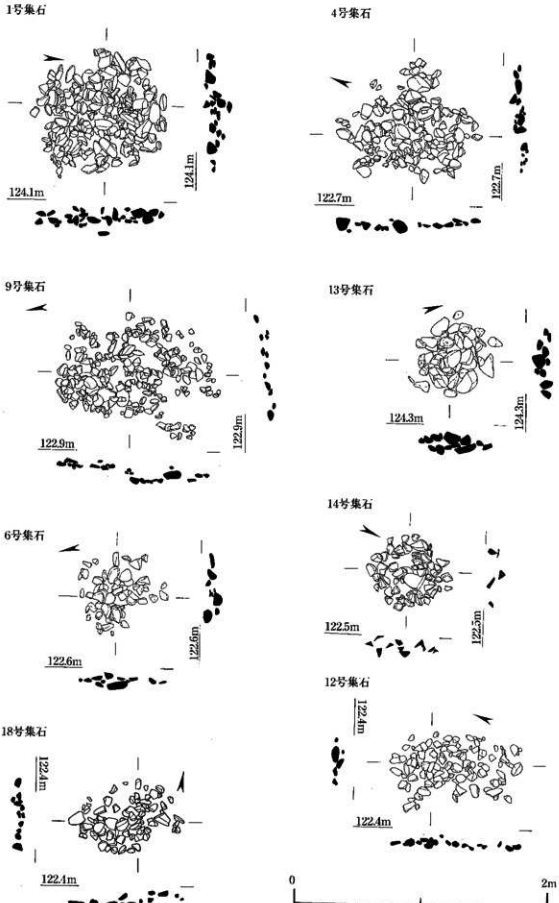
F12グリットで検出された。構成礫は137点で長軸1.0mと短軸0.5mの楕円形状に集積する。礫の重量は100～200gまでのものが多く800g以上の礫はない。石材は砂岩を使用している。



第 8 図　集石遺構実測図(1)

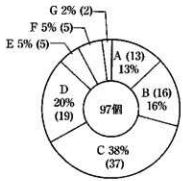


第９図　集石遺構実測図(2)

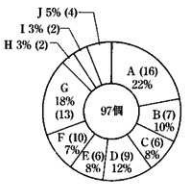


第10図　集石遺構実測図(3)

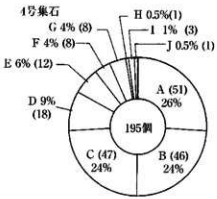
2号集石



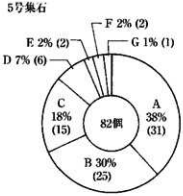
3号集石



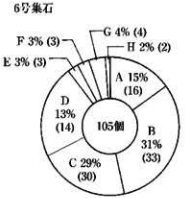
4号集石



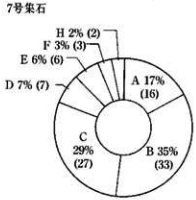
5号集石



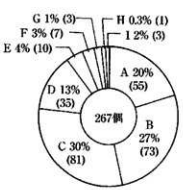
6号集石



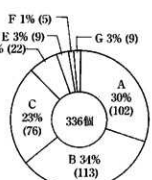
7号集石



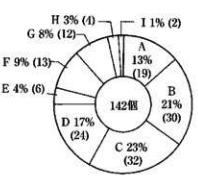
8号集石



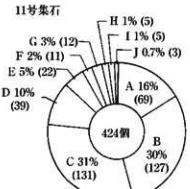
9号集石



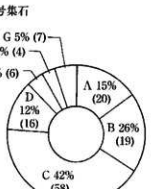
10号集石



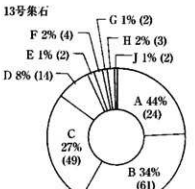
11号集石

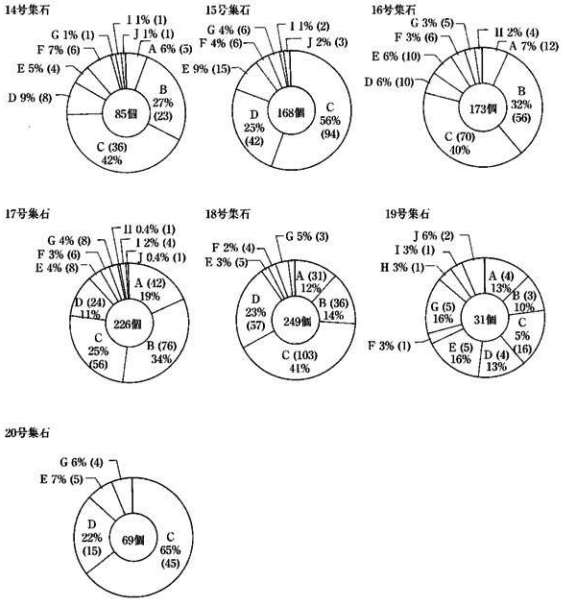


12号集石



13号集石





13号集石（8図）

F12グリットで検出された。東側には11号集石と15号集石が隣接する。底石として扁平な礫を5枚確認した。その上に拳大前後の礫が散在する。この遺構の構成礫は181点で100～200gが多い。それらのほとんどは赤化しており欠損する。

14号集石（10図）

E11グリットで検出された。礫は径0.6mの円形状に集積する。構成礫は85点で50～150gが多く59点である。中央に偏平な礫が1点あり、そこを中心にドーナツ状に礫が堆積する。礫は全体的に赤化している。

15号集石（9図）

F12グリットで検出された。南東側に11号集石が隣接しておりこの遺構との関係が深いものと思われる。径0.7mと0.5mの楕円形状に168個が集積する。100g以下の礫はなく、100～200gの礫の数が一番多い。構成礫の中では一番大きな礫と偏平な礫を中央に据えるが底石という風ではない。礫の堆積深

度幅は20cmで全体に密集して堆積している。また、礫の焼け具合は東側の礫を除いて全体に赤く焼けている。

16号集石（9図）

F13グリットで検出された。底石や掘り込み等の施設はない。長軸0.8mと短軸0.6mの楕円形状に173点の礫が集積する。礫の重量は100～200ｇが多く比較的密集した堆積状況である。ほとんどの礫は赤化している。

17号集石（8図）

F11グリットで検出された。長軸0.85mと短軸0.55mの楕円形状の浅い掘り込みと底石をもつ。掘り込み全体のプランは上部の礫が除去されて確認された。掘り込みの床面は平坦で壁はしっかりと立ち上がる。底石は偏平な礫５枚がその掘り込み床面中央に配される。偏平な礫は20cm前後の大きさで密に接している。その上に拳大前後の礫が南西側に寄るように、しかも上面で検出され掘り込みの凹からはあまり検出されない。石材は砂岩を主としている。

18号集石（10図）

F11グリットで検出された。構成礫は249点で、長軸0.9mと短軸0.6mの楕円形状に集積する。礫の重量は100～200ｇまでが多く103点で小規模な礫が多く、１kg以上の礫はない。礫の堆積は深度幅は10cm程度である。石材は砂岩を使用している。

19号集石（8図）

Ｊ６グリットで検出された。構成礫は31点で礫の重量は偏りがない。扁平な大きめの礫を中央に置き、その周りに他の遺構と比べるとやや大きめな礫が散在する。石材は砂岩で赤化している。

20号集石（8図）

C11グリットで検出された。構成礫は69点で100～200ｇが多い。底石となりうる扁平な礫を３～５枚ほど配しその上に拳大前後の礫が散在する。礫は砂岩を使用しているが、すべて赤化している。

底石の部分は放棄されたときに伴う攪乱がみられ、20号集石の関係礫は東側に散在すると推測する。

(3) 土　坑

土坑は38基検出されたが、すべて礫群を除去した後のⅥ層で検出した。埋土はすべてＶ層と同じ黒褐色土に酷似しており識別は困難であった。

１号土坑（11図）

G12グリットで検出された。平面は長軸1.2mと短軸0.7mの楕円形を呈し、東側にやや張り出す。床面は長軸0.9mと短軸0.35mの楕円形で北側にやや傾斜して下がるものの平坦に近い。その床面に径0.1mのピットを0.3mの間隔で２カ所有す。南西側のピットは深さ0.15m程度で床面は平坦である。北東側のピットは南西側のプランが明確ではなく、壁面が南西側ピットに向かって緩やかに立ち上がる。土坑は残深1.3mで壁面は80度以上の傾斜で立ち上がる。

２号土坑（11図）

H13グリットで検出された。平面は長軸1.5mと短軸0.6mの隅丸長方形状を呈する。床面は長軸1.0mと短軸0.3mの隅丸長方形で平坦である。その床面に径0.15mのピットが約0.4mの間隔をあけて２カ所在る。ピットの深さは0.15mと0.1m弱で、ピットの断面は両方とも尖底状となる。土坑の深さは1.15m

で壁面は1号土坑同様80度の傾斜で立ち上がる。

3号土坑（11図）

G7グリットで検出された。平面は長軸約1.9mと短軸約1.0mの砲弾状を呈す。床面は平坦で長軸1.15mと短軸0.45mの隅丸長方形であるが壁面を抉る。その床面に2カ所ピットを有する。南東側のピットは径0.2mで深さ0.2mの床面平坦である。北西側のピットは長軸0.3mと短軸0.15mの長方形でテラス状の段をもつ。土坑の深さは1.9mをはかり、壁面は稜線が入る程度の段を有しながら傾斜角80度以上で立ち上がる。

4号土坑（11図）

H12グリットで検出された。平面は長軸1.5mと短軸0.7mの隅丸長方形状を呈し、深さは1.1mで壁面は1、2号土坑同様80度以上の傾斜でまっすぐ立ち上がる。床面は平坦で長軸1.1mと短軸0.5mの長楕円形を呈す。床面には径0.15m前後の2つのピットが0.35mの間隔で在る。

北東側のピットは深さ0.25mで床面平坦で、南西側のピットは深さ0.15mで断面尖底気味となるが、両方とも土坑床面に対してほぼ垂直である。

5号土坑（12図）

F8グリットで出土した。平面は長軸1.25mと短軸0.7mの長楕円形を呈し、壁面の立ち上がりは、はじめ垂直気味であるが途中から緩やかとなる。床面は長軸0.55mと短軸0.3mの長楕円形を呈し東側にやや傾斜して下がる。

6号土坑（12図）

H8グリットで検出された。平面は長軸1.7mと短軸1.0mの楕円形を呈し、北側に三日月形をしたテラス状の段を有す。深さは0.7mで、壁面は傾斜角70度以上で立ち上がる。床面は長軸0.8mと短軸0.35mの砲弾形で平坦である。

7号土坑（12図）

H8グリットで検出された。平面は長軸1.7mと短軸1.15mの隅丸長方形を呈し、深さは0.6mをはかる。床面は平坦で長軸0.85mと短軸0.4mの長楕円形を呈す。壁面は北から東側にかけては緩やかに立ち上がり、南から西側にかけては最初は垂直気味に立ち上がるが0.2～0.3mのところで傾斜したテラス状の段をつくりながら立ち上がる。

8号土坑（12図）

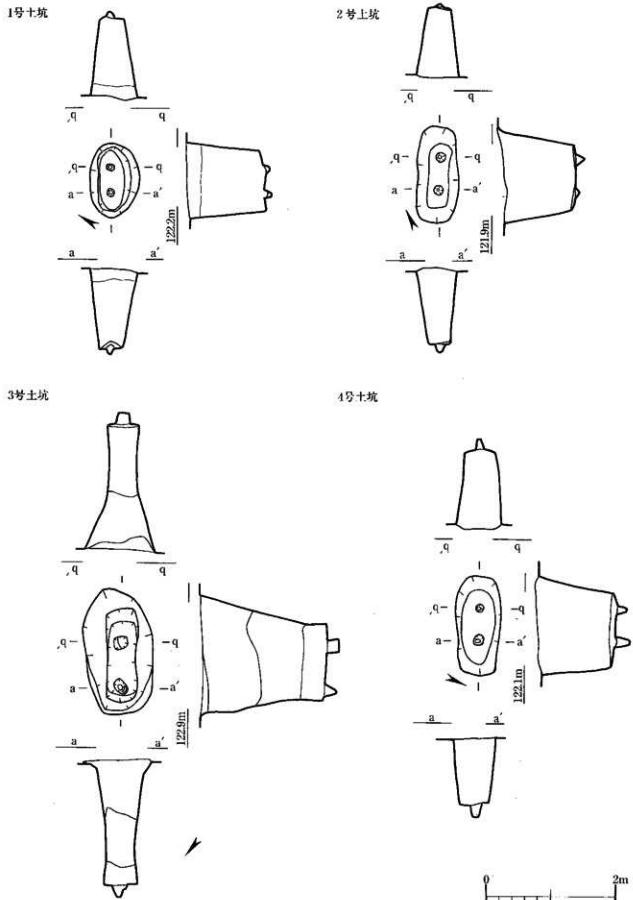
G9グリットで検出された。平面は長軸1.65mと短軸0.5mの長楕円形を呈し、深さは0.85mをはかる。床面はほぼ平坦で、長軸0.85mと短軸0.4mの隅丸長方形状を呈す。壁面は傾斜角80度で立ち上がるが検出面近くで傾斜角45度になる。

9号土坑（12図）

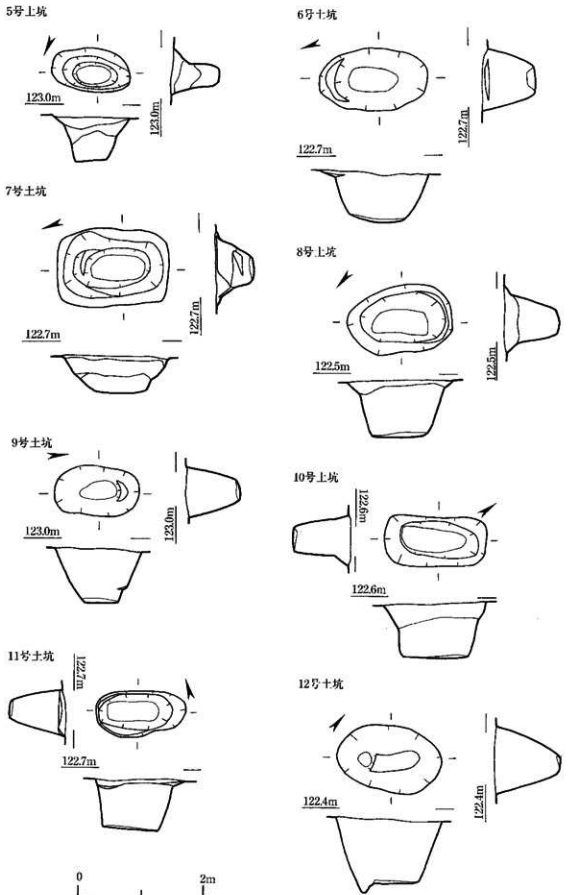
E9グリットで検出された。平面は長軸1.45mと短軸0.8mの長楕円形を呈し、北側に三日月形をしたテラス状の段を床面から近いレベルに有す。床面は平坦で長軸0.6mと短軸0.3mの砲弾状を呈す。壁面は傾斜角60～70度で立ち上がる。

10号土坑（12図）

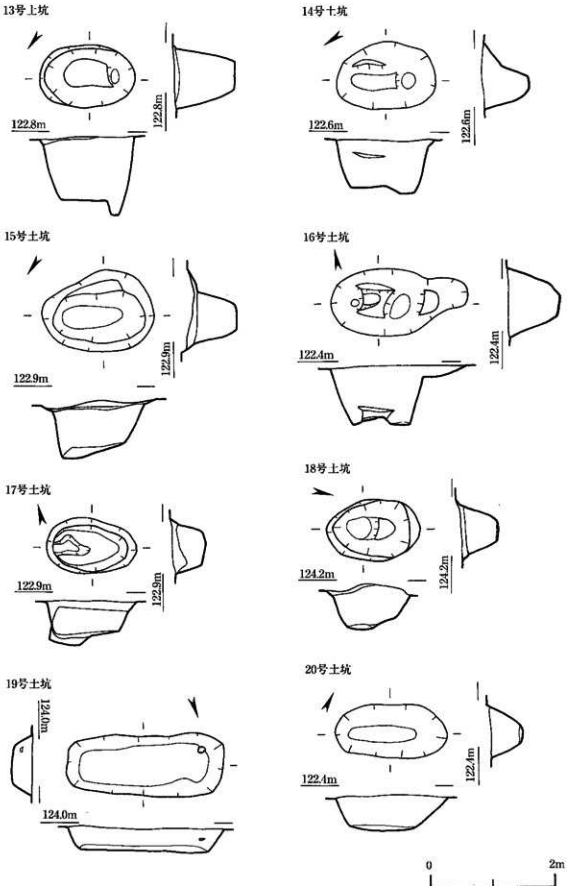
H9グリットで検出された。平面は長軸1.6mと短軸0.75mの隅丸長方形状を呈し、深さは0.8mをはかる。床面は平坦で、長軸1.05mと短軸0.4mの長楕円形を呈す。壁面は最初はほぼ垂直に立ち上がるが



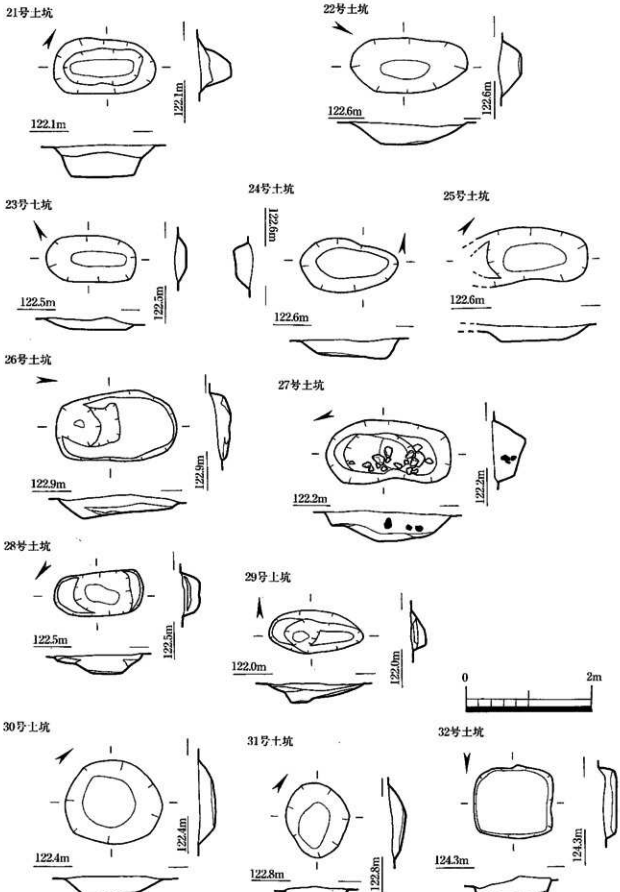
第11図　土坑実測図(1)


5号土坑
123.0m
123.0m
6号土坑
122.7m
122.7m
7号土坑
122.7m
122.7m
8号土坑
122.5m
122.5m
9号土坑
123.0m
123.0m
10号土坑
122.6m
122.6m
11号土坑
122.7m
122.7m
12号土坑
122.4m
122.4m
0
2m

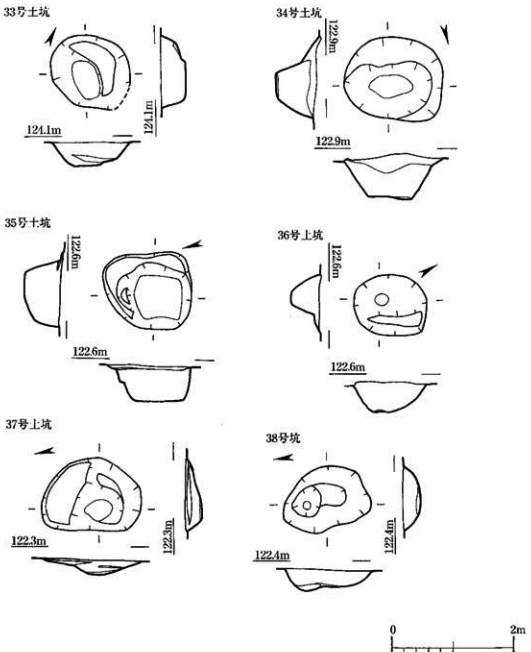
第12図　土坑実測図(2)


13号土坑
122.8m
122.8m
14号土坑
122.6m
122.6m
15号土坑
122.9m
122.9m
16号土坑
122.4m
122.4m
17号土坑
122.9m
122.9m
18号土坑
124.2m
124.2m
19号土坑
124.0m
124.0m
20号土坑
122.4m
122.4m
0
2m

第13図　土坑実測図(3)


21号土坑
122.1m
122.1m
22号土坑
122.6m
122.6m
23号土坑
122.5m
122.5m
24号土坑
122.6m
122.6m
25号土坑
122.6m
26号土坑
122.9m
122.9m
27号土坑
122.2m
122.2m
28号土坑
122.5m
122.5m
29号土坑
122.0m
122.0m
0
2m
30号土坑
122.4m
122.4m
31号土坑
122.8m
122.8m
32号土坑
124.3m
124.3m

第14図　土坑実測図(4)



第15図　土坑実測図(5)

中程から傾斜角45度程度になる。

11号土坑（12図）

9グリットで検出された。平面は長軸1.4mと短軸0.65mの長楕円形でやや南側が張り出す。張り出した部分は傾斜の強いテラス状の段を有し、また、北側は傾斜の緩やかな段を有す。床面は平坦で、長軸0.8mと短軸0.3mの隅丸長方形を呈す。壁面は傾斜角80度程度で立ち上がる。

12号土坑（12図）

10グリットで検出された。平面は長軸1.6mと短軸1.0mの楕円形を呈す。床面は南西側でピット状に一段低くなる。深さは1.0mで一段低いところは床面から0.2mである。壁面は傾斜角度約70度で立ち上がる。

13号土坑（13図）

H11グリットで検出された。平面は長軸1.6mと短軸0.4mの楕円形を呈し、床面は南西側がピット状に一段下がる。深さは0.95mで一段下がったところは床面から0.25mである。壁面は傾斜角70～80度で立ち上がる。

14号土坑（13図）

G9グリットで検出された。平面は長軸1.5mと短軸1.1mの長楕円形状で東側がやや張り出す。床面は2段からなり南西側が低くなる。深さは0.7mで一段低いところはさらに0.1mである。壁面は傾斜角約70度で立ち上がるが東側は途中から緩やかとなり35度で立ち上がる。

15号土坑（13図）

I11グリットで検出された。平面は長軸1.75mと短軸1.3mの楕円形で、南東側が張り出す。床面は北側に大きく傾斜し低くなる。壁面は傾斜角80度程度で立ち上がり、検出面に近いところで緩やかとなる。

16号土坑（13図）

H10グリットで検出された。平面は瓢箪形に似た歪な形状である。西側の突出したところは浅くテラス状の段になる。床面は平坦ではなく東西にピット状の段がある。壁面は傾斜角70度前後で立ち上がる。

17号土坑（13図）

E10グリットで検出された。平面は長軸1.4mと短軸0.85mの楕円形を呈す。床面は平坦であるが西側の壁面を抉るように不定形な落ち込みがみられる。

18号土坑（13図）

L9グリットで確認された。平面は長軸1.4mと短軸0.95mの楕円形で、床面は高低差0.1mの段を有す。壁面は60～70度の傾斜角で立ち上がる。

19号土坑（13図）

K10グリットで検出された。平面は長軸2.4mと短軸0.9mの隅丸長方形を呈す。床面は平坦で壁面の立ち上がりもしっかりしている。出土遺物は縄文土器（遺物番号3）である。

20号土坑（13図）

F10グリットで検出された。平面は長軸1.7mと短軸0.8mの長楕円形を呈す。床面も長軸1.1mと短軸0.3mの長楕円形で平坦である。壁面は東側が傾斜角約40度で立ち上がる以外は、65度の傾斜である。

21号土坑（14図）

G13グリットで検出された。平面は長軸1.6mと短軸0.4mの長楕円形を呈す。床面は平坦で、長軸0.95mと短軸0.3mをはかる。深さは0.5mで、壁面は最初約70度の傾斜角で立ち上がるが途中から緩やかとなる。

22号土坑（14図）

F11グリットで検出された。平面は長軸1.8mと短軸0.4mの長楕円形を呈し、床面も長軸0.8mと短軸0.3mの長楕円形である。深さは0.4mで、壁面は他の土坑よりも緩やかに立ち上がる。

23号土坑（14図）

F10グリットで検出された。平面は長軸1.5mと短軸0.8mの長楕円形を呈す。床面は平坦で、深さは0.2m弱である。

24号土坑（14図）

D11グリットで検出された。平面は長軸1.5mと短軸0.4mの長楕円形である。床面は平坦で、深さ0.3m

である。

25 土坑（14図）

12グリットで検出された。平面は南側が調査区域外となり全プランはわからないが、長軸1.8m以上、短軸0.8mをはかる。南側にテラス状の段を設け、それより一段低いところで床面となる。深さは約0.2mである。

26 土坑（14図）

9グリットで検出された。平面は長軸1.8mと短軸1.2mをはかる。床面はやや南側に低くなる。深さは0.2m前後である。

27 土坑（14図）

12グリットで検出された。平面は長軸1.95mと短軸0.9mの舟形状を呈す。南北にそれぞれ高さの異なるテラス状の段を設け、床面は土坑中央部が深くなる。土坑中央床面付近からは焼礫の他に焼土の混入がみられる埋土が確認された。土坑自体に焼けた痕跡はないものの、炉穴や集石遺構等の関連遺構であろう。

28 土坑（14図）

10グリットで検出された。平面は長軸1.4mと短軸1.75mの隅丸長方形を呈す。北東側と南西側にテラス状の段を有し、床面は平坦である。

29 土坑（14図）

13グリットで検出された。平面は長軸1.5mと短軸0.7mの長楕円形を呈す。東西にテラス状の段を有す。

30 土坑（14図）

11グリットで検出された。平面は1.3m～1.6mのやや楕円形状の土坑である。深さは0.2mで床面は平坦である。壁面は緩やかに立ち上がる。

31 土坑（14図）

9グリットで検出された。平面は1.1m～0.9mをはかる。床面は平坦で深さは0.3mである。

32 土坑（14図）

10グリットで検出された。約1.2mの方形状の土坑である。床面はほぼ平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。

33 土坑（15図）

9グリットで検出された。平面は、径1.3mのやや楕円形気味を呈す。深さは0.4mで、北側に平坦なテラス状の段を有す。床面は平坦で壁面はしっかりと立ち上がる。

34 土坑（15図）

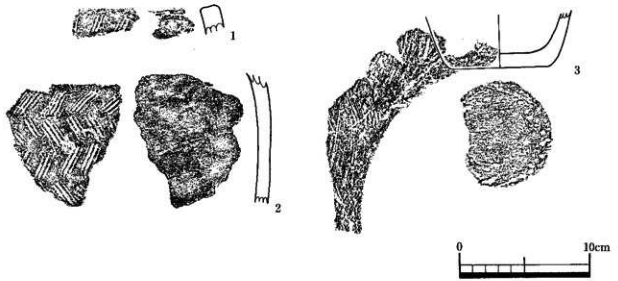
10グリットで検出された。平面は長軸1.6mと短軸1.3mの楕円形を呈する。深さは0.6mで、壁面は東側は傾斜角60度で立ち上がり、それ以外は最初約70度で立ち上がり途中で緩やかとなる。

35 土坑（15図）

9グリットで検出された。平面は台形状を呈し、東側を中心にテラス状の段を設ける。床面は方形状を呈し平坦である。深さは0.6mで、壁面はしっかりと立ち上がる。

36 土坑（15図）

9グリットで検出された。平面は長軸1.2mと短軸1.0mの楕円形を呈する。東側に平坦なテラス状の段を設け、床面の平坦部は狭い。深さ0.5mをはかる。



第16図　遺構内出土遺物実測図

37号土坑（15図）

F11グリットで検出された。平面は不定形で北側に平坦なテラス状の段を設ける。深いところで0.2mである。

38号土坑（15図）

I7グリットで検出された。平面が不定形な土坑である。深さは深いところで0.35mで、壁面の立ち上がりは緩やかである。床面は北側が落ち込み南側がテラス状の段になる。

2　出土遺物

(1)　遺構出土遺物（16図、1～3）

土坑や集石遺構の礫と共に出土した遺物を一括した。1と2は30号土坑から出土した。口縁部が肥厚し内湾するもので外面に羽状の櫛描文を施す。3は19号土坑から出土した。櫛描状の施文具でランダムに浅く調整風に施文される。底部にはもじり編みの痕跡が残る。

(2)　包含層出土遺物

土　器

A群　貝殻文系・条痕文系

I類（4～8）

口縁部に貝殻腹縁やヘラ状工具を利用して縦方向や斜方向に連続施文するもので、器面には貝殻条痕を施す。4は器壁が薄く、縦方向に沈線が連続施文される。5は斜方向に貝殻腹縁連続刺突文が施される。6～8は横方向に連続施文される。

II類（9～19）

口縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文を巡らせ、楔形凸帯を設けたり押引文を施文したりする土器群であ

る。　口縁部に楔形凸帯を伴うものを1類（9～17）、口縁部に鋸歯状の貝殻腹縁刺突文が施文されるものを2類（18）、口縁部に押し引きの手法がみられるものを3類（19）とした。9～11は器壁が薄く口唇部に連続刻目、口縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文線、その下に楔形凸帯を2段以上施す。9は楔形凸帯の貼付部両側に貝殻腹縁で刺突される。10と11は器面に貝殻条痕を残す。15は口唇部に連続刻目、口縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文線、その下に斜位の貝殻腹縁刺突文を施す。そして楔形凸帯を貼付する。16は底部である。18は口唇部に連続刻目、口縁部はやや外反し、横方向の貝殻腹縁刺突文を2列、その下に縦方向の鋸歯状の貝殻刺突文を施す。19は横方向の貝殻腹縁刺突文と横位の押引文を施す。

出土分布図は第36図である。

Ⅲ類（24～45）

貝殻腹縁等を利用して器面に刺突文を施すものを基本とする。貝殻腹縁による刺突文で連点文状になるものを1類（25～29）、貝殻腹縁による刺突が半裁竹管状になるものを2類（24、31～34）、貝殻腹縁を器面に対して斜方向から刺突するものを3類（35～40）、貝殻腹縁刺突文を扇状に施文するものを4類（41～45）とした。1類は胴部のみの出土である。貝殻腹縁刺突文が羽状に施文される。29以外は胎土に雲母が含まれている。2類は口縁部が肥厚し内湾する。32と33は羽状に刺突文が施文される。3類も口縁部は肥厚し内湾する。36と40は同一個体である。4類は口縁部がやや外反気味となる。出土分布図は第37図である。

Ⅳ類（46、47）

器面に貝殻の殻表を利用して器面に対し不規則に押圧文を施すものである。そのため押圧部分は小さくクレーター状に窪む。口縁部は内湾し内面はミガキ調整である。

Ⅴ類（48～244、251～262、264～275）

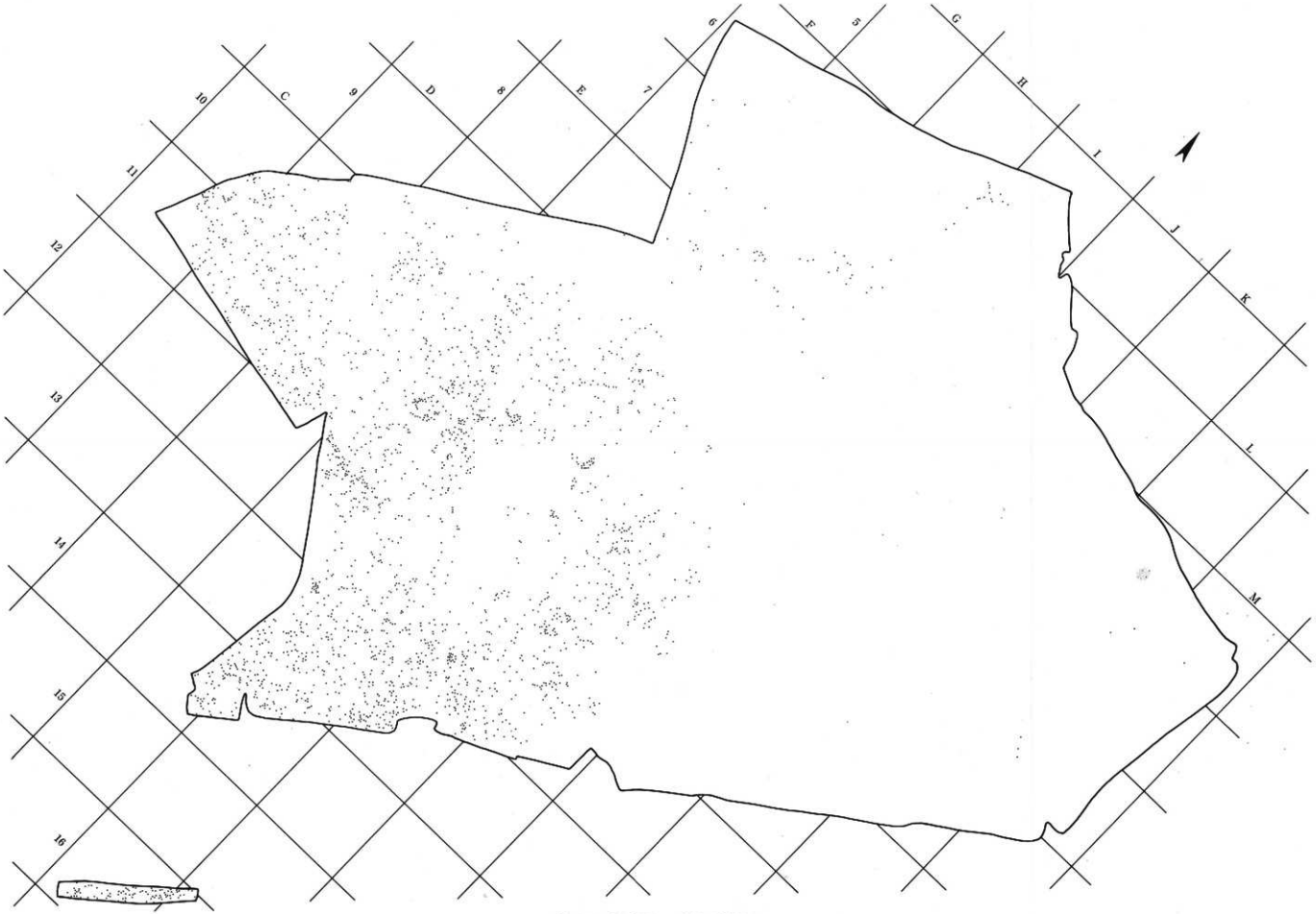
貝殻等を利用して櫛描文を施文するもので、口縁部形態は肥厚し内湾するものが多い。文様構成から下記のように分類した。

1類（48～118）

羽状もしくは鋸歯状に施文するもの。48～53までは密にしかも丁寧に施文される。49は底部付近の破片で表面下部は無文であり、内面下部は下から上方向にナデ調整がみられる。48と同一個体である。51も底部付近の破片である。63と64は同一個体である。74～83は櫛描文の単位がやや長めである。74～76は同一個体と思われる。92～98は櫛描文の単位が小さく施文される。101は穿孔と思われるが貫通はしていない。110～118は櫛描1本々の施文幅が極端に異なり施文が丁寧でなく雑である。

2類（120～157＊136は除く164～168）

ランダムな櫛描文を施文するもの。120～125は短い櫛描文が密に施文される。120と121、そして123～125はそれぞれ同一個体と思われる。122は推定口径24.4cm、125は推定口径24.8cm、147は推定口径21.6cmである。149は推定口径14.1cmでやや小ぶりである。152cmはバケツ状を呈し、口唇部は平坦で口縁部は内湾せず直口気味となる。底部はやや上げ底気味であるが平底である。文様はやや長めの櫛描文を斜位に施文するものを基本とする。一部分で羽状に施文後、その上から斜位に施文している。底部側面は無文である。内面は丁寧なナデ調整である。口径17.9cm、底径9.9cm、器高15.0cmをはかる。154～157は間隔をあけて櫛描文が条線状に施文される。164～168は横方向を意識して施文している。167は推定口径25.2cmである。184は不規則ではあるが密に施文する。



第17図　包含層出土遺物分布状況図

3類（158～163）

無文帯を挟みながら縦方向の櫛描文帯を施文する。160は横方向にも間隔をあけて櫛描文を縦方向に施文する。推定口径19.9cmである。

4類（177～183、185～189）

縦位と斜位もしくは横位に交互に施文するもので1類の羽状文が崩れたような施文である。180～183は縦方向と斜方向の櫛描文を帯状に交互に施文する。

178は斜位と縦位の櫛描文を密に施文する。推定口径は28.2cmである。186～189は横位の櫛描文がはいる。187と188は間隔をあけて施文する。187は横方向に縞模様の櫛描文を入れた後でその間に斜方向の櫛描文を施文する。188は不規則に施文される。

5類（190、194～211、214～225、227、228）

流水文状に施文するもの。190と194と195は流水文の曲部の返りが鋭角で大きい。196と197はランダムな櫛描文と流水文が施文される。199と200は櫛描文の返りが鋭く羽状にもみえるが、施文具を器面から離脱することなく連続施文している。207は横位の流水文状櫛描文である。211～223は流水文の曲部の返りが小さい。211は斜位の櫛描文を流水文状に施文する。推定口径は18.4°である。218と219は同一個体と思われ、口縁部は櫛描文をランダムに施文し胴部に流水文状の櫛描文が施文される。また、221と222は同一個体で、器形はバケツ状を呈し、底部は平底である。口唇部は内傾し、口縁部は直口気味に立ち上がる。推定口径18.0cm、推定器高13.2cm、底径10.6cmをはかる。文様は縦位の条線状の櫛描文と流水文状の櫛描文を交互に施文するが、部分的に斜位の櫛描文がランダムに施文される。224と225は同一個体で横位の櫛描文を流水文状に巡らす。228と229は横位の櫛描文を流水文状に施文する。

6類（229～236）

櫛描文が弧を描くように施文される。内面は非常に丁寧なナデ調整である。

7類

口縁部に条線状の櫛描文を横方向に1本巡らせ、その下に羽状(a)、不規則(b)、縦方向(c)、流水文状(d)の櫛描文を施文する。

(a) 169は口縁部に横位の櫛描文を条線状に1単位巡らせその下に羽状の櫛描文を施文する。

(b) 173～175は口縁部に横位の櫛描文を条線状に1単位巡らせ、その下に縦位や斜位にランダムな櫛描文を施文する。173は推定口径16.2cmで小ぶりである。

(c) 170～172は口縁部に横位の櫛描文を条線状に1単位巡らせ、規則的に間隔をあけて縦位に施文する。

(d) 191は口縁部に横位の櫛描文を条線状に1単位巡らせ、その下に縦位の櫛描文を流水文状に施文する。192は口縁部に横位の短い櫛描文を巡らせ、その下に縦位の櫛描文を流水文状に施す。内面はヘラ状工具によるナデ調整である。推定口径31.8cm、193と同一個体である。212は口縁部に横位の櫛描文を条線状に1単位巡らせ、その下に縦位の櫛描文が流水文状に施文される。213は、口縁部は内湾するが外面に凹線状の窪みが巡る。そこに横位の櫛描文を条線状に1単位巡らせ、その下に縦位の櫛描文を流水文状に施文する。推定口径は26.5cmである。

8類

その他

1 19は縦位の櫛描文を条線状に施文しその間に斜位の櫛描文を施文する。237～244は底部である。

Ⅵ類（251～273）

ヘラ状工具等により沈線文を施すもので、次のように分類した。

1 類（251～253・260）

1 条を 1 単位とする施文具で羽状に施文するもの。253は口縁部が肥厚内湾し、文様は縦に沈線を入れその下に羽状に施文する。251と252は個体が小さく羽状は認められないがここに分類した。260は 2 本の沈線を平行に施文する。

2 類（254～259）

2 条を 1 単位とする施文具で羽状に施文するもの。255は縦に沈線を入れその下を羽状に施文する。内面調整でミガキが認められるものもある。256は口唇部が内傾する。

3 類（264～267、269）

2 条を 1 単位とする施文具で縦、横、斜方向に互いに交差しながら施文される。

4 類（270）

2 条を 1 単位とする施文具で沈線を縦に施す。

5 類（268、271～273）

2 条を 1 単位とする施文具で格子目状に施文される。これらは、条線状の櫛描文を右方向から斜行させ、さらに逆方向から斜行させて格子目状にするものであるが、逆方向からの櫛描文は交差するところで施文具を一端器面から離すようにして施文している。

6 類（263）

1 条を 1 単位とする施文具で縦に沈線を施しその上から羽状に沈線を入れる。口唇部は内傾しミガキ調整である。

Ⅶ類（20、226、246～250）

条痕文系の土器であるが、貝殻文系のなかで取り扱った。口縁部に貝殻腹縁により押し引き風に条痕を施文するものを 1 類（20）とし、器面に貝殻条痕を施文するものを 2 類（226・246～248）、器面に微隆起線文が施されるものを 3 類（249・250）とした。20は器壁が厚く内面の調整が荒いナデ仕上げである。外面は押し引き状の条痕を横方向に施文している。226や246は条線状の櫛描文がランダムに施文される。247は内外面に貝殻条痕が施文されるが、口唇部の刻目は確認されない。249と250は同一個体で、出土層位は第Ⅳ層である。口縁部は直口気味に開き口縁端に連続刻目を施す。文様は外面に板状の施文具を用いて幅広の沈線文を綾杉状に描くもので、それによって微隆起線文をつくる。内面は貝殻条痕による調整である。250は底部で平底をなし、外面文様は不明で内面はナデ調整である。推定口径36.6cm、推定器高39.4cm、底径7.9cmである。

B群　回転施文の押型文土器群

出土したものはすべて深鉢である。そのなかで完形品の出土はなく、個体が小規模なことから分類の基準を口縁部に求めた。そのため、まず器形では口縁部の形態で直口（①）と外反（②）に分類した。①は口縁部が直口または外側にやや開き気味になる程度のもので、頸部にくびれがほとんどみられないものとした。ただし、そのほとんどは早水台式のように尖底の底部からまっすぐ延びて口縁部に続くようなものとはやや異なるのではないかと思われる。②は頸部にくびれをもち、口縁部が外反するもので

あるが、口縁部の上端部分だけ外反させるものもある。ここでは外反の度合いでの分類はおこなっていない。次に文様形態から山形押型文（Ⅰ）、楕円押型文（Ⅱ）、格子目押型文（Ⅲ）、縄文（Ⅳ）、撚糸文（Ⅴ）、その他（Ⅵ）とした。さらに口縁部外面の施文方向（横、斜、縦、その他）と内側の施文形態で次のように分類した。また、外面が不規則施文のもの（特に横方向施文を意識しながら部分的に斜方向に施文するもの。）は斜方向施文の中で取り扱った。そのため横方向施文に分類した中で個体が小さいものについては斜方向の中で取り扱うべきものもあると思われる。文様が小規模なものを外面１～３類とし、文様が粗大化気味となるものを外面４～６類とした。胴部については、色調、胎土、文様等の属性から口縁部の各個体と比較し同一個体の可能性が高いものについてはその口縁部の分類の中で取り扱い、判断がつかないものは胴部一括として取り扱った。

外面施文	内面施文
１類　文様小、横方向施文	a類　横方向施文と原体条痕（櫛状文）
２類　文様小、斜方向施文（不規則施文含む）	b類　短い原体条痕（櫛状文）のみ
３類　文様小、縦方向施文	c類　長い原体条痕（櫛状文）のみ
４類　文様大、横方向施文	d類　横方向施文のみ
５類　文様大、斜方向施文（不規則施文含む）	e類　無　　文
６類　文様大、縦方向施文	f類　そ　の　他
７類　そ　の　他	

Ⅰ　山形押型文（276～365）

口縁部形態①

口縁部が直口気味となるもので、１ａ類、４ｄ類、４ｅ類、５ｅ類がある。

１ａ類（280、281）

口縁部直口、外面横方向施文、内面横方向施文と櫛状文または原体条痕。281は内面が原体径7.32mmで５単位の櫛状文を施文する。

４ｄ類（276）

口縁部直口、外面横方向施文、内面横方向施文。276は推定口径12.8cmで、口縁部がまっすぐ立ち上がり円筒形状となる。かなり小ぶりの土器である。施文原体は径4.65mmの２単位である。

４ｅ類（277）

口縁部直口、外面横方向施文、内面無文。277は口縁上端に幅２cm程の無文体を設け、その下に横方向の山形押型文を施文する。

５ｅ類（278、279）

口縁部直口、外面斜方向施文、内面無文。278は横方向と斜方向の山形押型文を施文する。施文原体は径12.0mm、２単位で文様が大きい。279は間延びした山形文を斜方向に施文するもので、施文原体は径4.46mmの２単位である。

口縁部形態②

口縁部が外反するもので１ｂ類、２ｂ類、３ｂ類以外は出土している。

1 a類（282～285、287、290～317）

口縁部外反、外面横方向施文、内面横方向施文と櫛状文または原体条痕、文様の間隔が狭く小さい。282～294と314までは口縁部上端から山形押型文を施文するもので、内面についてはすべて櫛状文である。櫛状文の原体は径4.46～7.32mmで4単位が多い。山形文の施文原体は径4.11～6.75mmで3単位が多い。282は山形文が原体径6.75mmで4単位である。他と比較すると山形文は大きく櫛状文は1単位当たりが細い。295～308は外面が口縁部上端に帯状に無文帯を残す。内面は原体径5.25～9.9mmで4単位の櫛状文である。山形文は原体径4.3～8.98mmで3単位が多い。296は推定口径33.2cmで、櫛状文の原体径が9.9mmである。297と298は同一個体で、胴部は張ることなく立ち上がり口縁部で外反する。302は原体径9.23mmで5単位の櫛状文を施文し山形文は原体径8.98mmで6単位の施文である。306は推定口径30.6mm、原体径7.96mmで5単位の山形文を施文する。307は推定口径33.8cmで、308は32.8cmである。309～313は山形口縁をなす。すべて櫛状文で4単位で径5.73～7.01mmの原体が使用されている。316と317は内面が原体条痕である。山形文は3単位である。316の原体径は6.97mmで317の原体径は4.78mmである。

1 d類（318、319、321～324）

口縁部外反、外面横方向施文、内面横方向施文。文様の間隔が狭く小さい。318～321は口縁部上端から施文する。それ以外は3単位の原体径4.11～5.06mmで施文する。322～324は口縁部外面に帯状の無文帯を残すものである。322は幅3cm程の無文帯を設けその下に原体径7.01mmで4単位の山形押型文を施文する。323は口縁部上端の内外面に無文帯を設けその下にそれぞれ原体径4.36mmで3単位の山形押型文を施文する。324は山形口縁をなす。口縁部外面に4cm程の無文帯を設け原体径4.3mmで3単位の山形文を施文するが、山形文の形状は山形の頂部が太く強調される。個体が頂部のため一部山形施文が斜方向となる。

1 e類（328、329）

口縁部外反、外面横施文、内面無文、文様の間隔が狭く小さい。328と329は原体径4.59mmと4.11mmで3単位の山形文である。328は推定口径28.0cmで、胴部は張りがなく立ち上がり口縁部はやや外反する程度である。

2 a類（286、288、330、332、333）

口縁部外反、外面斜方向施文、内面横方向施文と櫛状文または原体条痕、文様の間隔が狭く小さい。288は山形文の原体径5.1mmで3単位、内面が原体条痕である。330は原体口縁部上端に無文体を設け、その下に原体径7.01mmで4単位の山形文を施文する。推定口径32.0cmである。332は器壁が薄く、原体径5.41mmで4単位の櫛状文と原体径5.73mmで3単位の山形文を施文する。333も器壁が薄く、原体9.55mmで5単位の櫛状文と径4.41mmで3単位の山形文を施文する。

2 e類（336）

口縁部外反、外面斜方向施文、内面無文。336は推定口径15.0cmの小型の深鉢である。原体径4.78mmで3単位の山形文を施文する。

3 a類（338～346）

口縁部外反、外面縦方向施文、内面横方向施文と櫛状文または原体条痕。外面は原体径3.06～5.45mmで3単位の山形文を施文し、内面は原体径6.37～7.32mmで4単位の櫛状文（342と343は原体条

痕）を施文する。342と343は山形の頂部が強調されて太くなる。341と346は同一個体である。器形は346や345をみる限り胴部はあまり張ることなく立ち上がり口縁部はやや外反する。

3 e類（349）

口縁部外反、外面縦方向施文、内面無文。349は原体径3.82mmで2単位の山形文で口唇部も施文する。口唇部施文により口縁端が横に突き出たようになる。

4 a類（289、315）

口縁部外反、外面横方向施文、内面横方向施文と櫛状文または原体条痕、文様が粗大化気味のもの。289は山形文が原体径5.73mmの2単位で施文され、内面の櫛状文は原体径4.46mmの4単位が施文される。

4 d類（320）

口縁部外反、外面横方向施文、内面横方向施文、文様が粗大気味で雑になる。320は原体径8.28mmの2単位で施文する。

4 e類（325～327）

口縁部外反、外面横方向施文、内面無文、文様が粗大化気味で雑になる。325～327は原体径4.97～6.69mmで2単位の山形文を施文する。山形文は開き気味で間延びしている。

5 a類（331、334）

口縁部外反、外面斜方向施文、内面横方向施文と櫛状文または原体条痕、文様が雑で粗大化気味となる。331は胴部は張ることなく立ち上がり口縁部はやや外反する程度である。施文原体は径7.01mmで4単位の櫛状文と径5.61mmで2単位の山形文を施文する。崩れた山形文を器面全体に重複させて施文しており、かろうじて山形文と認識できる程度である。334は内面に刺突文を施す。山形文は間延びしており原体径5.41mmの2単位で施文している。

5 d類（335）

口縁部外反、外面斜方向施文、内面横方向施文、文様が粗大化気味で雑になる。335は口縁部上端を無文とし原体径5.41mmで2単位の山形文である。

6 d類（347・348）

口縁部外反、外面縦方向施文、内面横方向施文、文様が雑で粗大化気味となる。347は外面がやや斜方向気味に施文し、口唇部にも山形文を施文する。原体径は6.88mmの2単位で大きな山形文である。

7 f類（350～365）

異なる文様が施文されるもので外面文様を優先して分類し、その他で一括した。外面は原体径5.73mmで2単位のかなり開いた山形文を横方向と斜方向に施文する。内面は楕円文を斜方向に施文する。351は外面に山形押型文を施文した上に格子目押型文を施文している胴部である。352は外面に原体径5.92mmで2単位の山形押型文を縦方向に施文し、内面は格子目押型文を施文する。353は原体径4.87mmで3単位の山形文を施文するが、山形の頂部を誇張し太くしている。354～365は底部で全て平底である。底部外面側部は原体径4.30～6.43mmで2～4単位の山形文を施文する。底部外面はナデ調整で356～358のように圧痕が認められるものもある。356は推定底径6.85cmで2本越え2本潜り1本送りの網代編み痕がある。357は推定底径10.0cmで1本越え1本潜り1本送りの網代編み痕ともじり編み痕がある。358は推定底径7.75cmで1本越え1本潜り1本送りの網代編み痕が2重にある。359は2本越え2本潜り1本送りの網代編み痕がある。

Ⅱ楕円文（366～440）

口縁部形態①

口縁部の器形が直口するもの。

1ａ類（366、367）

口縁部直口、外面横方向施文、内面横方向施文と原体条痕または櫛状文。366は外反せずやや開き気味になる程度である。367の頸部はほとんどくびれがない。

1ｄ類（368）

口縁部直口、外面横方向施文、内面横方向施文。器壁が薄く、原体径5.06mmの3単位で施文する。

1ｅ類（369～372）

口縁部直口、外面横方向施文、内面無文。372は小規模な楕円文を原体径5.06mmで3単位の楕円文を施文する。楕円文は上下が互い違いとならずに列状に並ぶ。推定口径34.8cmである。370は3単位の楕円文を施文する。楕円文は楕円どうしが左右で連なるいわゆる連珠文となる。371は原体径5.41mmの2単位で施文する。

2ｅ類（373～378）

口縁部直口、外面斜方向施文、内面無文。横方向と斜方向の楕円文が不規則に施文される。375は器壁は薄く、口縁部が開かず直口する。それ以外は口縁部の上端部分がやや開き気味となる。374は原体径5.06mmの3単位で施文される。377は原体径4.97mmで3単位の楕円文を施文する。

3ｅ類（379）

口縁部直口、外面縦方向施文、内面無文。379は原体径5.54mmで3単位の楕円文が施文される。口縁部は頸部にほとんどくびれがなく、上端部分がやや開き気味となる。

口縁部形態②

口縁部が外反し2ｂ類、3ｄ類はない。

1ａ類（380～385、387、388）

口縁部外反、外面横方向施文、内面横方向施文と櫛状文または原体条痕。原体が確認できたものは原体径4.01～5.06mmで3単位の楕円文を施文する。内面は、385以外は原体径4.14～7.64mmで4単位の櫛状文である。385は原体条痕を施文する。381は口縁上端に幅3.0cm程の無文帯を巡らせ、その下に横方向の楕円文を施文する。388は原体径5.73mmで2単位の楕円文を施文する。

1ｂ類（390、391）

口縁部外反、外面横方向施文、内面は短い原体条痕または櫛状文。390は外面に幅3.0cm程の無文帯を巡らせ、その下に横方向の楕円文を施文する。内面は原体径6.37mmで4単位の櫛状文を施文する。推定口径28.2cmである。391は小さく外反する程度で、原体径4.33mmで2単位の楕円文を施文する。内面は原体条痕である。

1ｄ類（386、389）

口縁部外反、外面横方向施文、内面横方向施文。386は原体径6.37mmで2単位の楕円文を施文する。389はやや大きめで左右が連なった楕円文を施文する。

1ｅ類（393）

口縁部外反、外面横方向施文、内面無文。原体径4.59mmで3単位の楕円文を施文する。

2a類（394～396）

口縁部外反、外面斜方向施文、内面横施文と原体条痕または櫛状文。外面は394が斜方向に施文し、それ以外は横方向と斜方向を不規則に施文する。内面はすべて原体径4.94～7.32mmで4単位の櫛状文を施文する。395は原体径4.46mmで2単位の楕円文を施文する。394は原体径4.59mmで3単位の楕円文を施文する。

2d類（397～400、404）

口縁部外反、外面斜方向施文、内面横方向施文。外面は400以外は不規則施文である。400は原体径5.45mmで3単位の楕円文を施文する。399は口唇部にも楕円文を施文する。398と404は同一固体と思われ、原体径5.92mmで3単位の楕円文を施文する。

2e類（401～403、405）

口縁部外反外面斜方向施文、内面無文。403は幅4.5cmの無文帯を巡らせ、その下に原体径5.25mmで3単位の楕円文を横方向と斜方向に施文する。推定口径25.2cmである。

3a類（406～409）

口縁部外反、外面縦方向施文、内面横方向施文と原体条痕または櫛状文。407は外面に幅1.0cm程の無文帯を巡らせ、その下に原体径4.78mmで2単位の楕円文を施文する。内面は原体径9.87mmで4単位の斜傾する櫛状文を施文する。

3b類（410、411）

口縁部外反、外面縦方向施文、内面櫛状文。410は原体径5.89mmで3単位の楕円文を施文する。内面は原体径5.25mmで4単位の櫛状文を施す。411はその胴部でやや張る程度である。

3e類（413）

口縁部外反、外面縦方向施文、内面無文。原体径6.69mmで3単位の楕円文を施文する。

4c類（421～424）

口縁部外反、外面横方向施文、内面長い原体条痕（櫛状文）を施すもの。421は外面は原体径6.05mmで2単位の楕円文を横方向に施文する。内面は原体径7.64mmで4単位の長い櫛状文を施す。424は外面が横方向で内面は斜方向に太い原体条痕？（条痕によるものか押圧によるものか判断つかない）を施す。425は細い原体条痕？を2段重ねて施文する。426と427は太い原体条痕？（条痕によるものか押圧によるものか判断つかない）を2段以上重ねて施文する。

5c類（425～427）

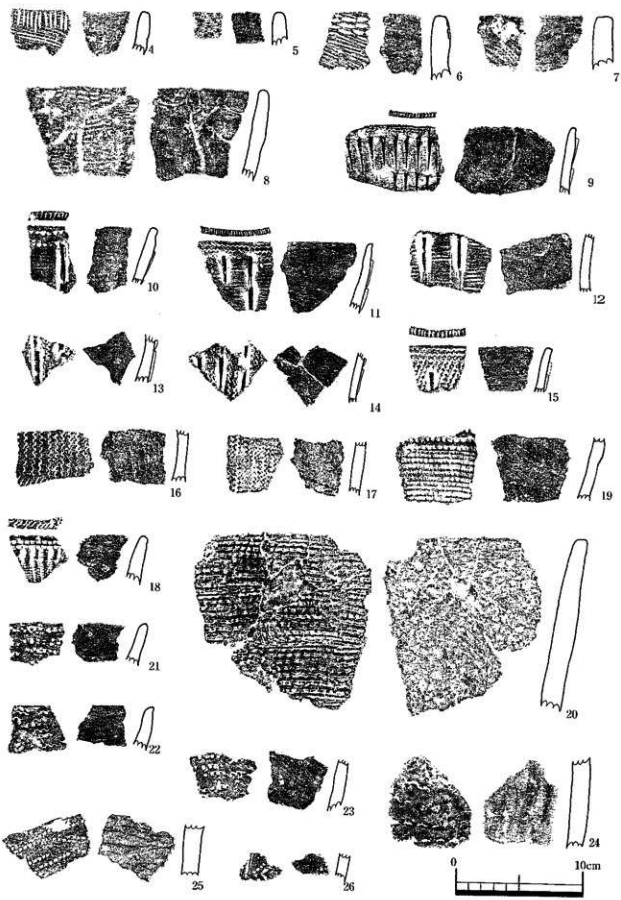
口縁部外反、外面斜方向施文、内面長い原体条痕（櫛状文）を施すもの。

6c類（428）

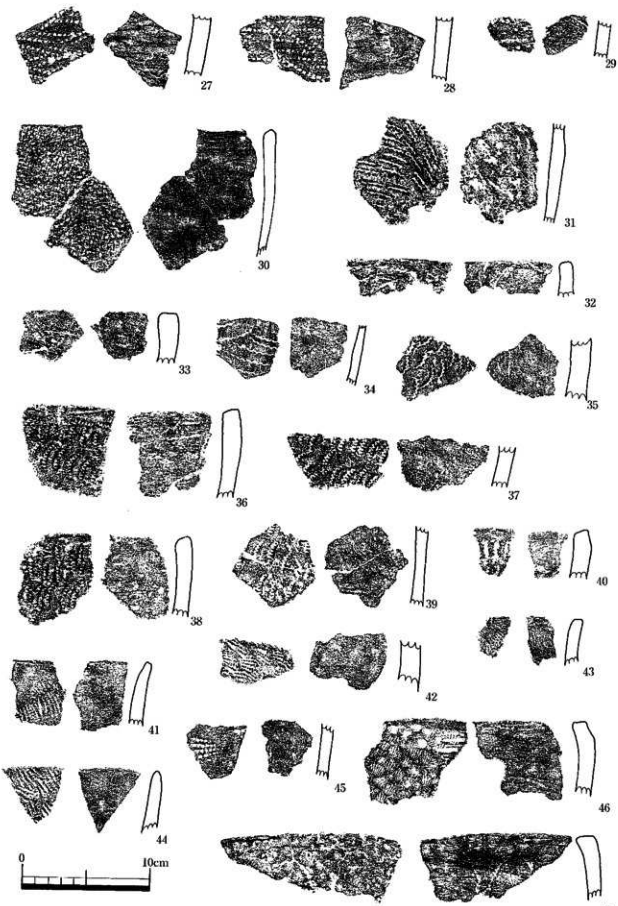
口縁部外反、外面縦方向施文、内面長い原体条痕（櫛状文）を施すもの。428は山形口縁である。外面は縦方向に施文し、内面は原体径5.57mmで5単位の細長い櫛状文を2段重ねて施文する。

7f類（429,431～440）

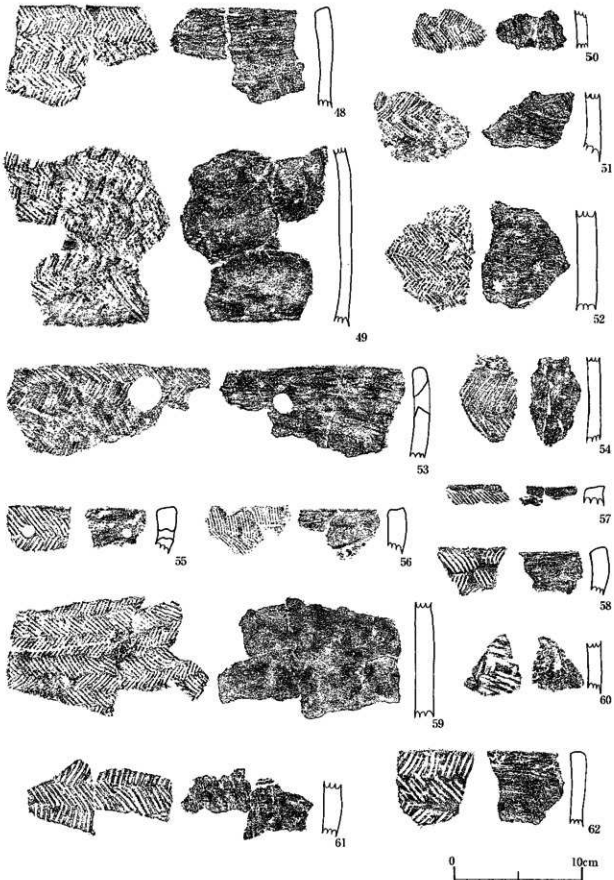
異なる文様が施文されるもので外面文様を優先して分類し、その他で一括した。429外面は原体径5.29mmで2単位の楕円文を縦方向に施文し、内面はやや大きめの横方向の山形文と原体条痕？（条痕によるものか押圧によるものか判断つかない）を施す。431～440は楕円押型文を施文する底部である。



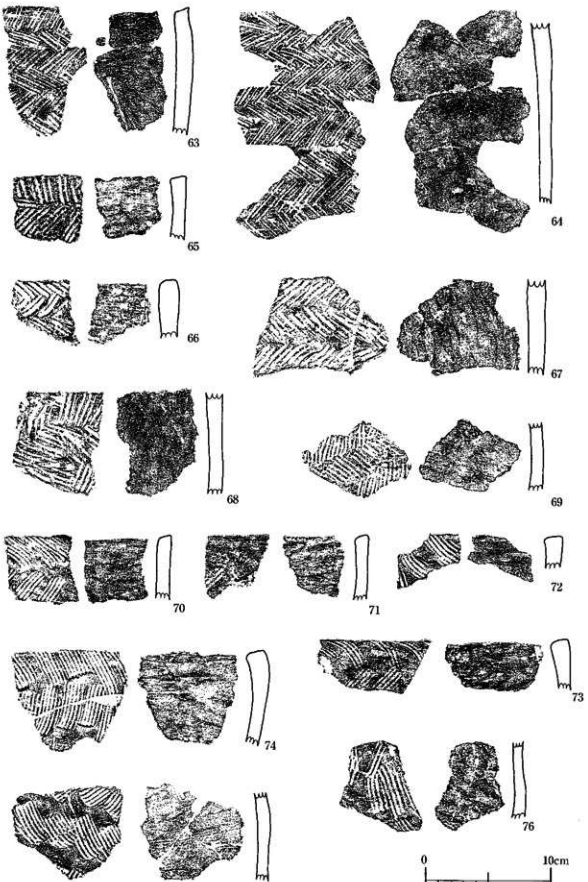
第18図　包含層出土遺物実測図(1)



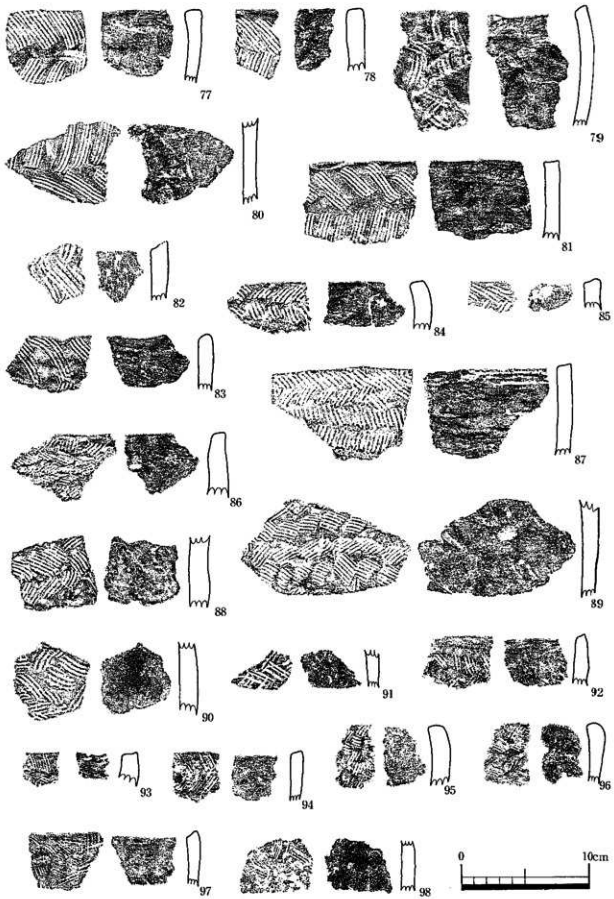
第19図　包含層出土遺物実測図(2)



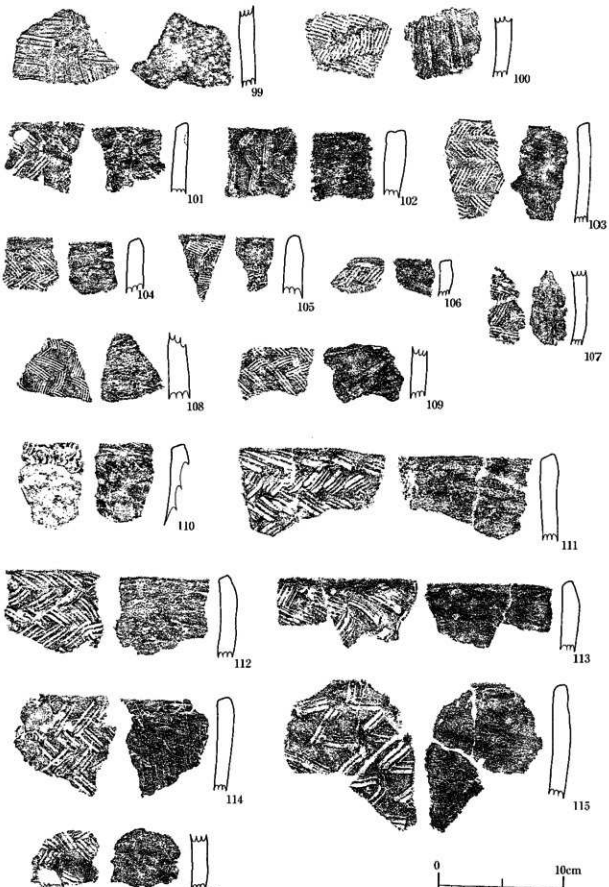
第20図　包含層出土遺物実測図(3)



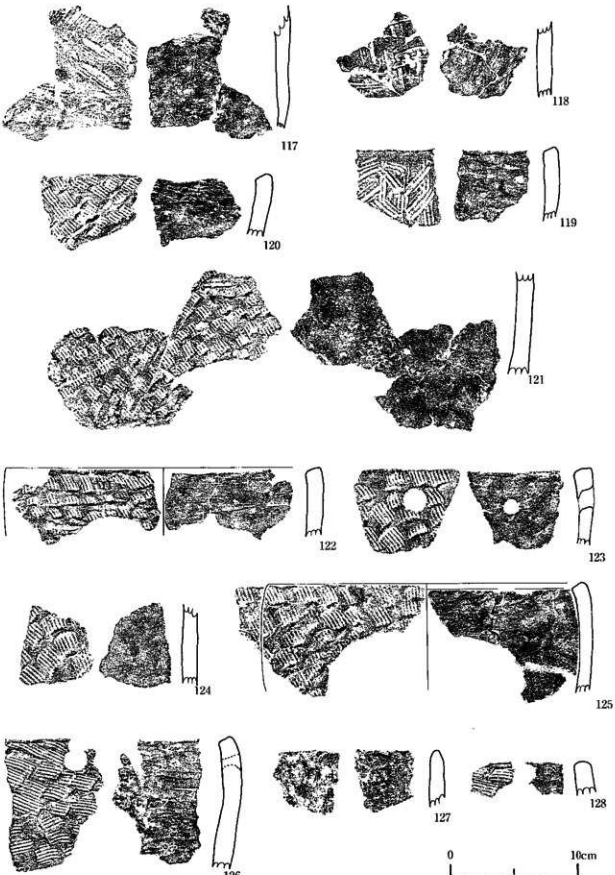
第21図　包含層出土遺物実測図(4)



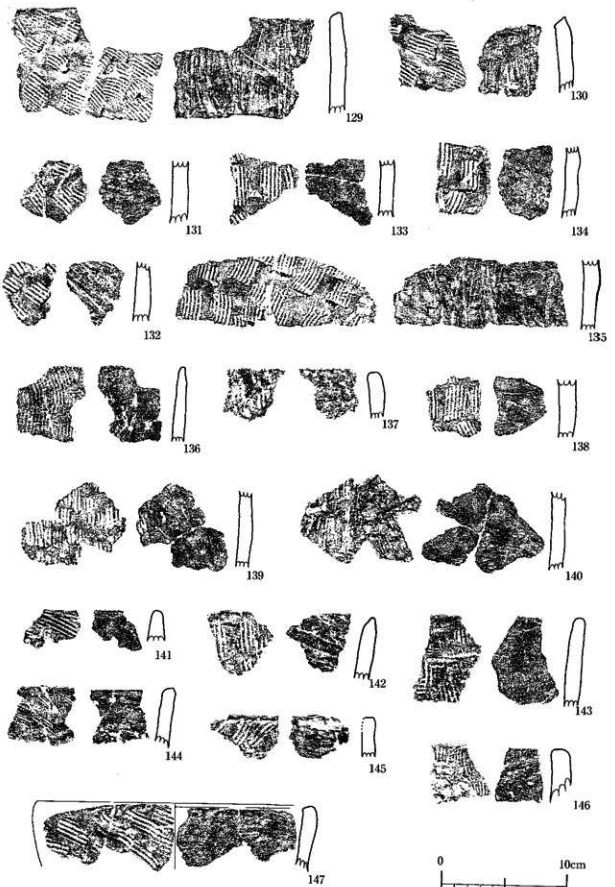
第22図　包含層出土遺物実測図(5)



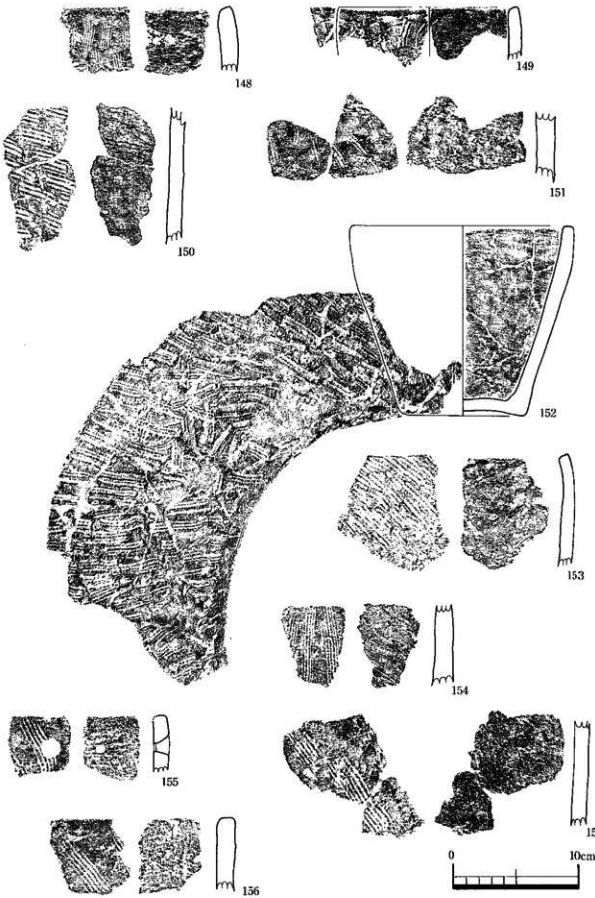
第23図　包含層出土遺物実測図(6)



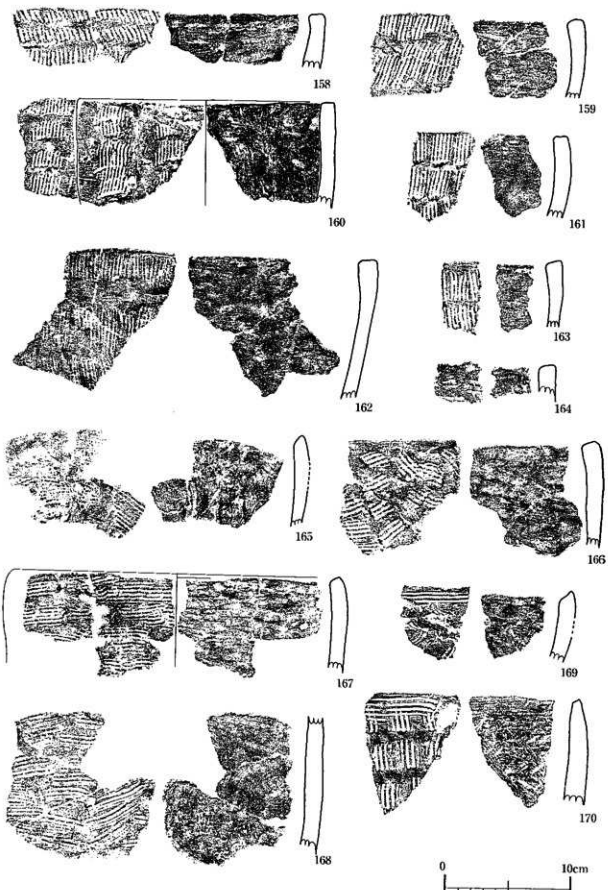
第24図　包含層出土遺物実測図(7)



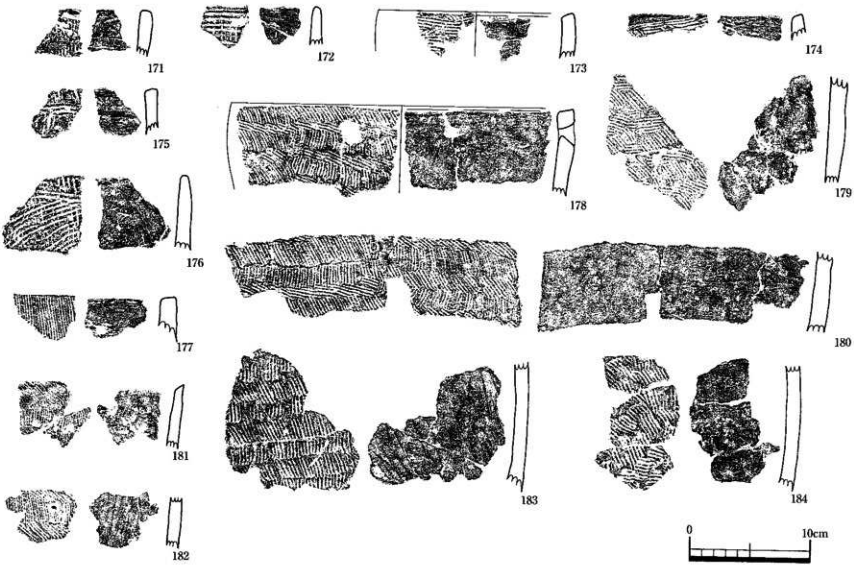
第25図　包含層出土遺物実測図(8)



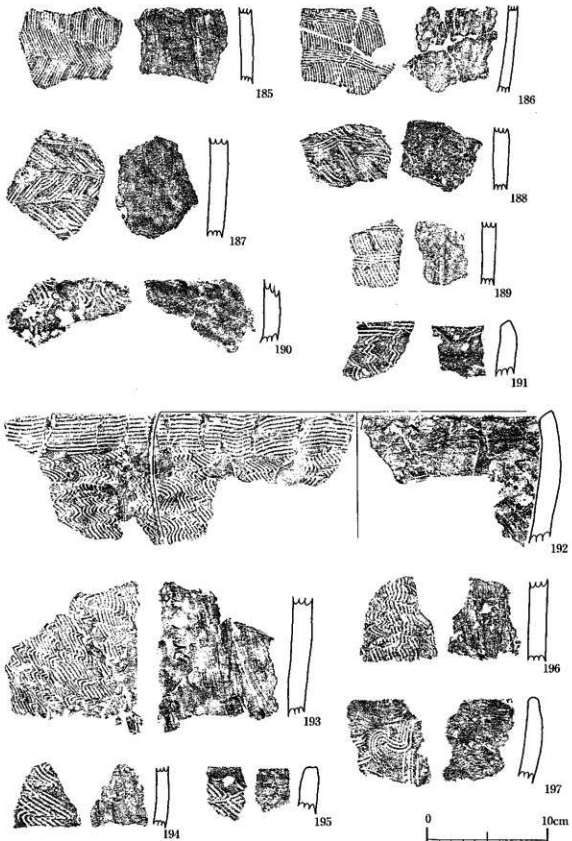
第26図　包含層出土遺物実測図(9)



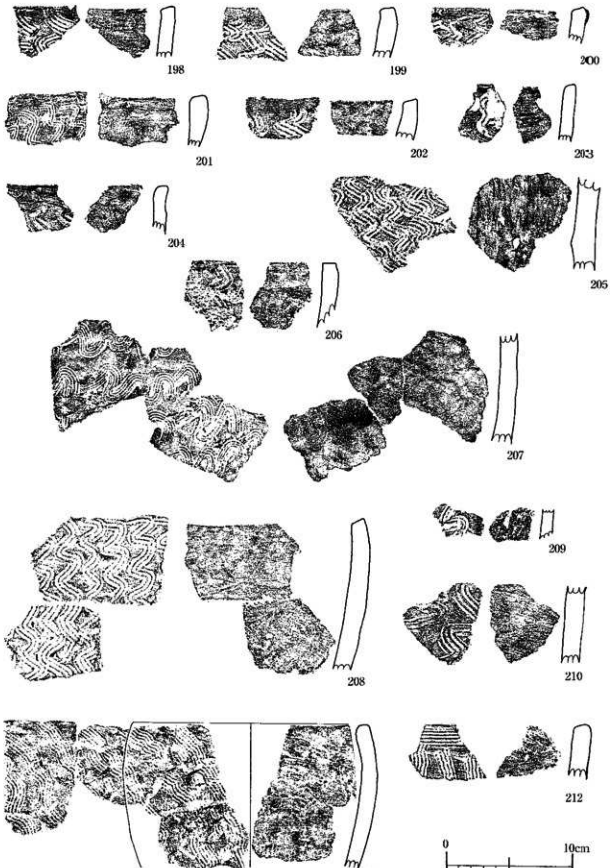
第27図　包含層出土遺物実測図(10)



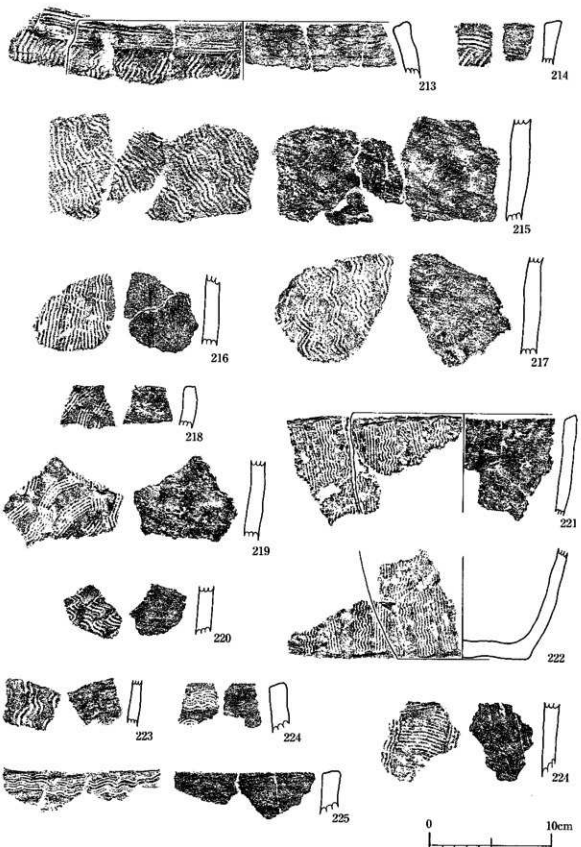
第28図　包含層出土遺物実測図(11)



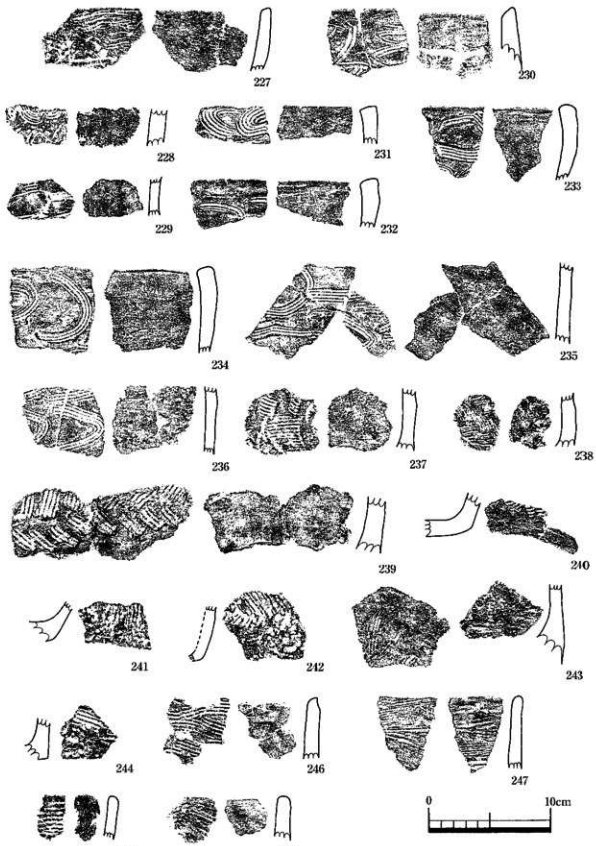
第29図　包含層出土遺物実測図(12)



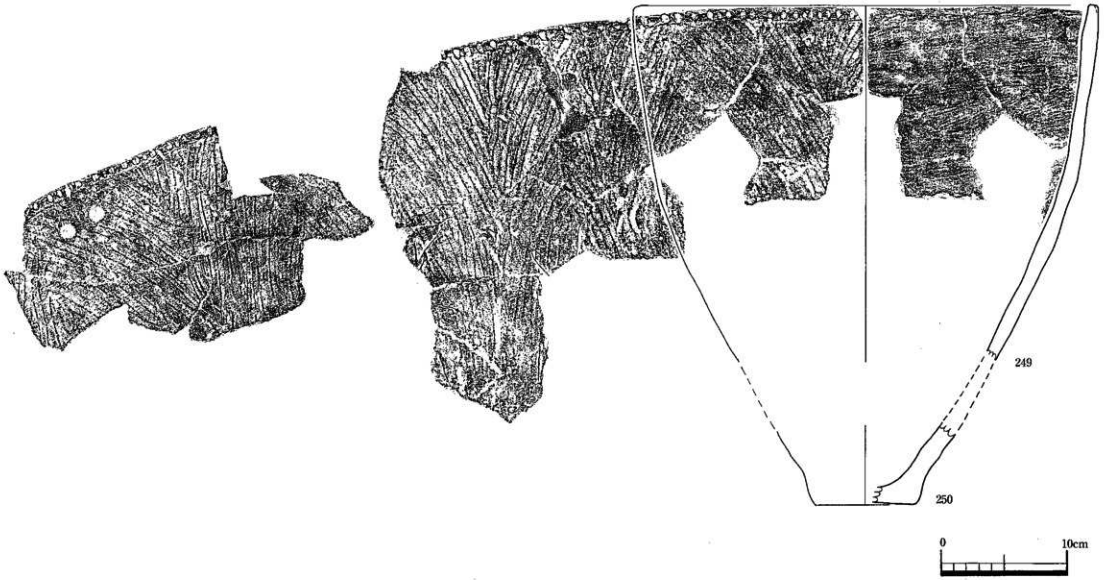
第30図　包含層出土遺物実測図(13)



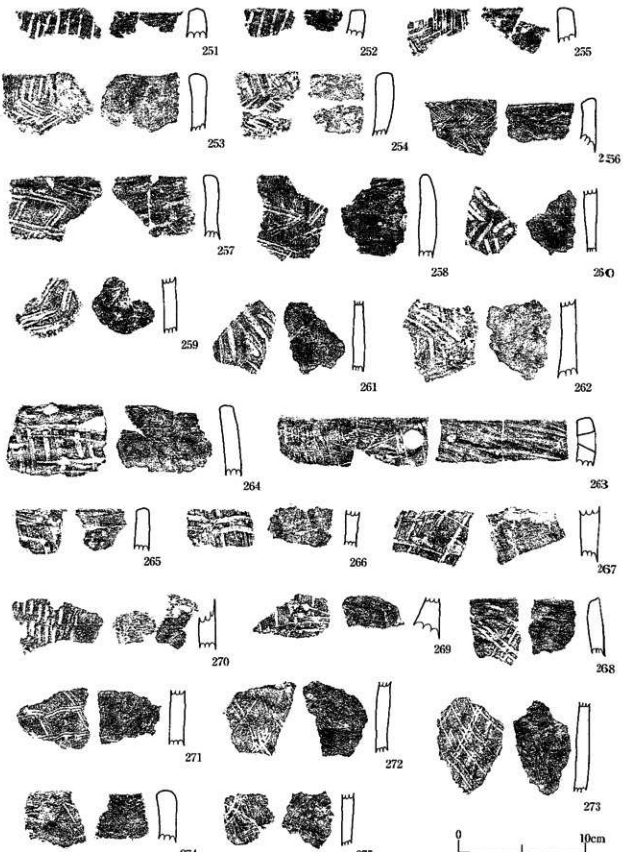
第31図　包含層出土遺物実測図(14)



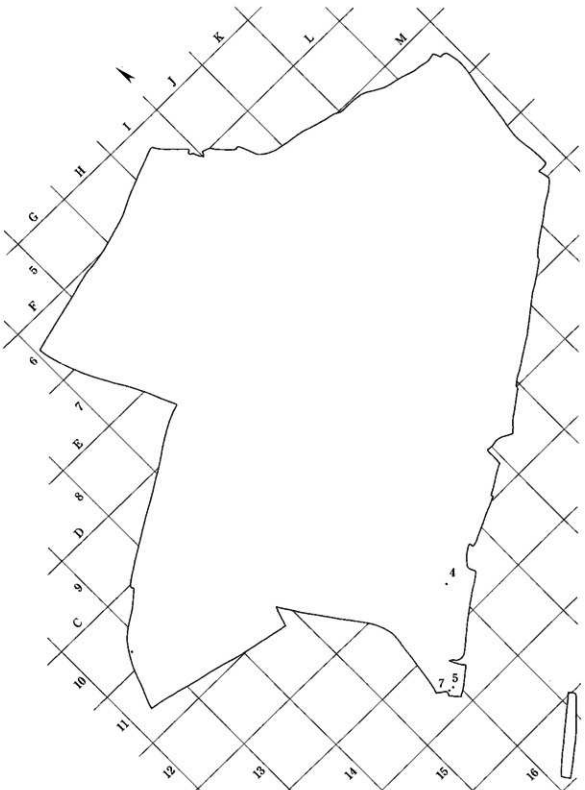
第32図　包含層出土遺物実測図(15)



第33図　包含層出土遺物実測図(16)

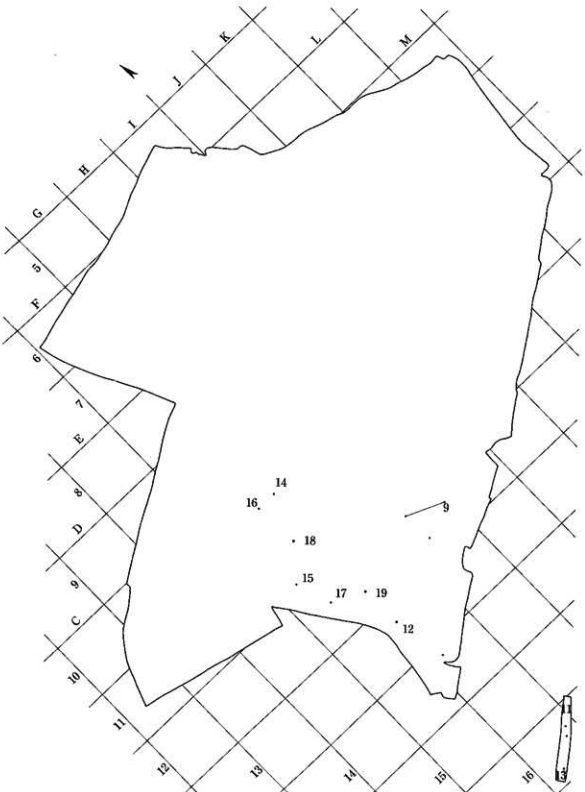


第34図　包含層出土遺物実測図(17)

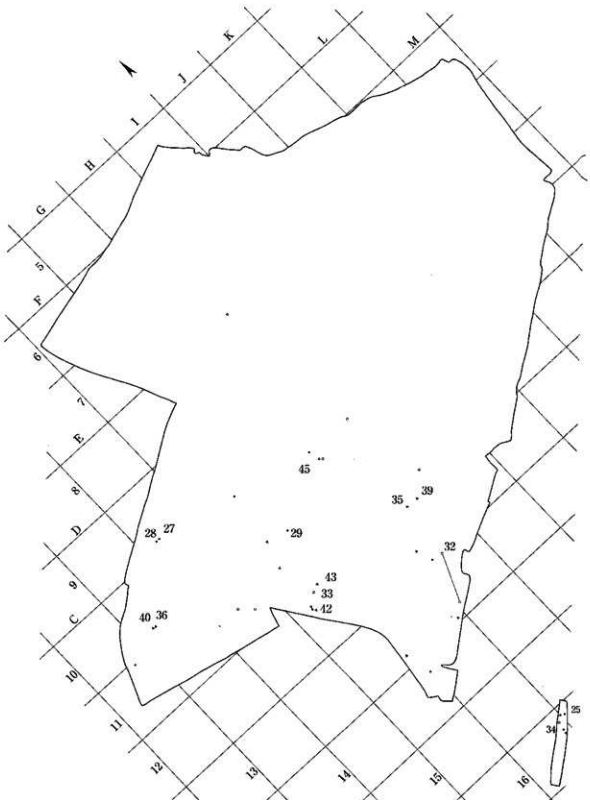


A群
・I 類

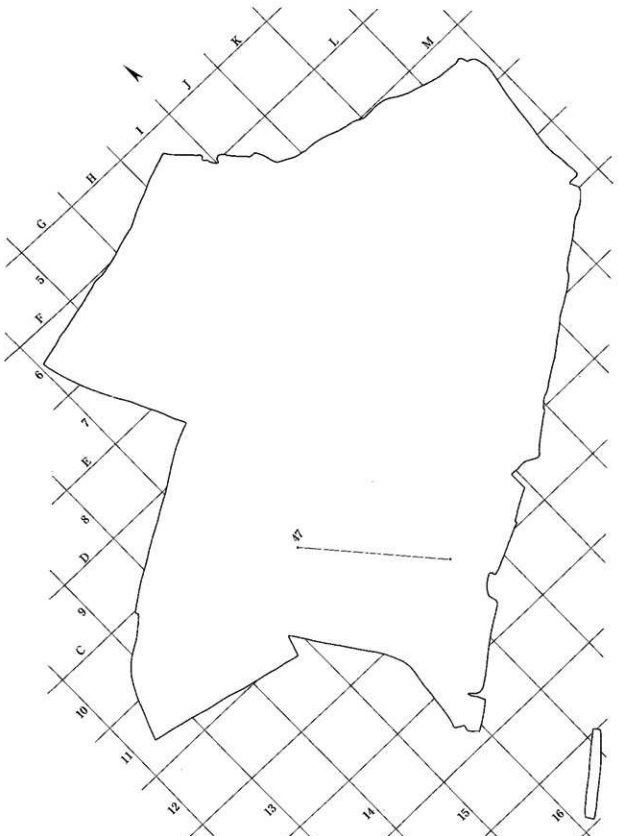
第35図　包含層出土遺物分布図(1)



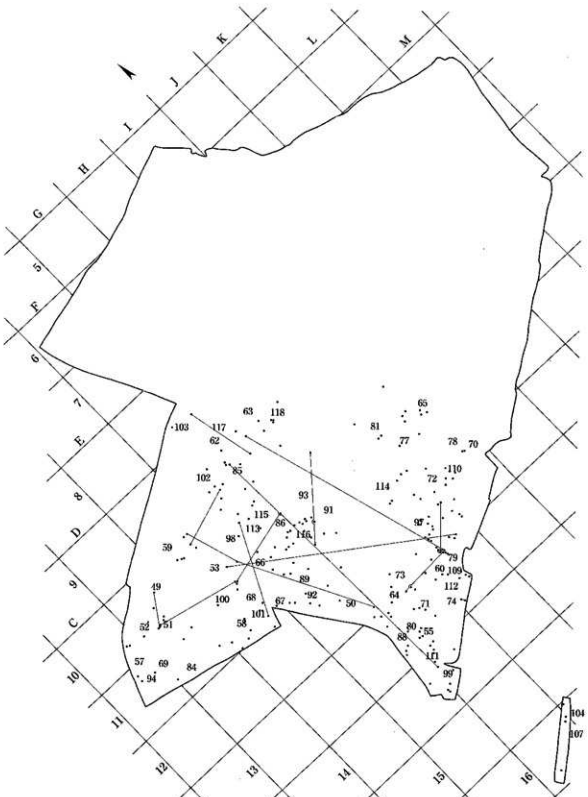
第36図　包含層出土遺物分布図(2)



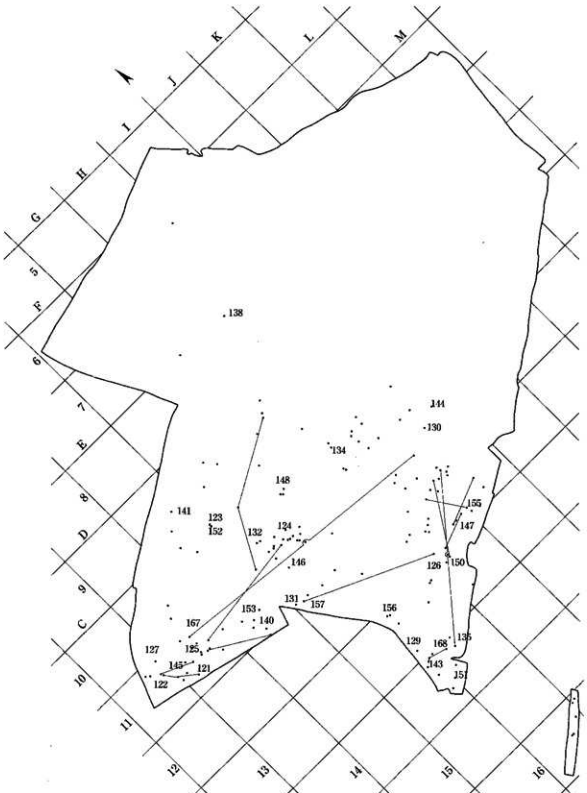
第37図　包含層出土遺物分布図(3)



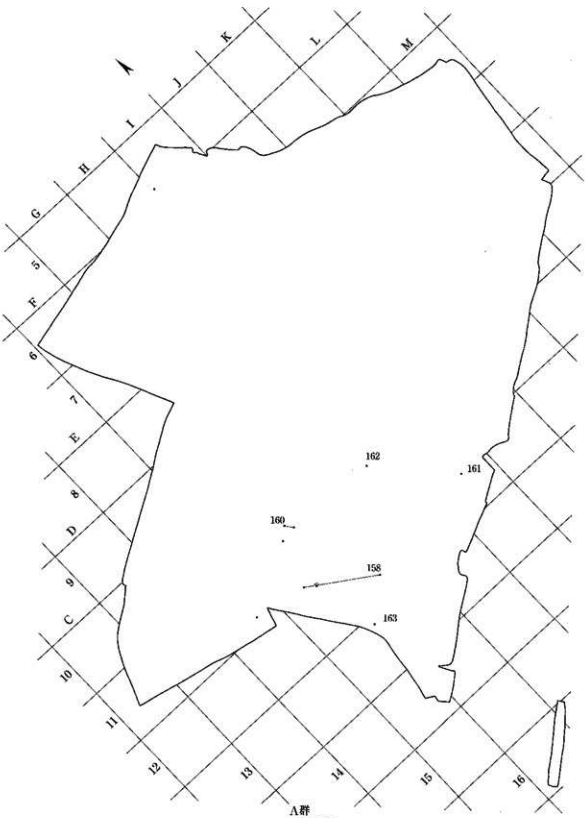
第38図　包含層出土遺物分布図(4)



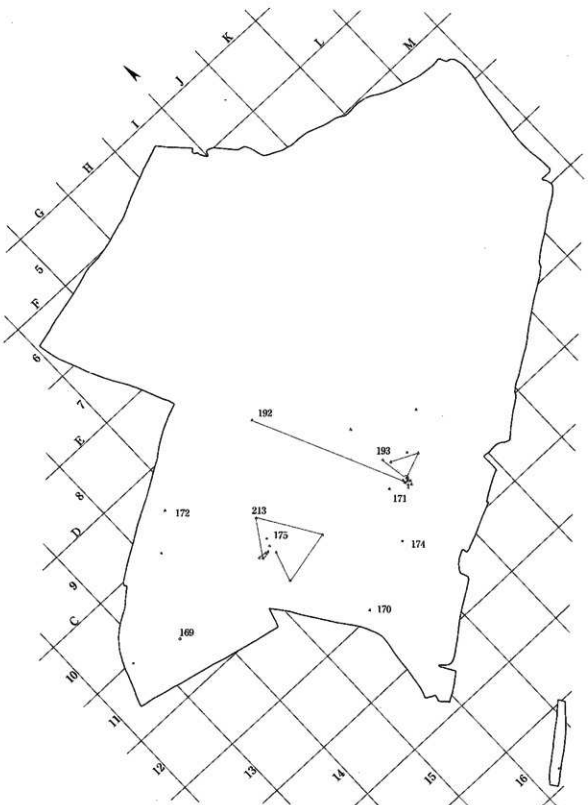
第39図　包含層出土遺物分布図(5)



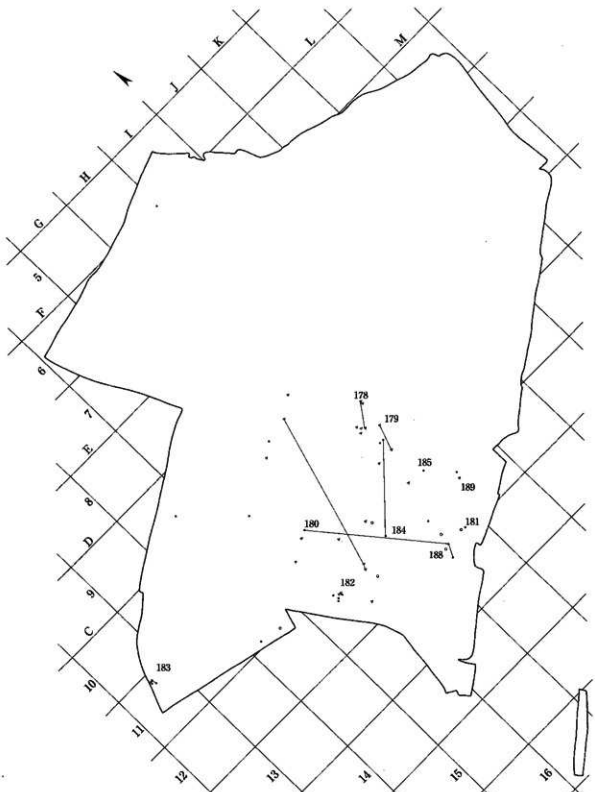
第40図　包含層出土遺物分布図(6)



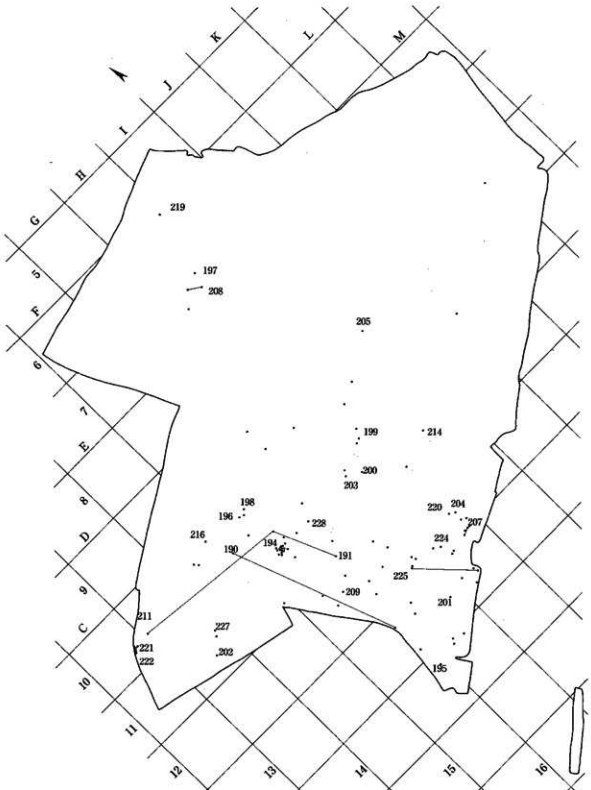
第41図　包含層出土遺物分布図(7)



第42図　包含層出土遺物分布図(8)

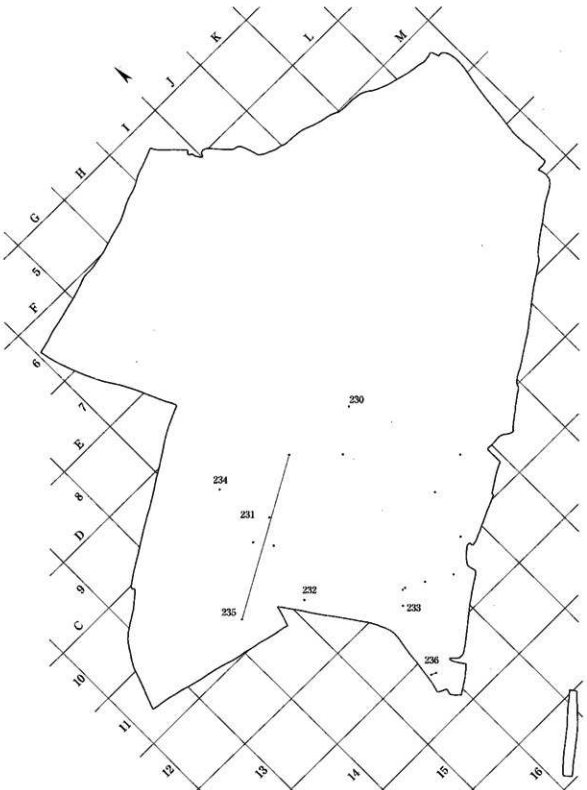


第43図　包含層出土遺物分布図(9)



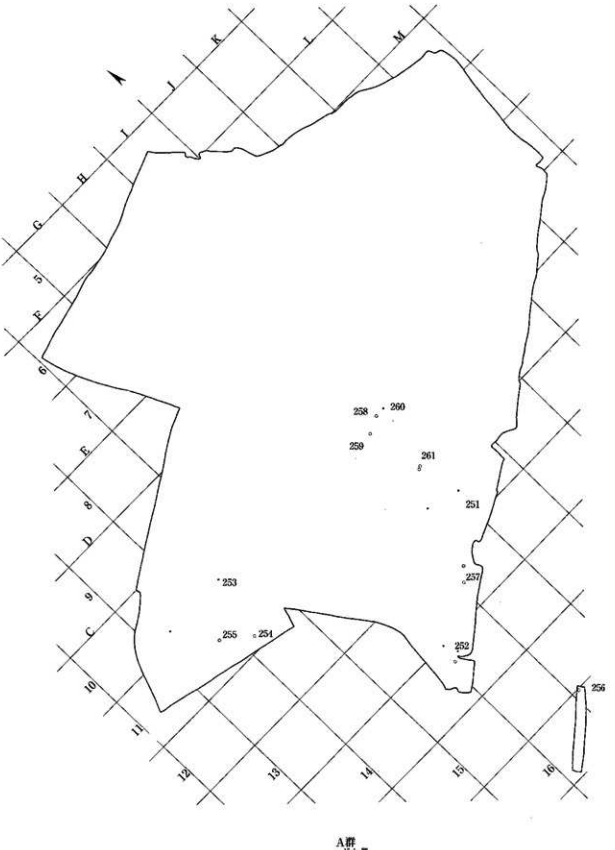
A群
・V 5 類

第44図　包含層出土遺物分布図(10)

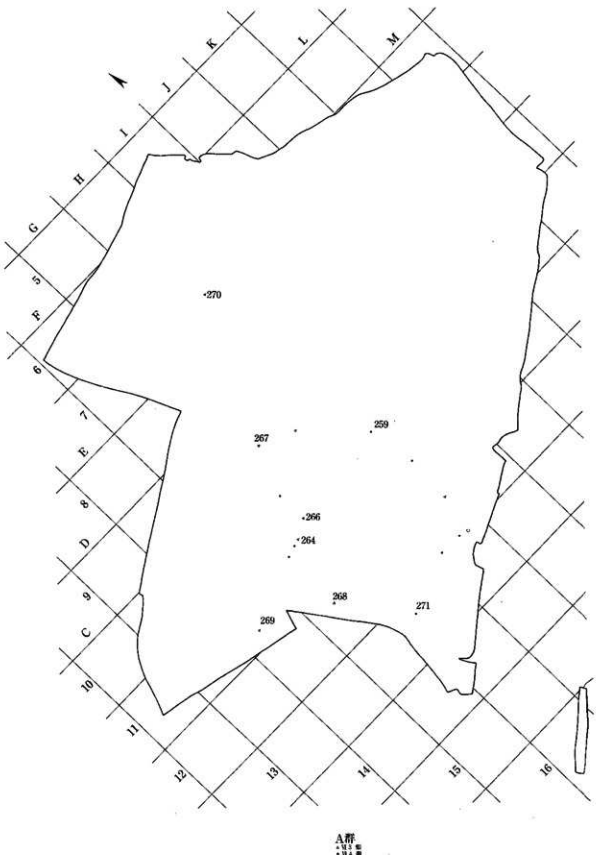


A群
・V 6 類

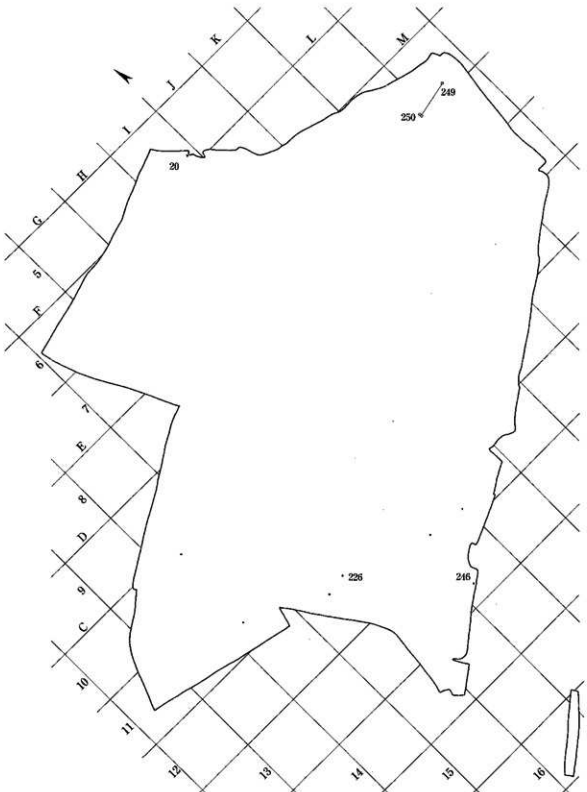
第45図　包含層出土遺物分布図(11)



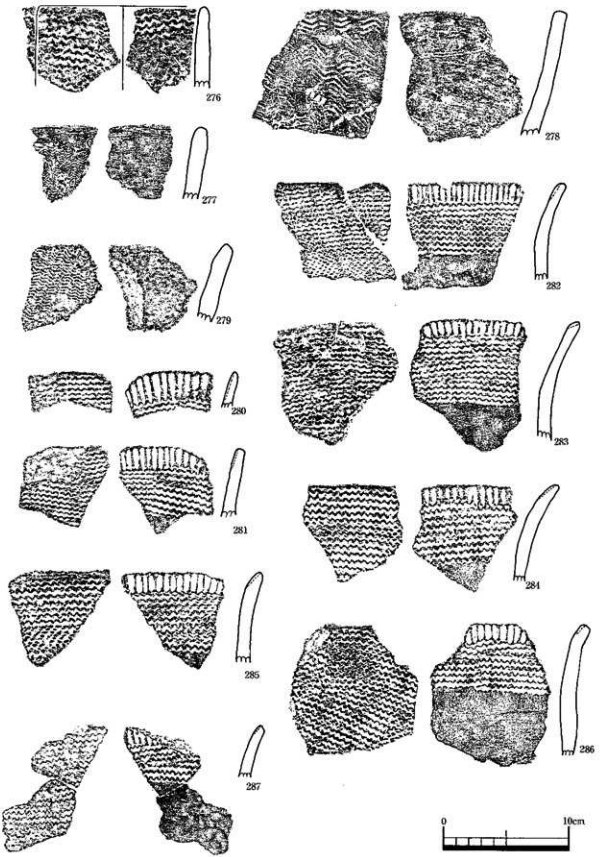
第46図　包含層出土遺物分布図(12)



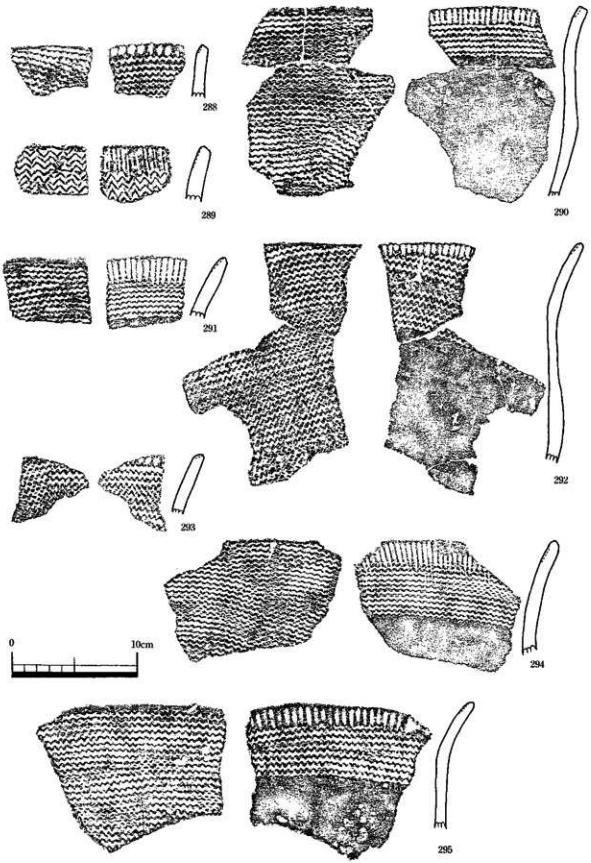
第47図　包含層出土遺物分布図(13)



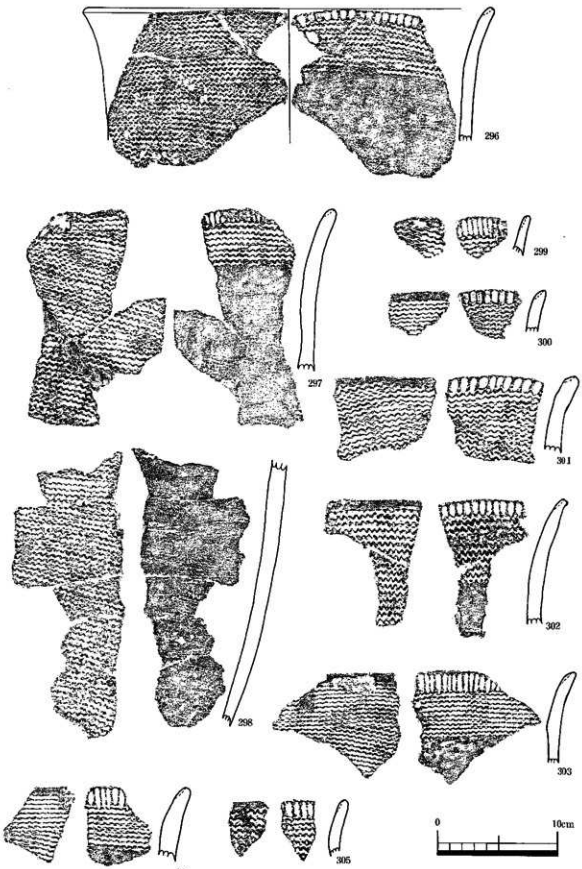
第48図　包含層出土遺物分布図(14)



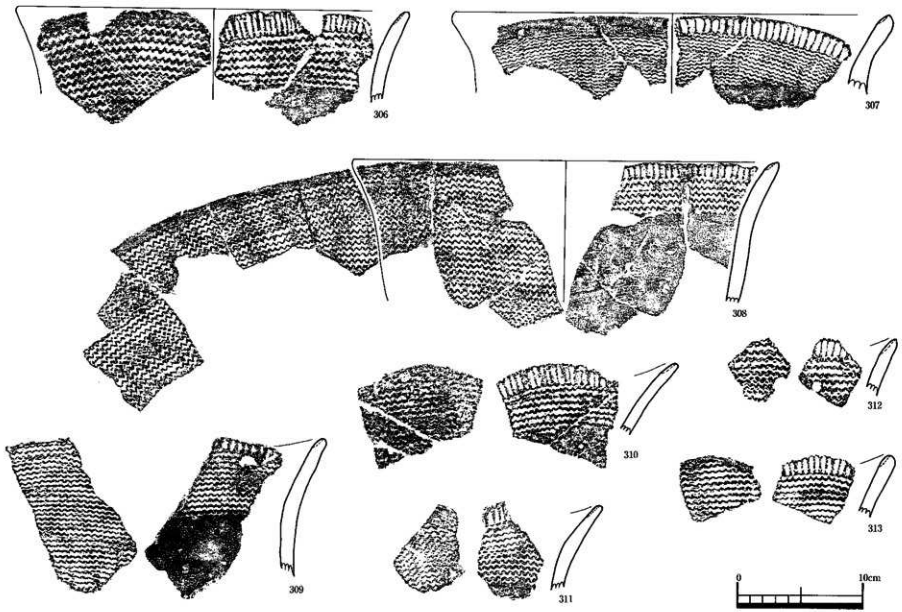
第49図　包含層出土遺物実測図(18)



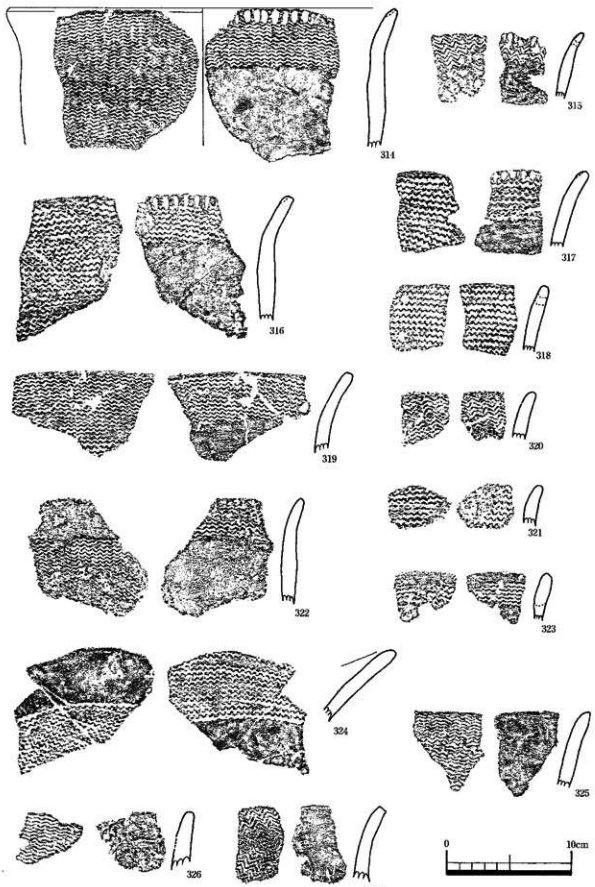
第50図　包含層出土遺物実測図(19)



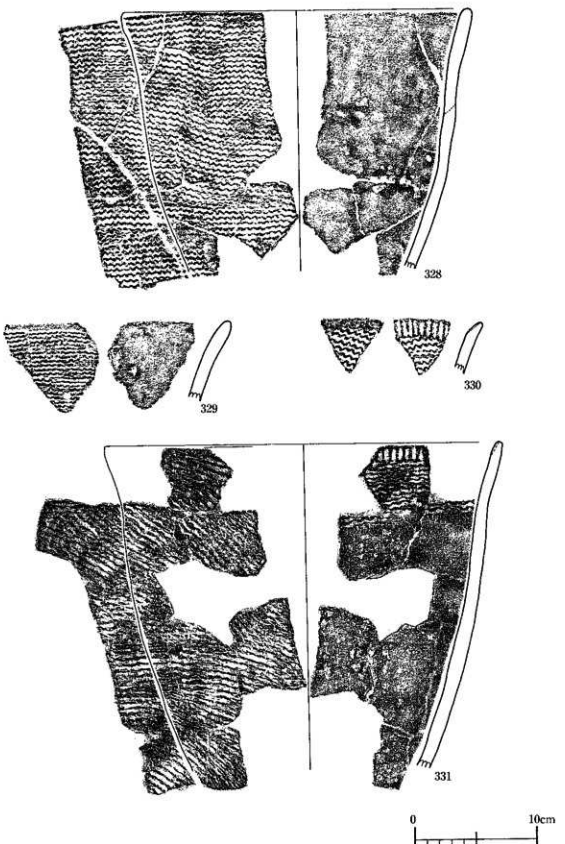
第51図　包含層出土遺物実測図(2)



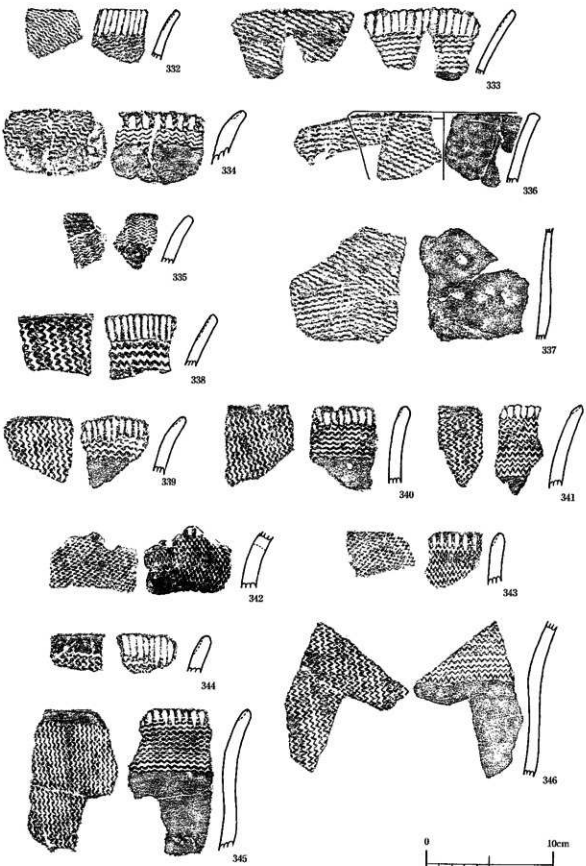
第52図　包含層出土遺物実測図(21)



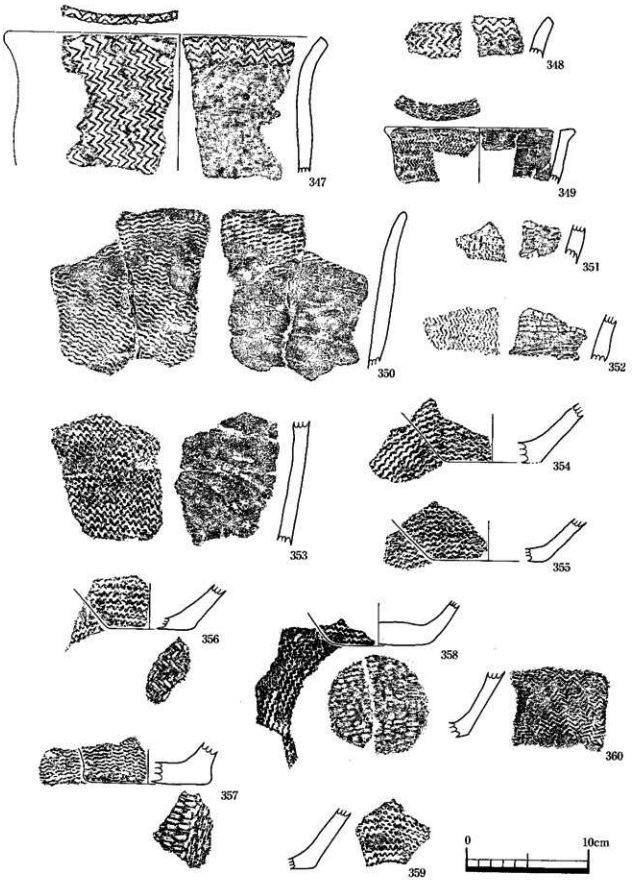
第53図　包含層出土遺物実測図(2)



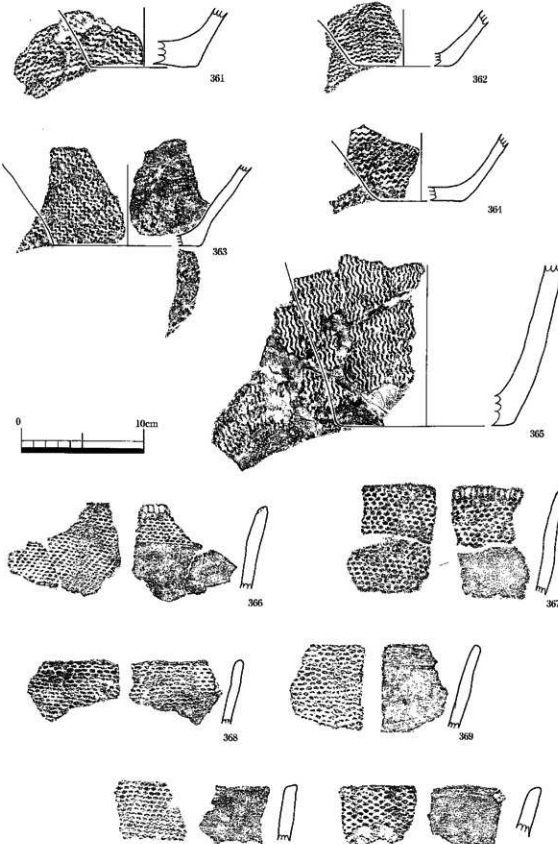
第54図　包含層出土遺物実測図(23)



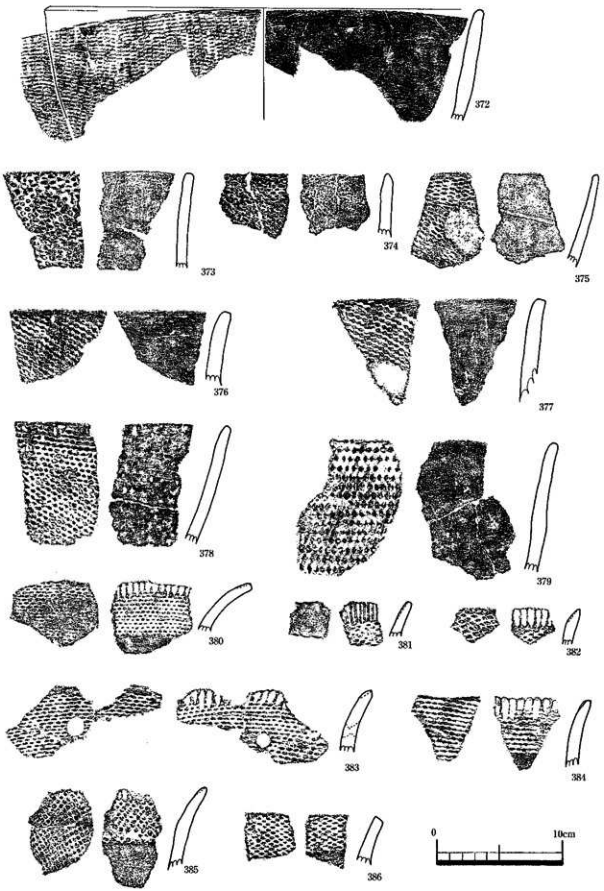
第55図　包含層出土遺物実測図(24)



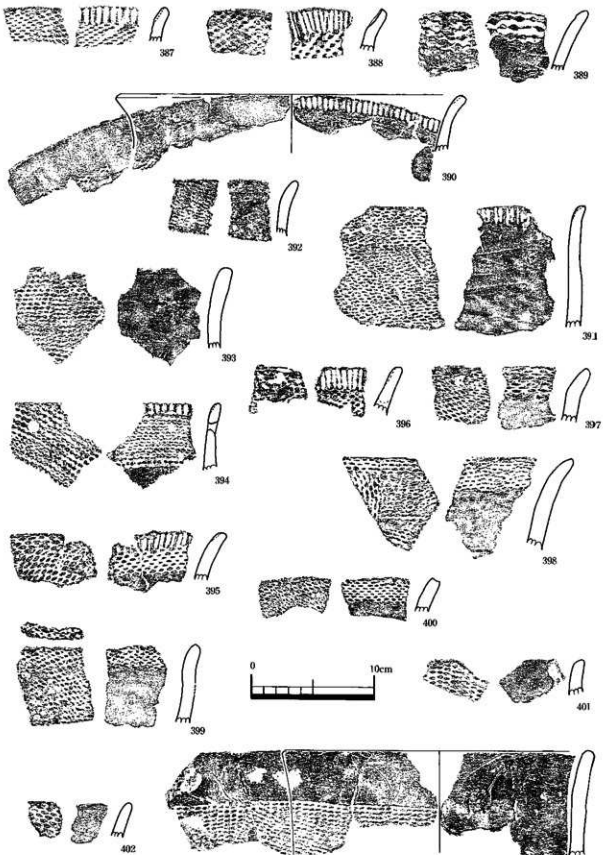
第56図　包含層出土遺物実測図(2)



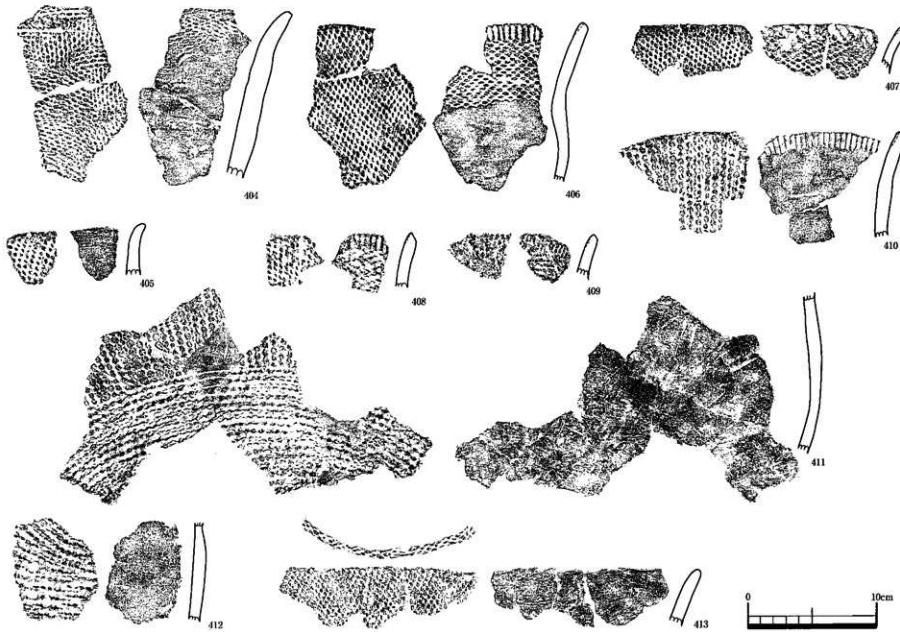
第57図　包含層出土遺物実測図(26)



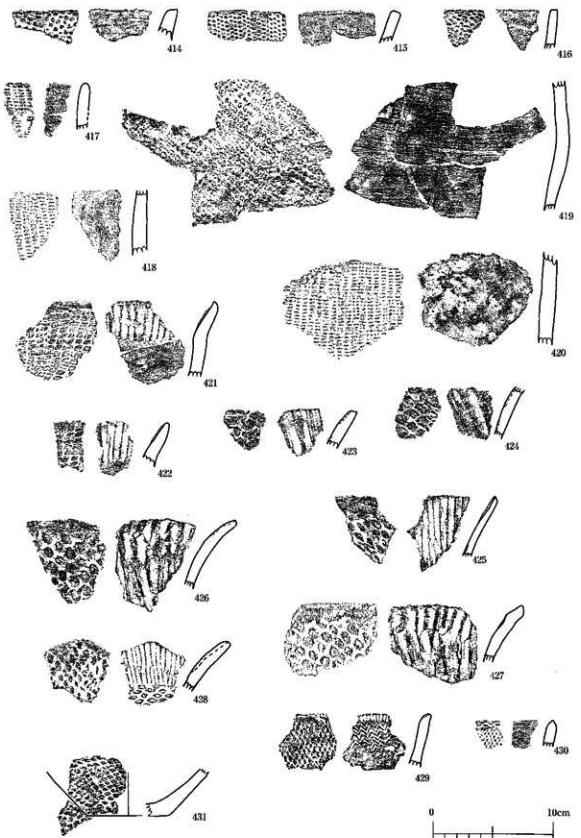
第58図　包含層出土遺物実測図(27)



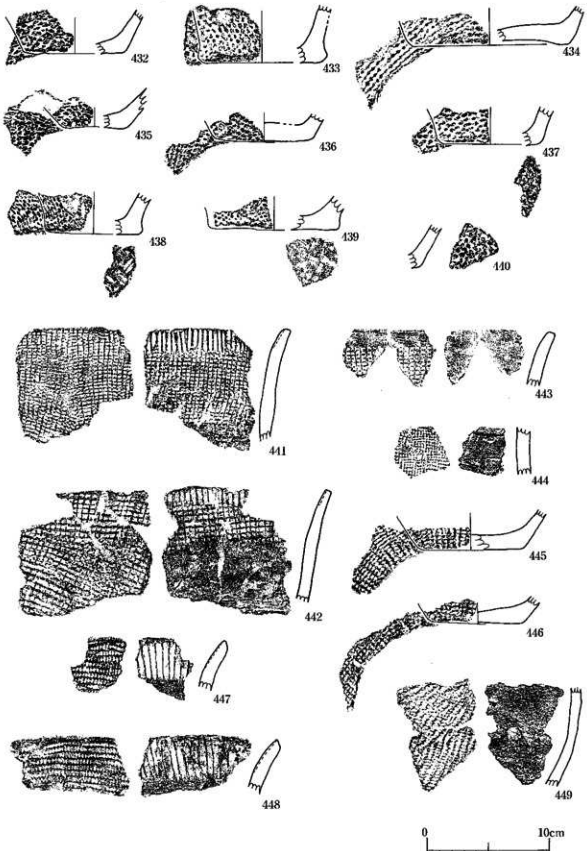
第59図　包含層出土遺物実測図(28)



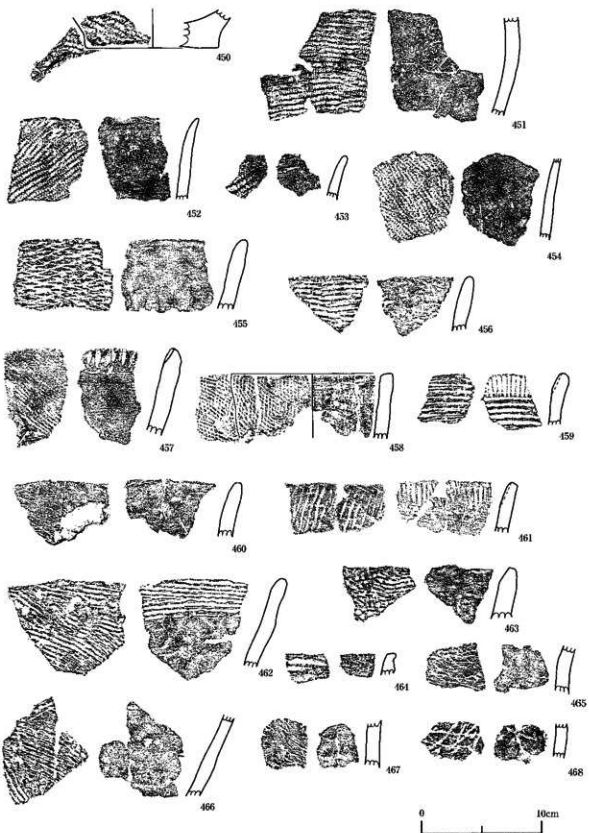
第60図　包含層出土遺物実測図(29)



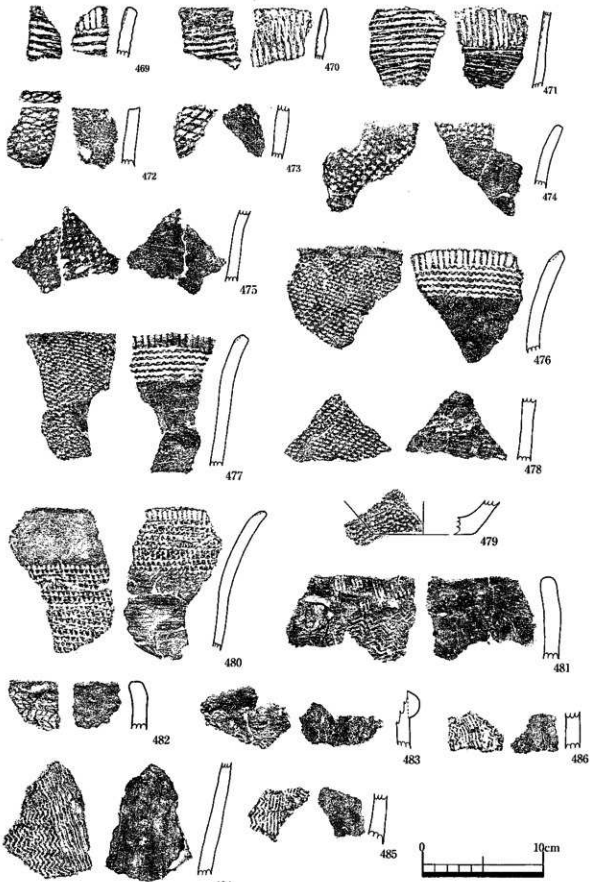
第61図　包含層出土遺物実測図(3)



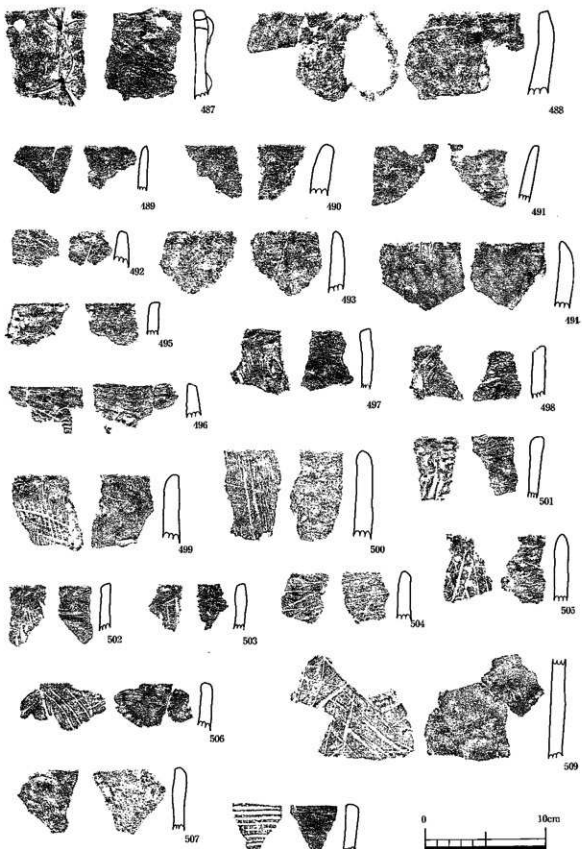
第62図　包含層出土遺物実測図(31)



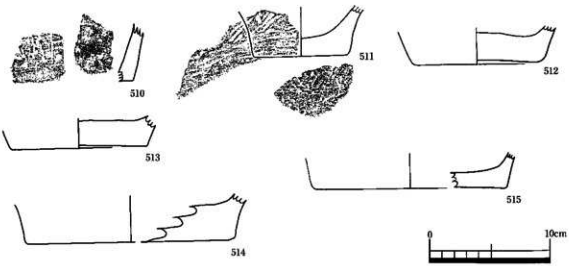
第63図　包含層出土遺物実測図(32)



第64図　包含層出土遺物実測図(3)



第65図　包含層出土遺物実測図(3)



第66図　包含層出土遺物実測図(35)

推定底径は、431は6.6cm、432は8.2cm、433は9.8cm、434は12.6cm、435は5.6cm、436は7.8cmである。437～440は底部下面に圧痕がみられる。437は推定底径8.4cmで1本越え1本潜り1本送りの網代編み痕がある。438は推定底径7.0cmで2本越え2本潜り1本送りの網代編み痕がある。439は推定底径10.4cmで2本越え2本潜り1本送りの網代編み痕がある。

Ⅲ格子目文（441～446）

口縁部形態②

口縁部は外反する。

1a類（441、442）

外面横方向施文、内面横方向施文と原体条痕または櫛状文。441と442は口縁部は横方向に施文し、頸部から胴部にかけては斜方向に施文する。441は原体径4.84mmで4単位の格子目文を内外面に施文し、さらに内面は原体径5.10mmで4単位の櫛状文を施す。442は原体径4.97mmで4単位の格子目押型文を内外面に施し、さらに内面には原体径5.89mmで4単位の櫛状文を施す。

1e類（443）

口縁部外反、外面横方向施文、内面無文。外面に1.5cmほどの無文帯を設け横方向に格子目文を施文する。

4f類（445、446）

底部をその他としてまとめた。すべて平底で横方向に施文する。445は推定底径8.5cmで、446は7.8cmである。

Ⅳ縄文（447～454）

縄文施文土器は67点出土し、底部においては全て平底であった。

口縁部形態②

2e類（452、453）

口縁部外反し、外面は斜方向の縄文、内面無文。452は口縁端が細くなりる器形で、文様は外面に単

節の縄文をやや縦方向に回転させる。

３ｂ類（447～449）

口縁部外反、外面は縦方向の縄文、内面は原体条痕もしくは櫛状文。447と448は単節の縄文をやや斜方向気味に回転させる。448の内面は8.28mmで５単位の櫛状文を施す。

Ⅴ撚糸文（455～468）

器形はほとんどが直口もしくはやや外傾に開く程度で、文様を単軸絡条体第１類と網目状撚糸文に大きく分類した。

単軸絡条体

１ｅ類（456、463）

外面のみ撚糸文が施文される。

２ａ類（461）

口縁部はやや外傾に開く。内面は原体を横方向に回転させて撚糸文を施文し、さらに原体条痕？（条痕によるものか押圧によるものか判断つかない）を施文する。

２ｂ類（457）

器壁が厚い。内面は原体条痕を施す。

２ｄ類（462）

不規則に施文される。器壁が厚く、雑な作りの土器である。

２ｅ類（458）

不規則に施文される。推定口径１３．０cmの小型の深鉢である。

網目状

１ｅ類（455、460）

口縁部はやや外傾に開く程度、外面は横方向に網目状撚糸文を施し、内面は無文である。

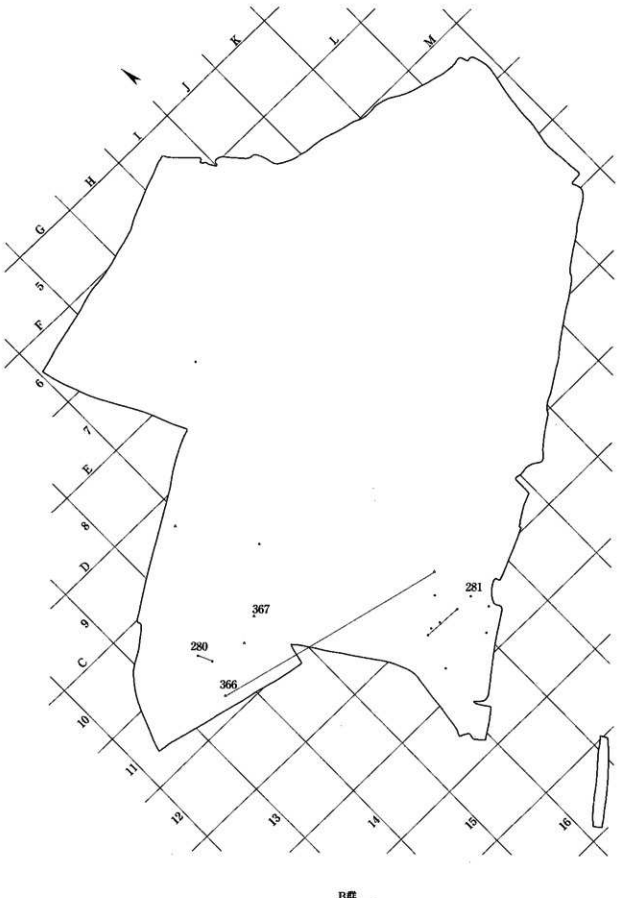
Ⅵその他（472～480）

472と473は菱形をした格子目状の押型文である。472は口唇部にも施文される。474と475は外面に原体凹部が幅広の格子目状の押型文を施文する。器形は外反し内面は横方向に施文される。476と477は外面に山形文状の押型文を斜方向に市松文状に施文する。内面は原体径4.59mmで３単位の山形文を横方向施文し、さらに原体径6.53mmで４単位の櫛状文を施す。478や479は476と477との同文様である。480は外面に約５cmほどの無文帯を巡らせ、その下に原体径3.82mmで３単位の三角文状（山形文の変形か？）の押型文を市松文状に施文する。内面は外面と同文様を施文し、さらに原体径5.10mmで４単位の櫛状文を施文する。

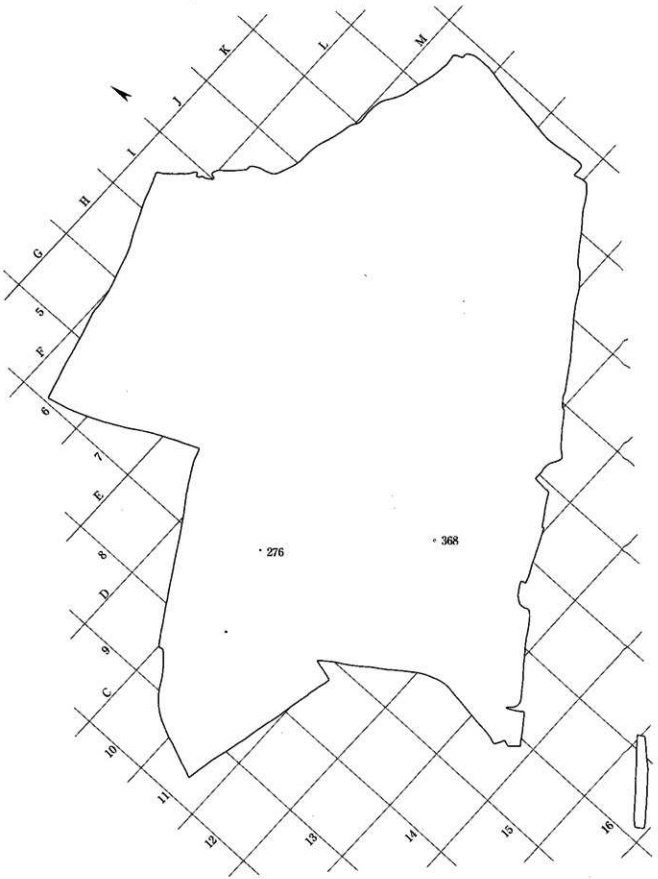
この中で一括した底部はすべて平底である。

C群　貝殻文と押型文が施文されるもの（481～486）

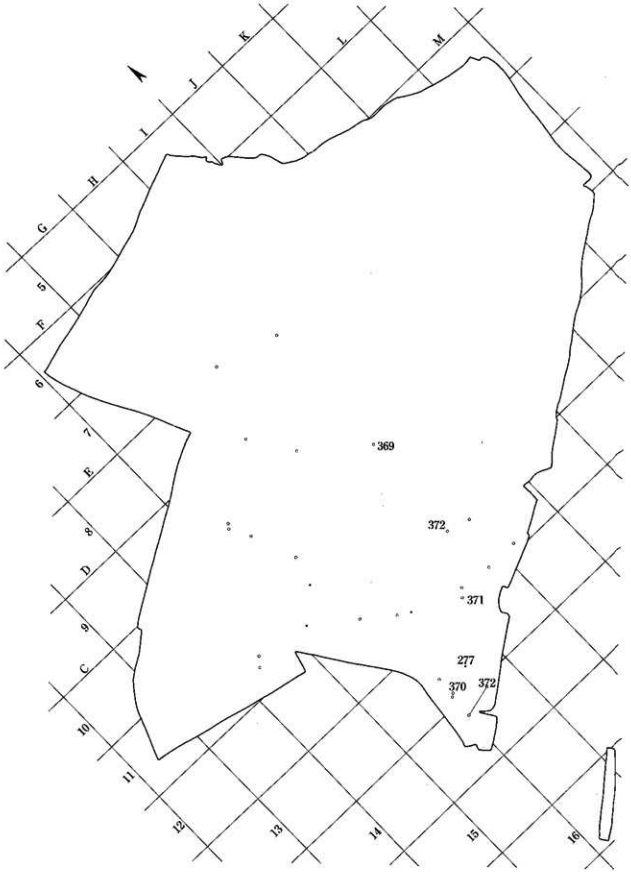
481は口縁部が内湾し、外面に大きな瘤状の凸帯を設ける。口縁部外面に不規則な沈線文を施文し、その後原体径10.19mmで２単位からなる山形文を横方向に施文する。483と同一個体であろう。482は口



第67図　包含層出土遺物分布図(15)

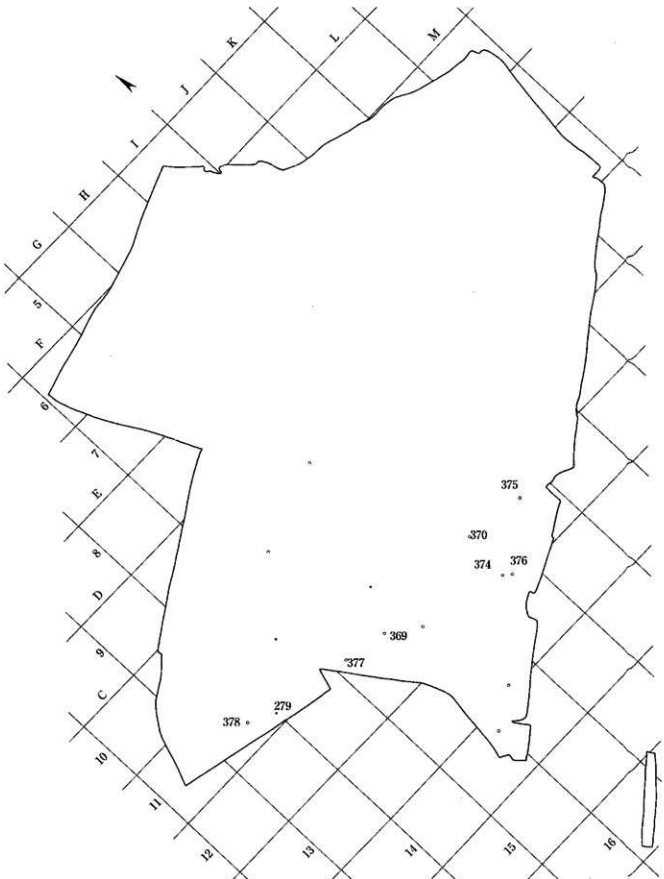


第68図　包含層出土遺物分布図(16)



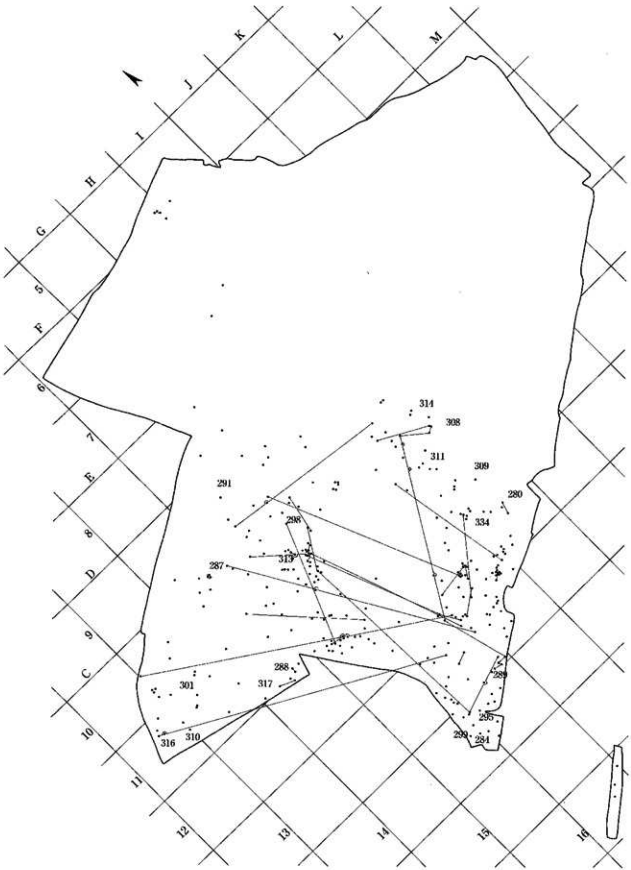
B群
■Ⅱ(2)a類
■Ⅱ(3)a類

第69図　包含層出土遺物分布図(17)

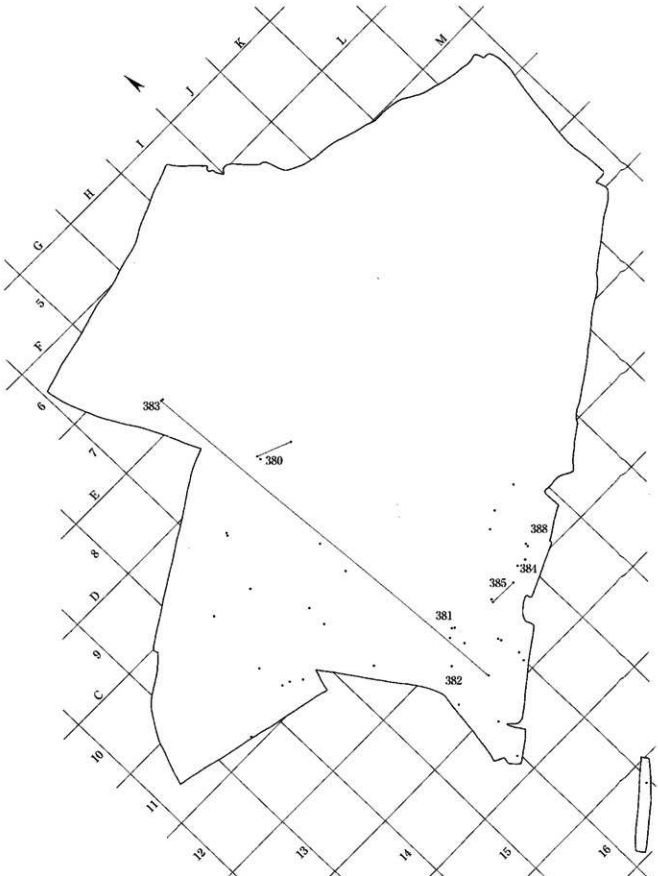


B群
●1(1)5a層
●1(1)2a層

第70図　包含層出土遺物分布図(18)

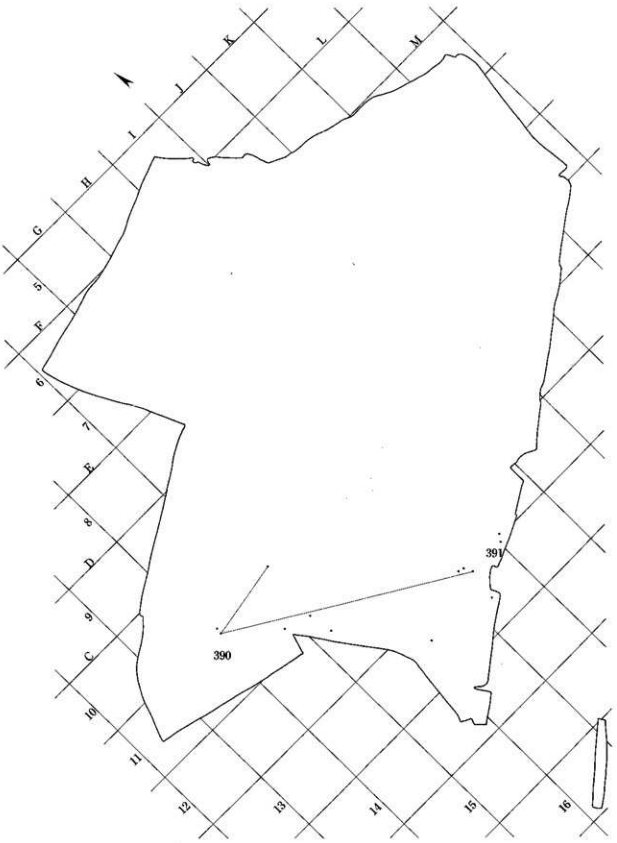


第71図　包含層出土遺物分布図(19)



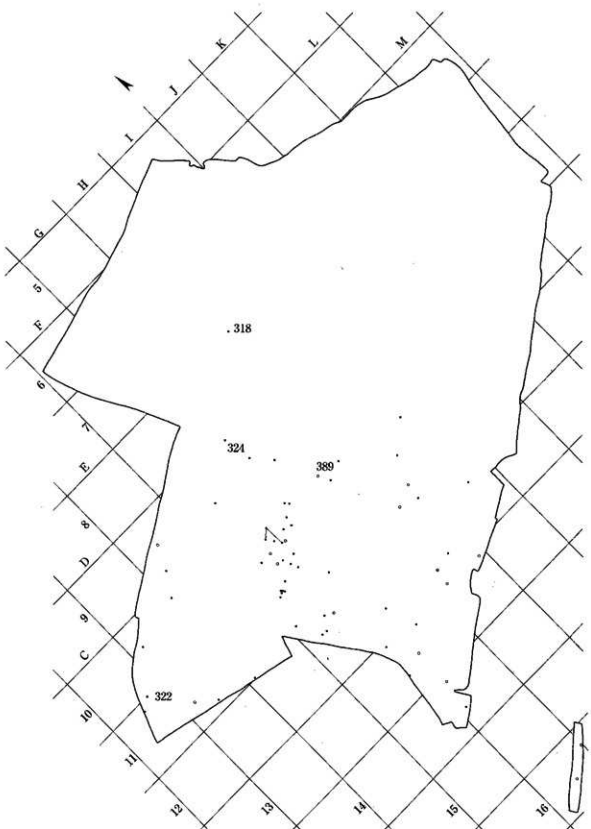
B群
・Ⅱ(②) 1a 類

第72図　包含層出土遺物分布図(20)

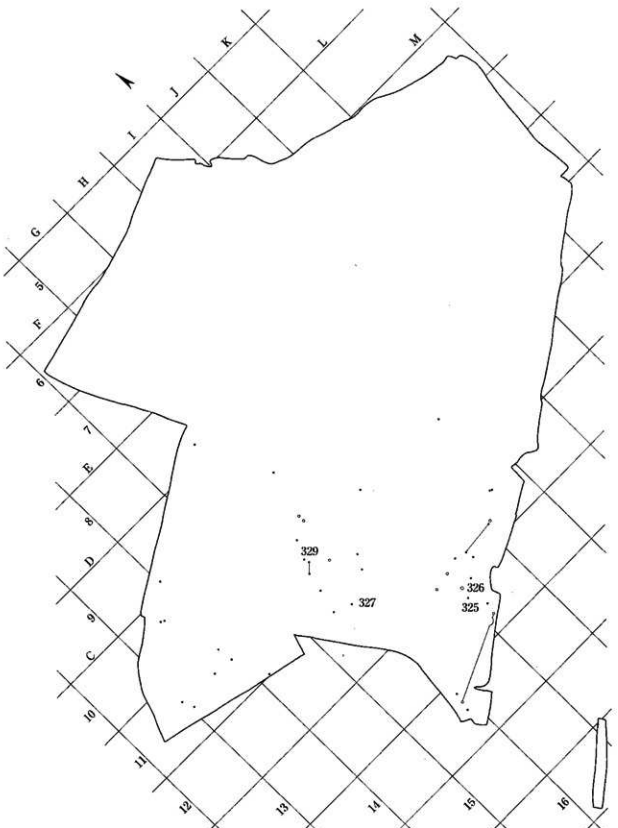


B群
・II② 1b 類

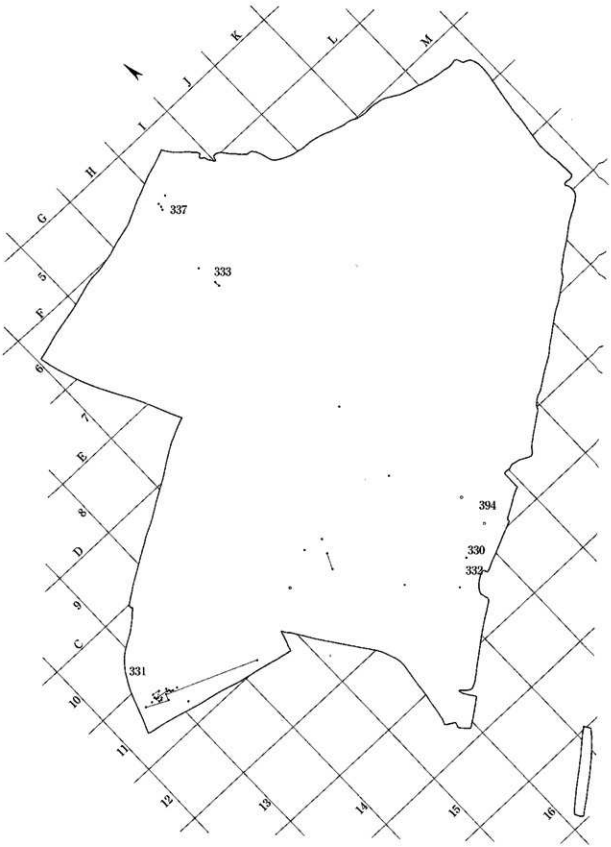
第73図　包含層出土遺物分布図(21)



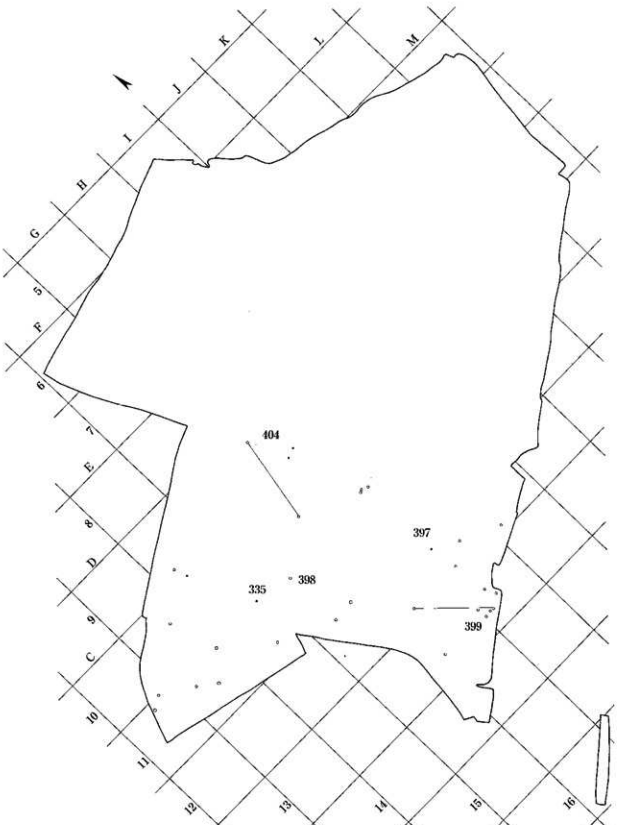
第74図　包含層出土遺物分布図(22)



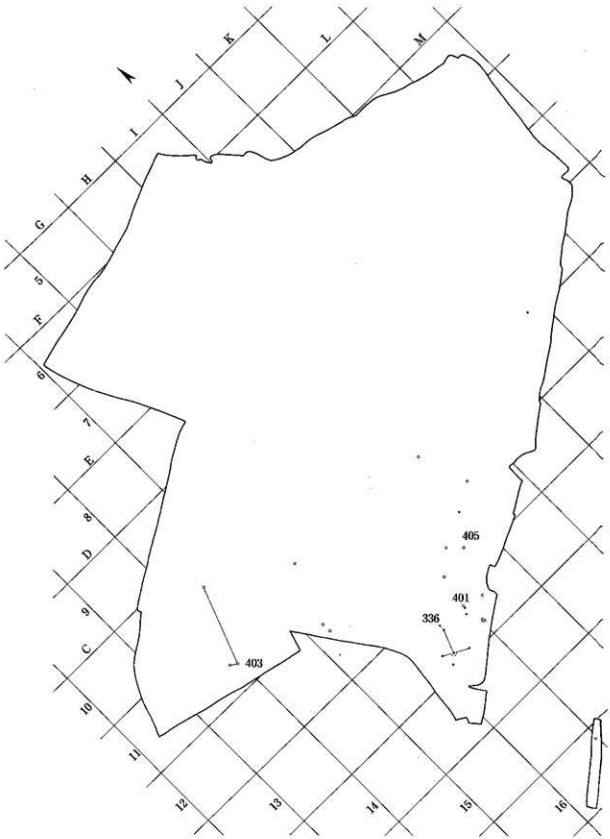
第75図　包含層出土遺物分布図(23)



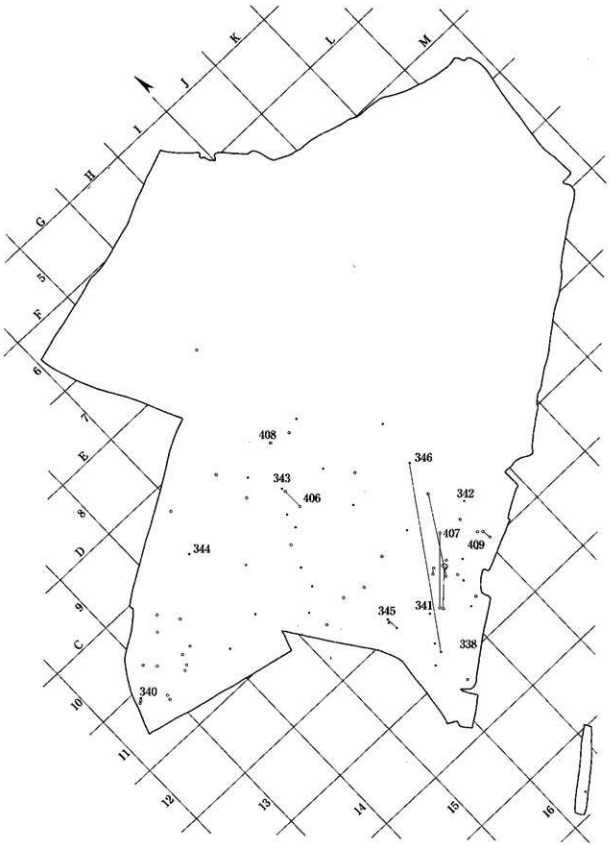
第76図　包含層出土遺物分布図(24)



第77図　包含層出土遺物分布図(25)

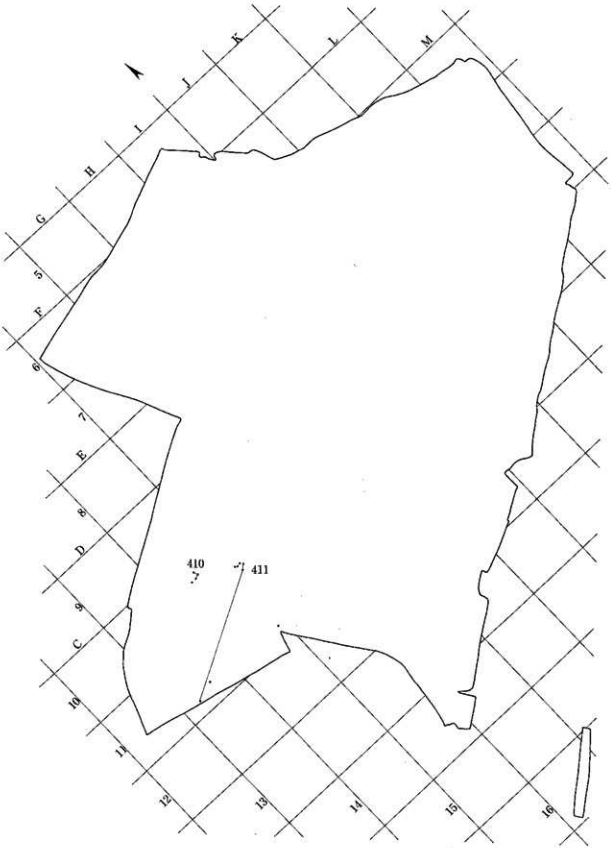


第78図　包含層出土遺物分布図(26)



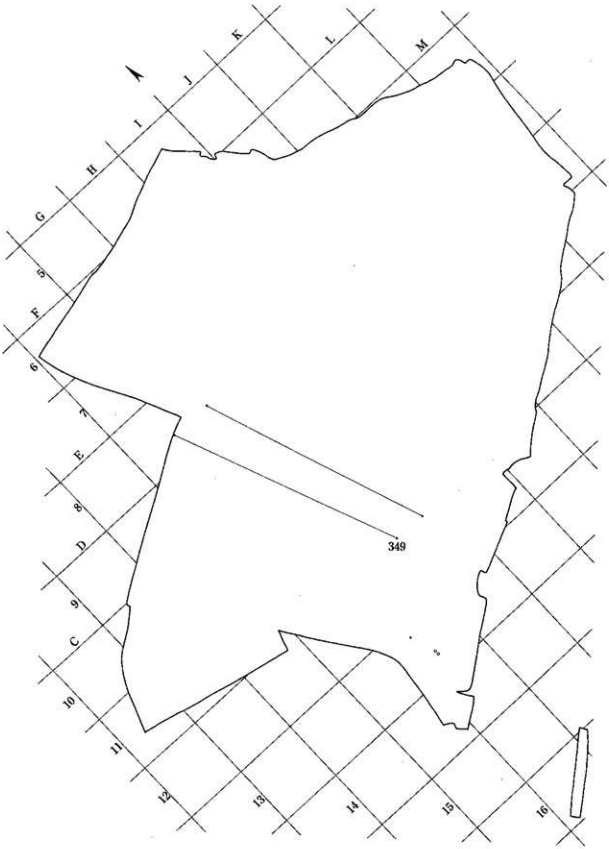
B群
①②加曽利E3期
③④加曽利E4期

第79図　包含層出土遺物分布図(27)



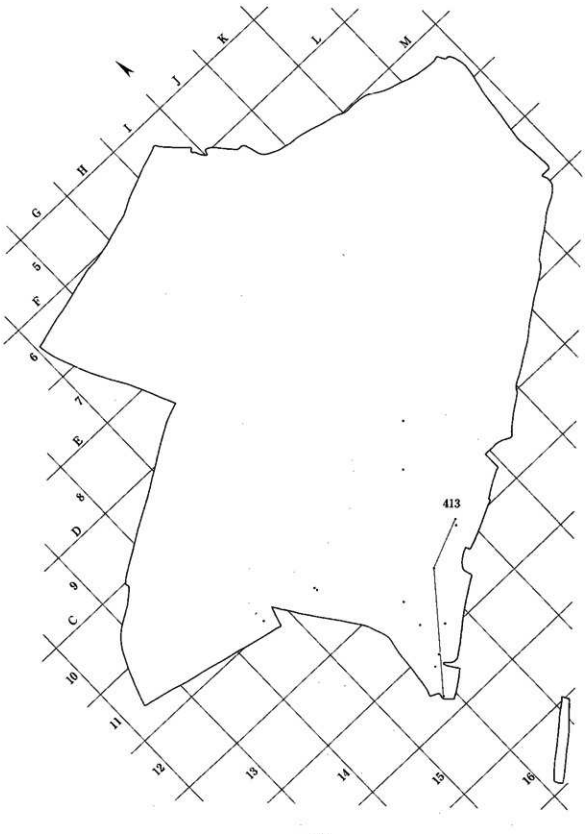
B群
・Ⅱ② 3b 類

第80図　包含層出土遺物分布図(28)

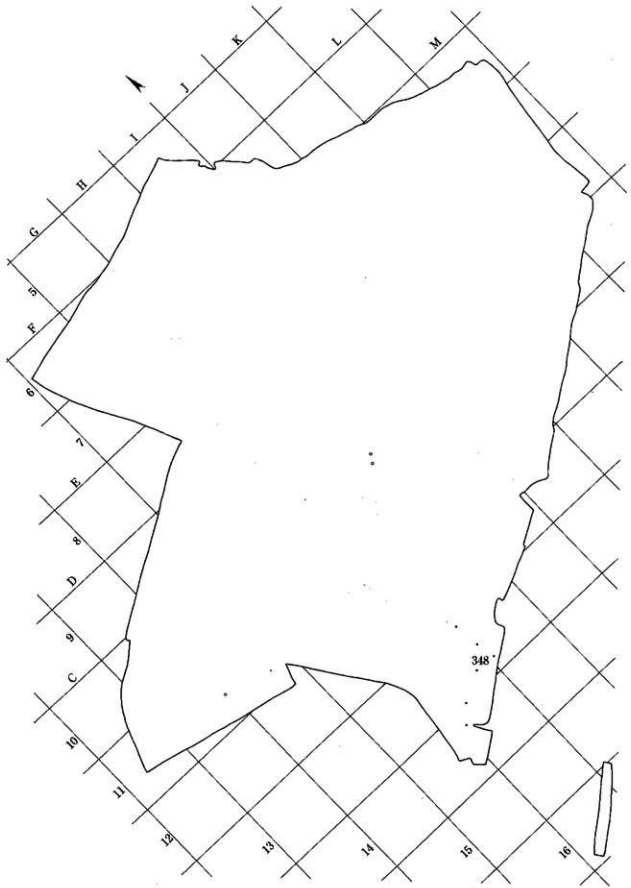


B群
・Ⅰ②3e類

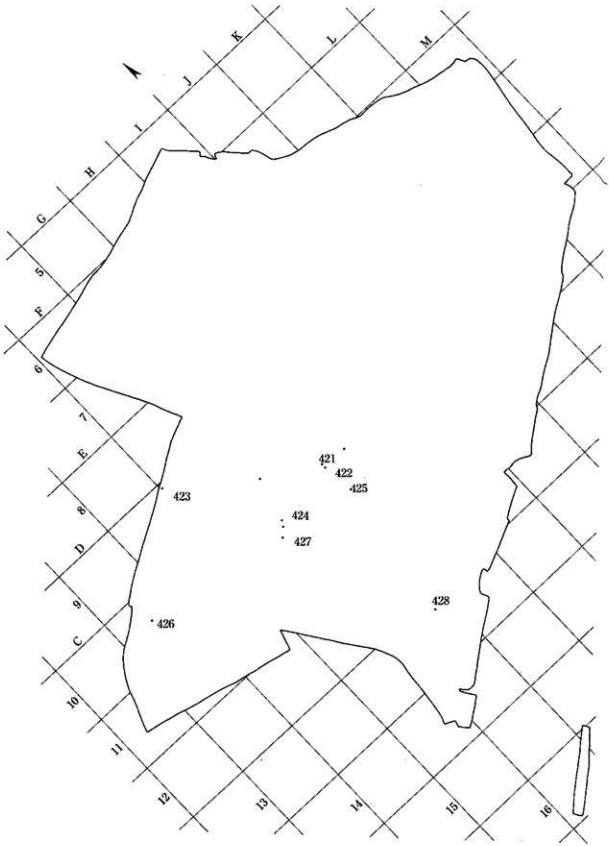
第81図　包含層出土遺物分布図[29]



第82図　包含層出土遺物分布図(30)

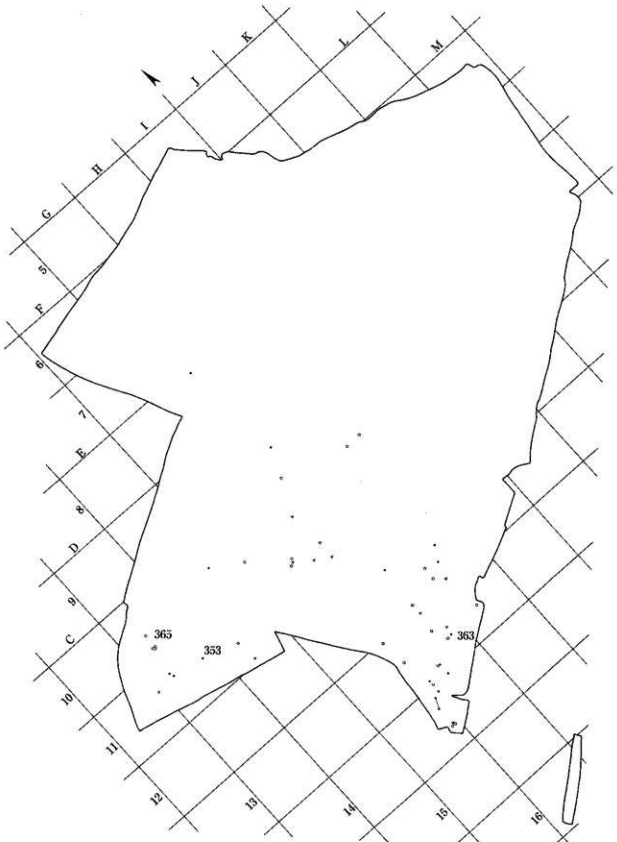


第83図　包含層出土遺物分布図(31)



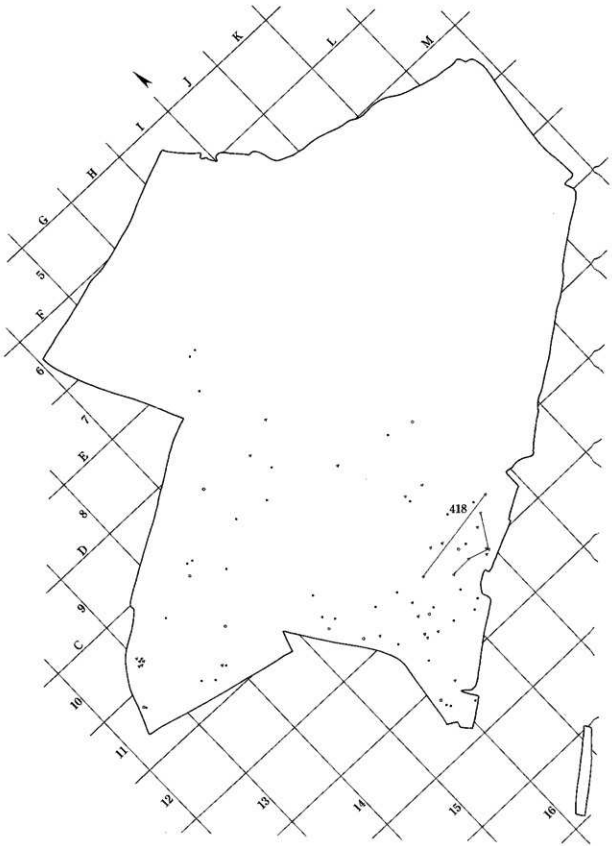
B群
・Ⅱ②4～6c類

第84図　包含層出土遺物分布図(32)



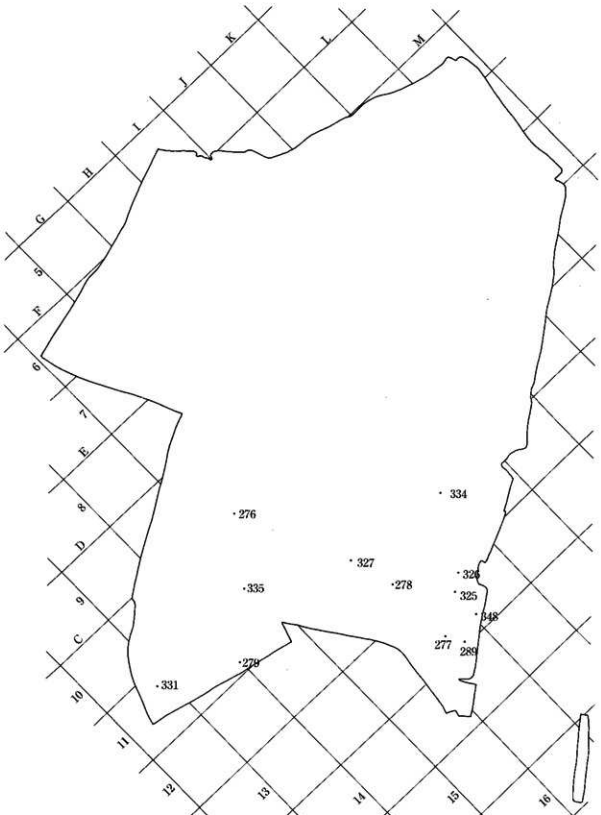
B群
・山形文深鉢を除外するもの（網掛）
・崩れた山形文
・大ぶりな山形文

第85図　包含層出土遺物分布図(3)



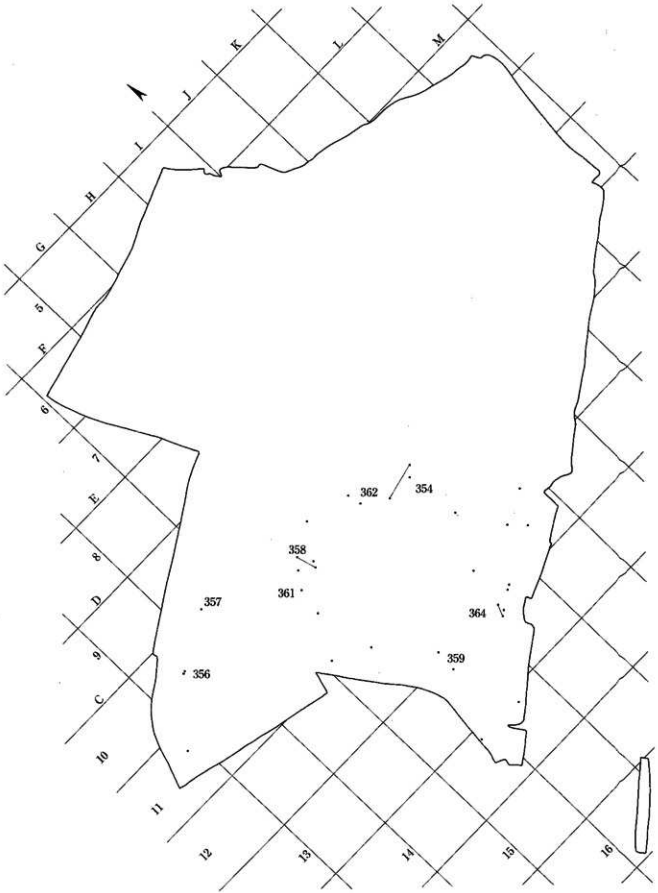
B群
・貼付的な粗目文
・連続文
・格円文が平行に施文されるもの

第86図　包含層出土遺物分布図(34)



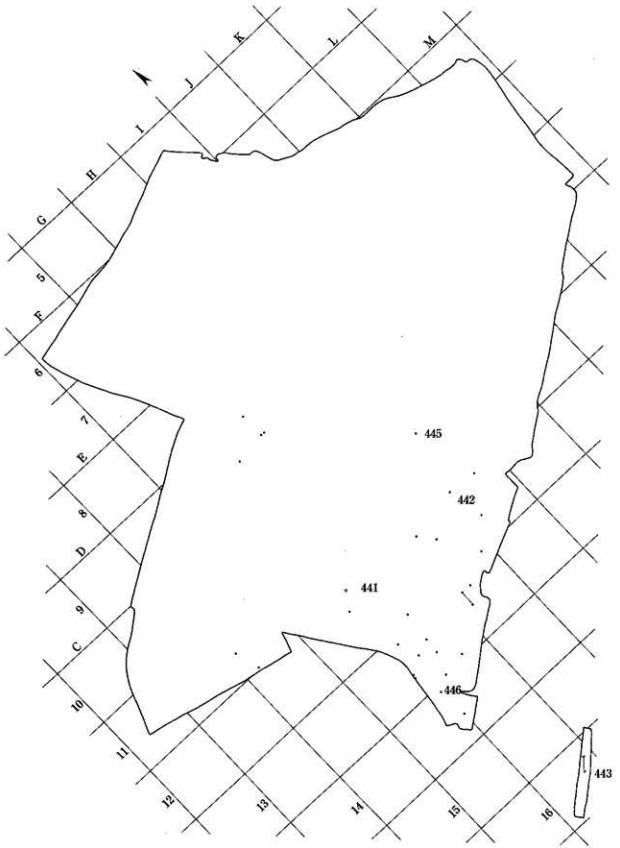
*大足与金山形分
(口縁部)

第87図　包含層出土遺物分布図(35)

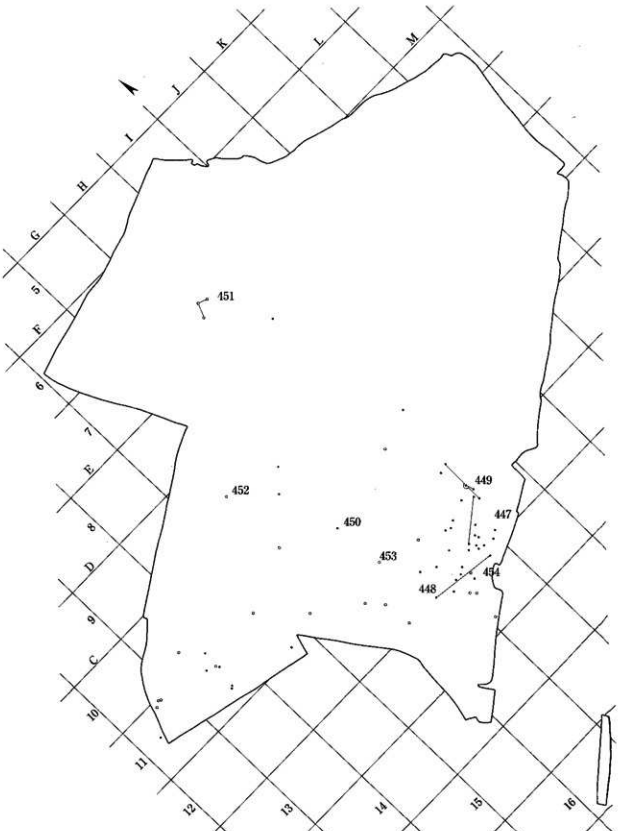


B群
・山形文底部

第88図　包含層出土遺物分布図(36)

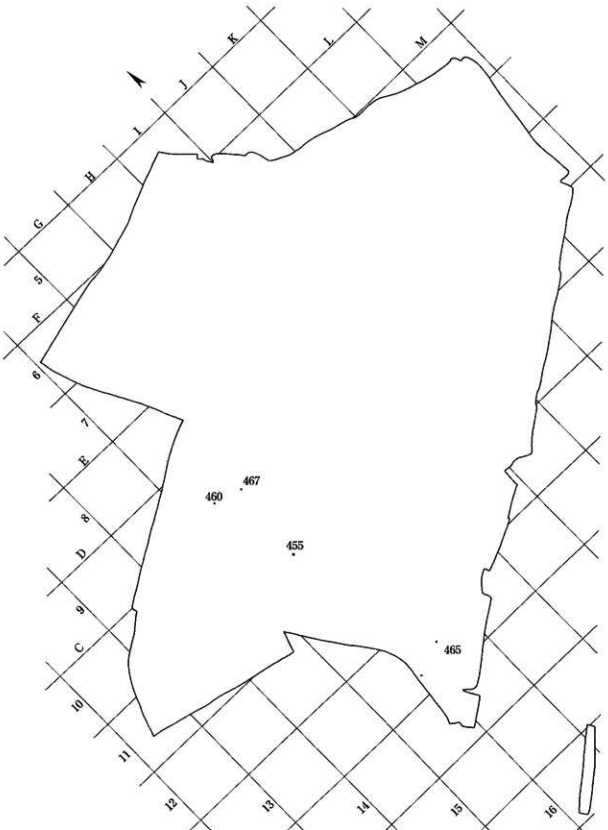


第89図　包含層出土遺物分布図(37)



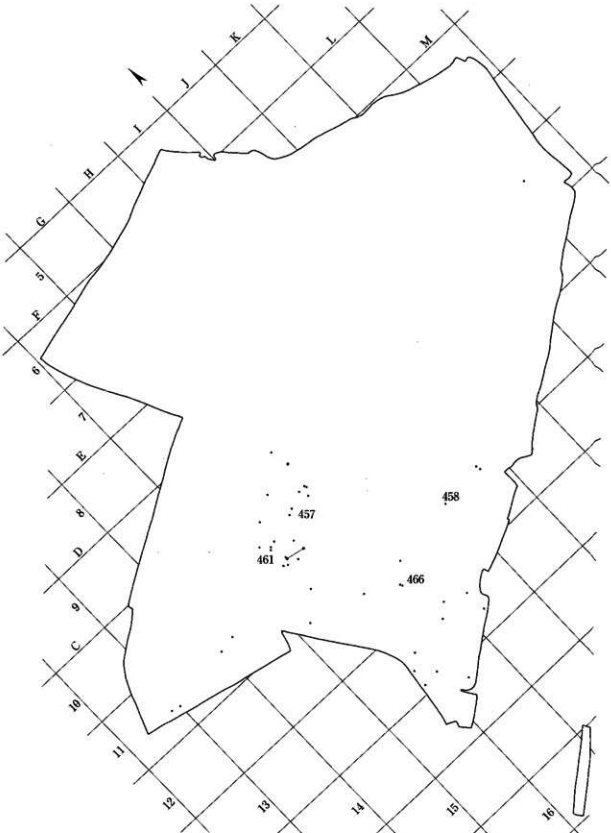
B群
・B(2) 3b 類
・B(2) 2c 類

第90図　包含層出土遺物分布図(38)



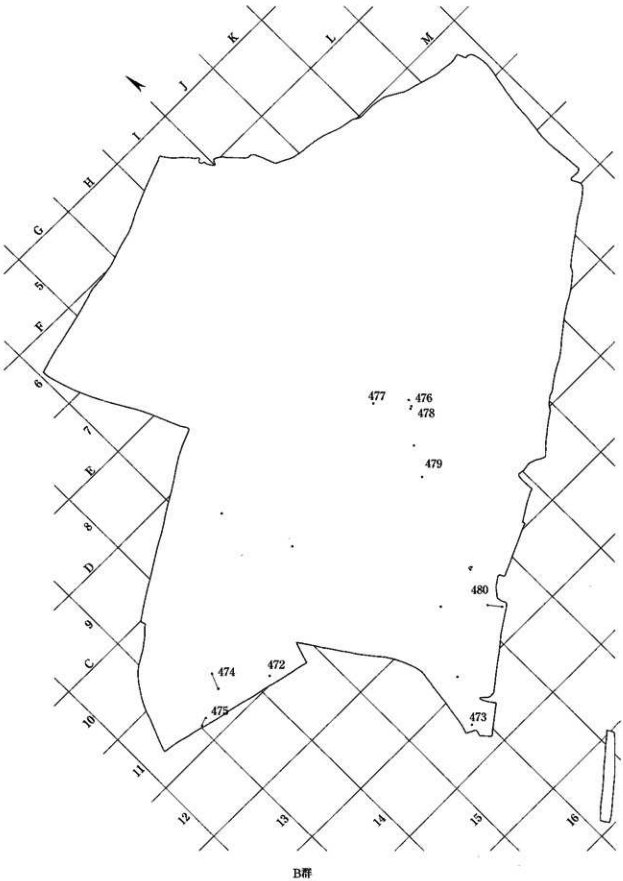
B群
・V（網目状）1e 類

第91図　包含層出土遺物分布図[39]

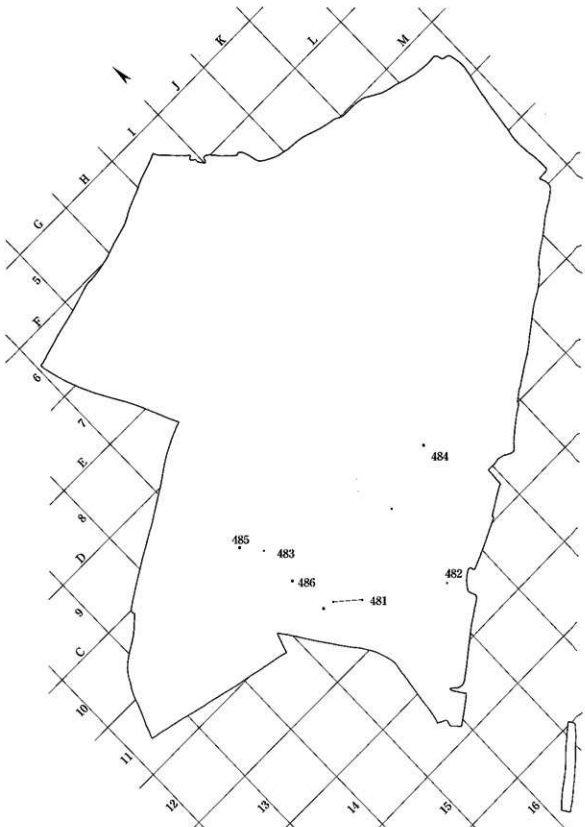


B群
・V（単軸絡条体）類

第92図　包含層出土遺物分布図(40)

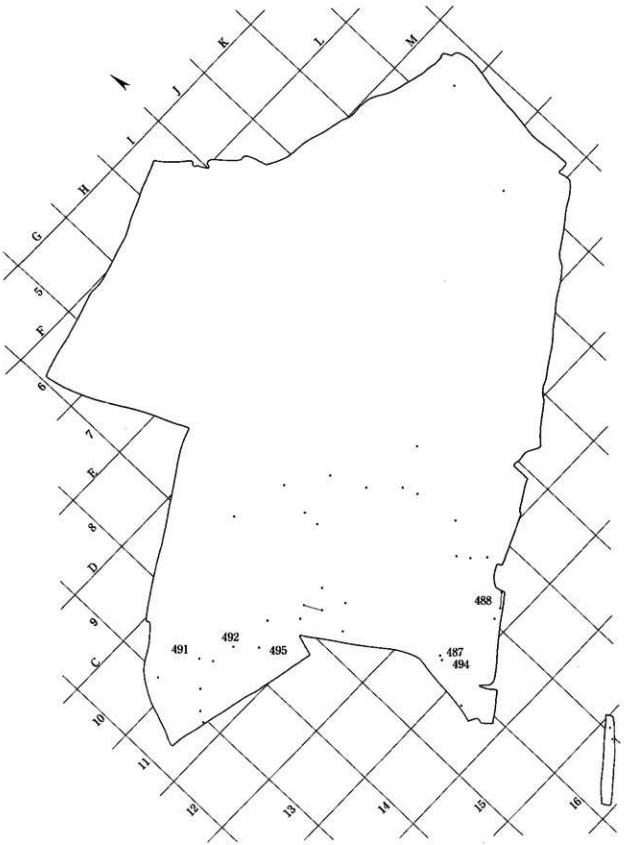


第93図　包含層出土遺物分布図(41)



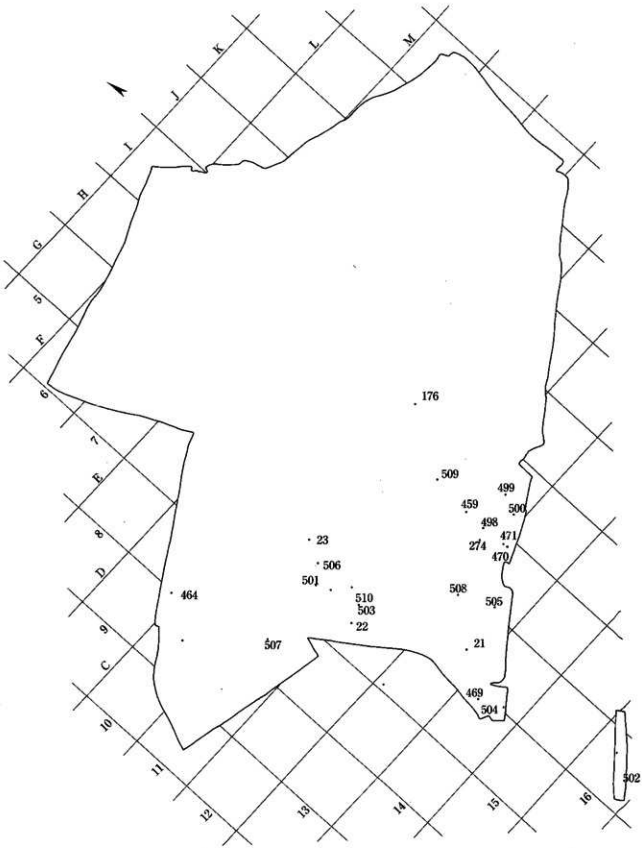
・C群

第94図　包含層出土遺物分布図(42)

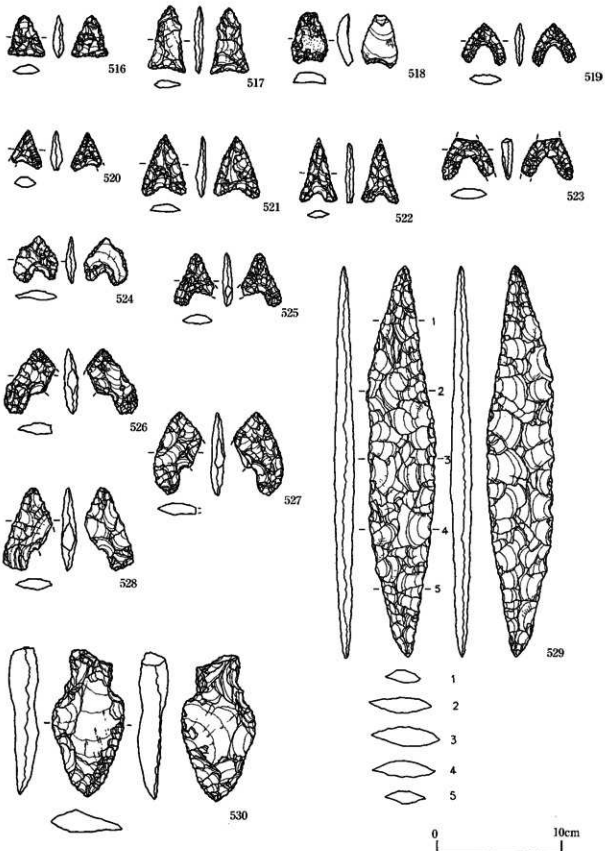


·D群

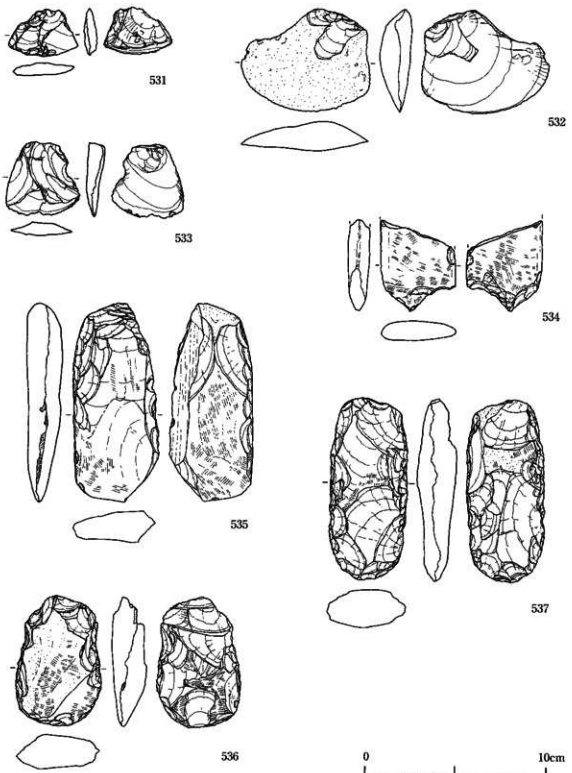
第95図　包含層出土遺物分布図(43)



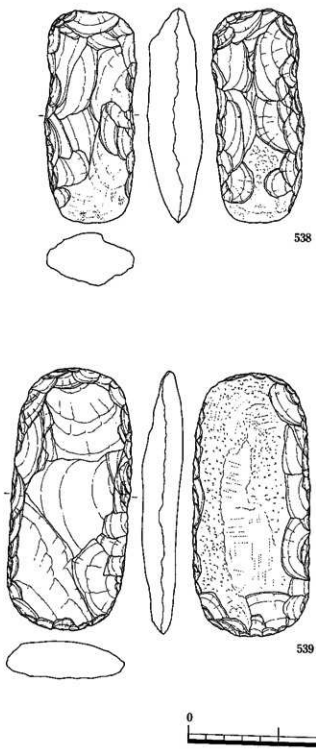
第96図　包含層出土遺物分布図(44)



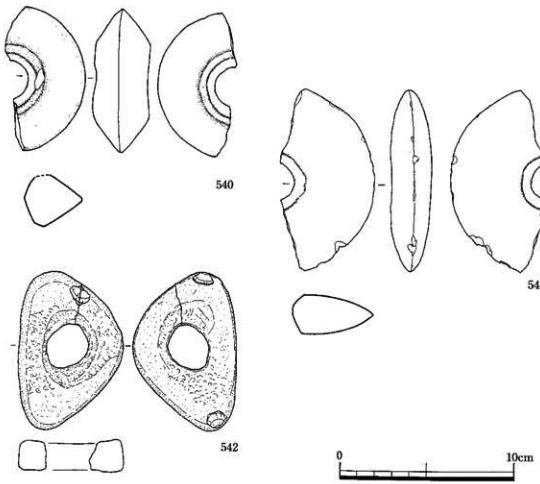
第97図　包含層出土遺物実測図[36]



第98図　包含層出土遺物実測図(37)



第99図　包含層出土遺物実測図(38)



第100図　包含層出土遺物実測図(3)

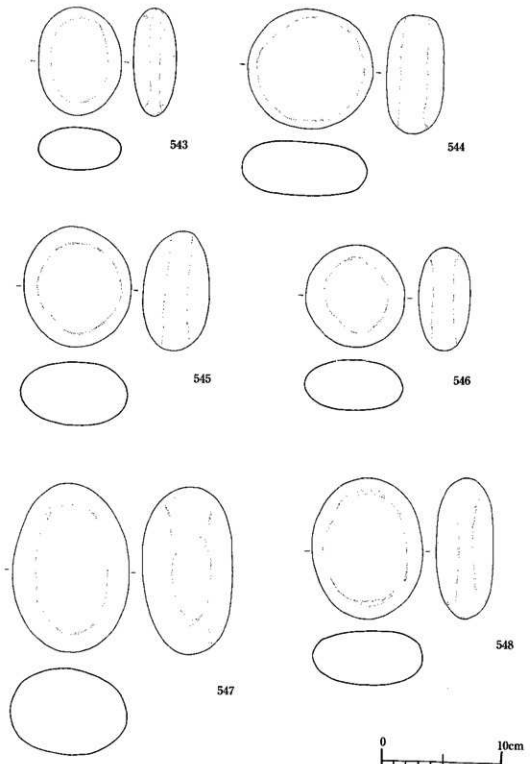
縁部が内湾し、外面に格子目状（山形文に直線を加えたもの）の押型文を施文する。内面はミガキがみられ丁寧な調整である。484は条線状の擬描文と原体径6.37mmで2単位からなる縦方向の大きな山形文を施文する胴部である。486と485は不規則な擬描文と山形押型文を施文する。

D群　無文土器（487～495）

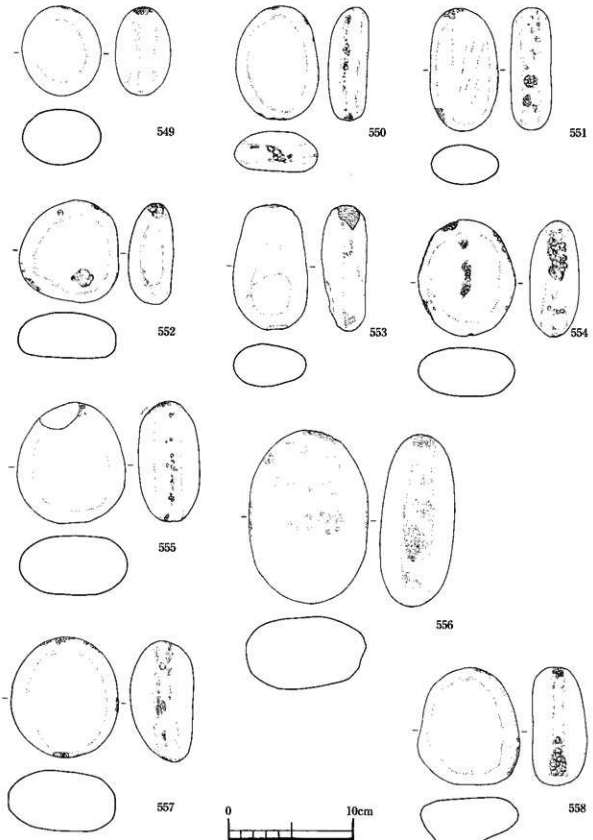
外面にナデ調整を施す。487は口縁部がやや内傾し、疣状の凸帯を施す。488や494は口縁部がやや内湾気味となる。490は外反する。

E群　その他

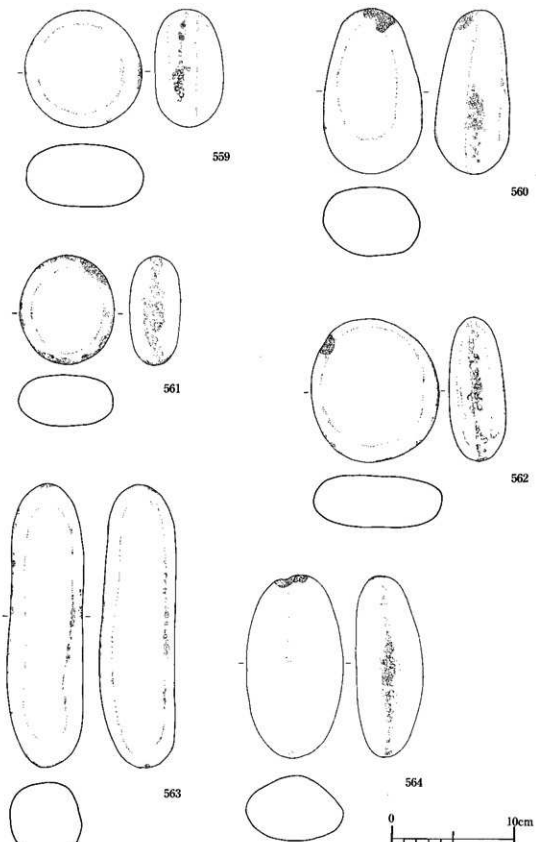
21～23はL1縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文を施す。30は口縁端部がやや肥厚する。施文原体ははっきりわからないが貝殻のようなもので器面を浅く刺突したような痕跡である。器壁は薄く内面は丁寧な調整をする。459・464・469～471は施文原体がわからない。横方向に条痕状の凹凸がみられるが、痕跡がはっきりせず条痕なのか押圧文なのかはっきりわからない。459と469の内面には外面と同じ文様を横方向に施文し、さらに原体条痕を施文する。また、470と471は長い原体条痕を施文し、その下はかなり荒いナデ調整で器壁も薄い。496～509は不規則に細い沈線を施す。508は縦方向に細い条痕を施



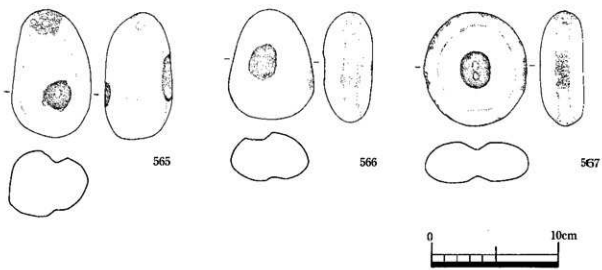
第101図　包含層出土遺物実測図(40)



第102図　包含層出土遺物実測図(41)



第103図　包含層出土遺物実測図(42)



第104図　包含層出土遺物実測図(43)

し横方向に別の原体の条痕を施す。その他に型式不明の底部もこの中に一括した。

石器

石器（剥片も含む）は487点出土した。器種は石鏃、石槍、石匙、スクレイパー、石斧、敲石、磨石、凹石、台石である。台石は6点出土したが、使用痕跡ははっきりと確認できなかった。そのため類似した形状をもって分類した。

A　石鏃（516～528）

石鏃は14点出土した。石鏃の形状は、516は基部が直線的である。519や523は基部の抉りが深い518は片面のみの調整である。石材は黒曜石、ホルンフェルス、チャートが使用されている。

B　石槍（529）

石槍はⅣ層直下で1点のみ出土した。器長15.5cmで、石材はサヌカイトが使用されている。刃部は丁寧な調整が行われており、先端部分のズレは再加工によるものと思われる。

C　石匙（530）

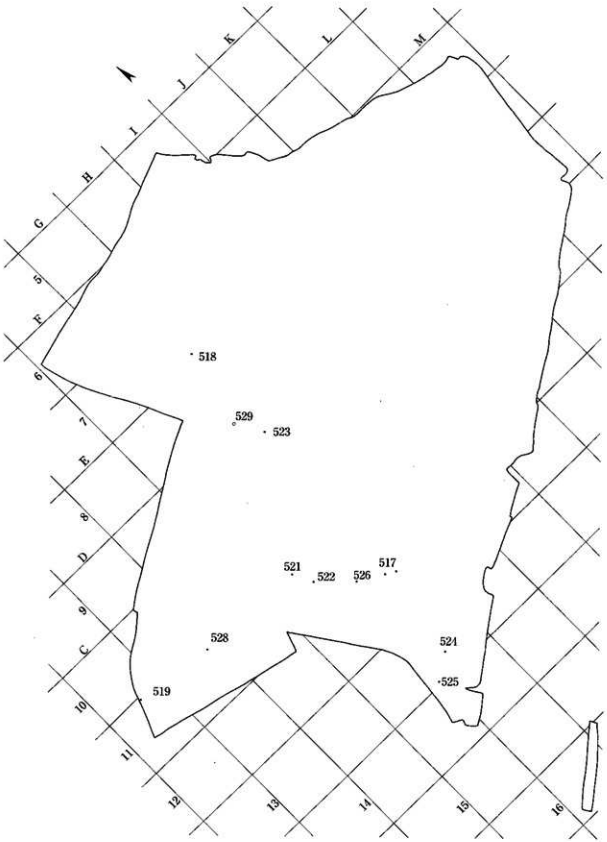
縦型石匙でつまみ部分の抉りは弱い。刃部は片面調整である。石材はチャートが使用されている。

D　スクレイパー（531～533）

刃部は簡易な片面調整である。使用石材は５３２は風化面が残る。

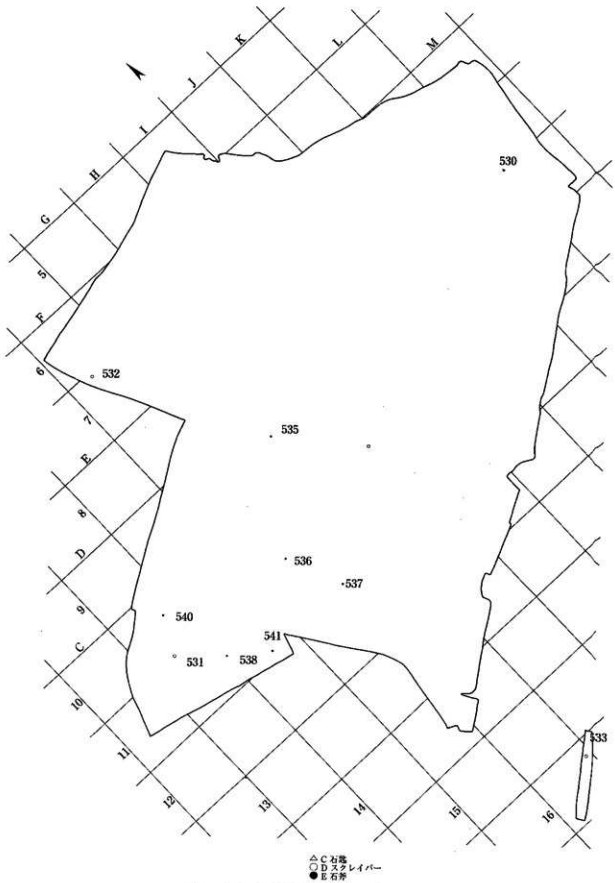
E　石斧（534～541）

534は両面が丁寧に磨かれ、刃部がかろうじて残っている。535は局部磨製で刃部に磨痕が認められる。537は刃部ならびに両側縁に剥離調整がみられ部分的に磨痕がある。536は自然面を利用し磨痕が認められる。540と541は環状石斧である。穿孔部分の面取りがしっかりしている。刃部は丁寧に磨かれている。

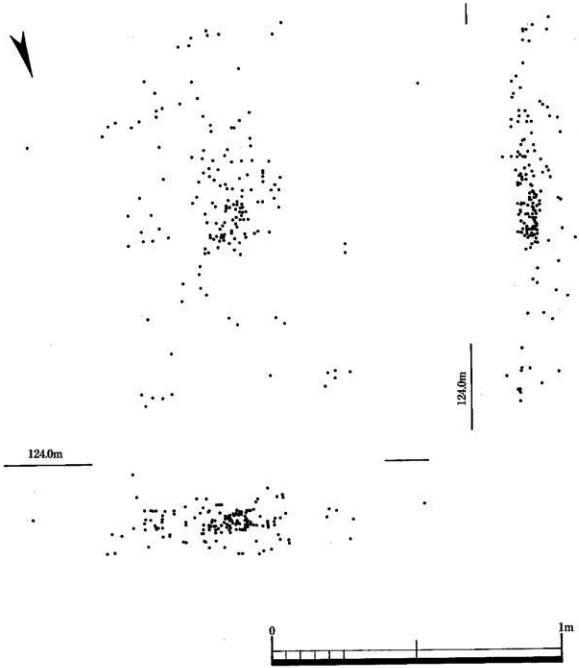


B群
A石器
B石器

第105図　包含層出土遺物分布図(45)



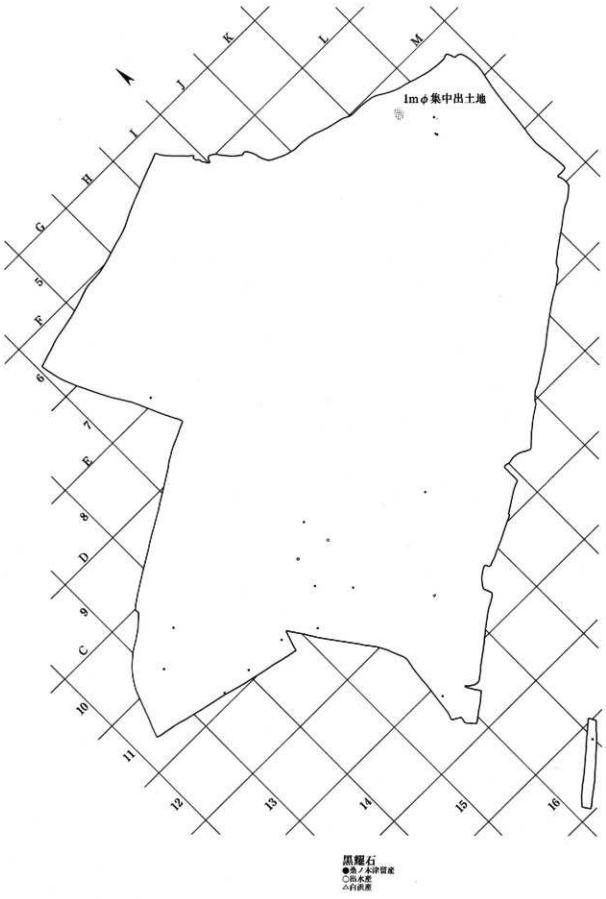
第106図　包含層出土遺物分布図(46)



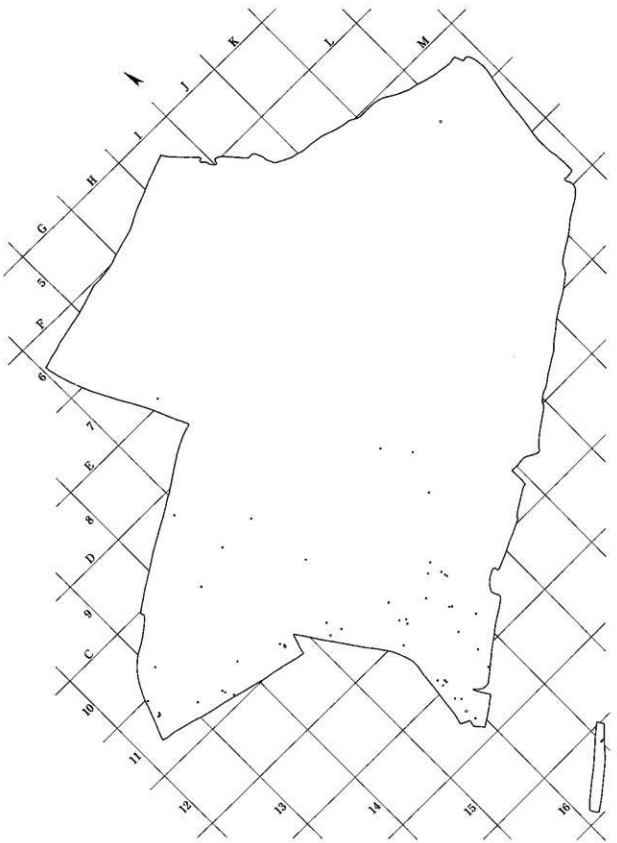
第107図　L７グリット黒耀石出土状況図

F　敲石・磨石・凹石（543～567）

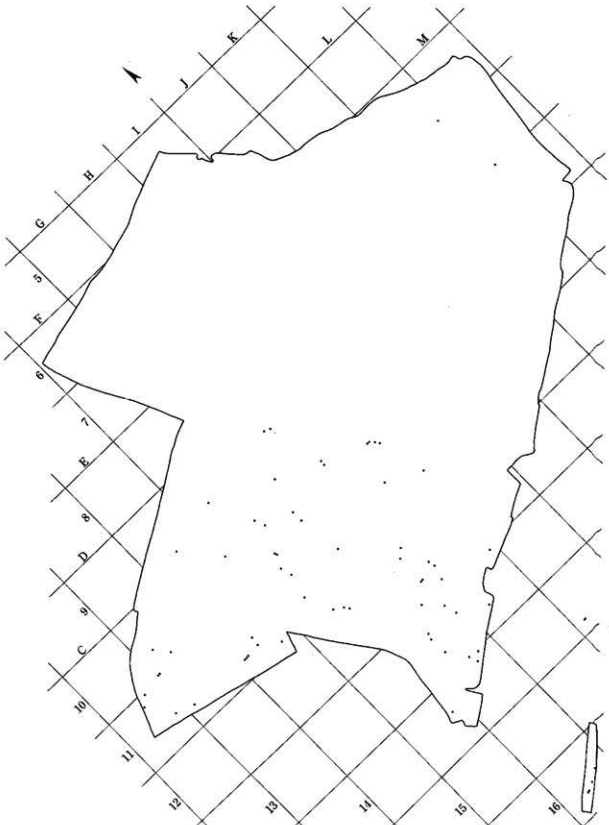
543～548は磨石である。543～547は両面に擦痕が認められ、548は石器全体に認められる。使用石材は、545と547は細粒砂岩でそれ以外は溶結凝灰岩である。549は片側面に敲打痕をもち、両面（一部分）に擦痕が認められる。550は側面に敲打痕をもつ。551は側面に敲打痕をもち、片面に擦痕が認められる。552は両面及び側面に敲打痕をもつ。553は側面に敲打痕をもつ。554～56は両面及び側面に敲打痕をもつ。また両面に擦痕も認められる。557と559と561と562は側面に敲打痕をもち、両面に擦痕が認められる。558は片側面に敲打痕をもつ。563は側面角に敲打痕が認められる。564は側面に敲打痕が認められる。565は２面３箇所で凹が認められる。また側面に敲打痕をもつ。566は両面に１箇所づつ凹をもつ。567は側面全体に敲打痕をもち、両面に凹が認められる。



第108図　包含層出土遺物石材分布図(1)

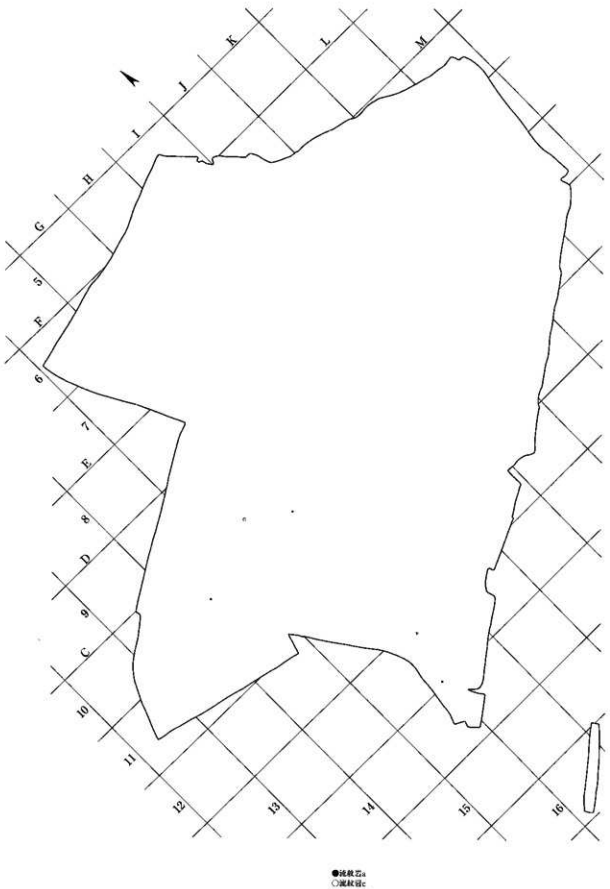


第109図　包含層出土遺物石材分布図(2)

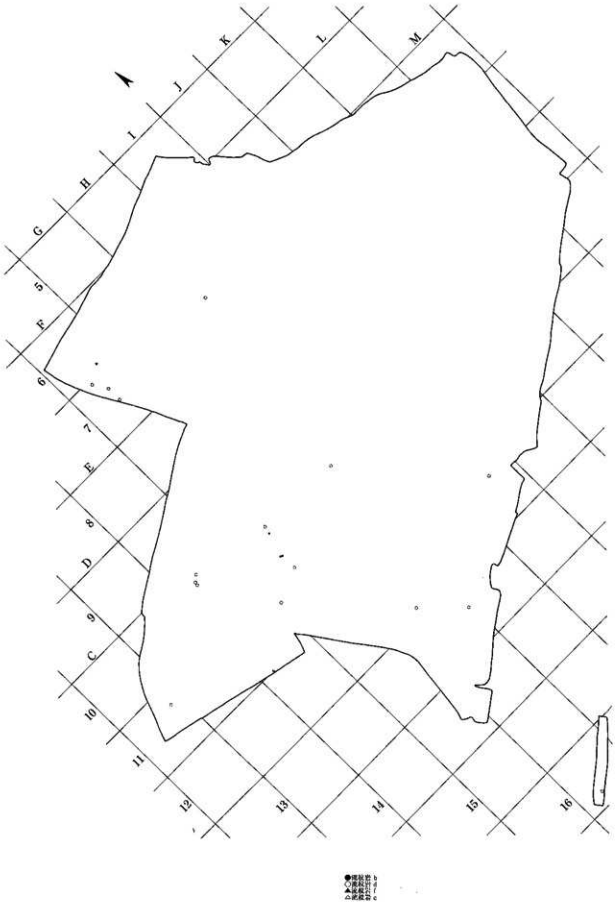


・チャート

第110図　包含層出土遺物石材分布図(3)



第111図　包含層出土遺物石材分布図(4)



第112図　包含層出土遺物石材分布図(5)

表3　黒耀石原産地重量百分率

地　区	原産地	重量百分率(%)	径1m集中出土分を含んだ場合の百分率(%)
えびの・北薩	桑ノ木津留	44.5	83.3
	出水（日東）	8.0	2.4
	白　浜	1.9	0.6
北西九州	腰　岳	39.9	12.0
	淀　姫	2.0	0.6
大　分	姫　島	3.7	1.1

表4　出土石器石材別集計表　　石器合計　487点

石材名	数量	石材名	数量	石材名	数量
黒耀石	290	流紋岩a	4	流紋岩g	1
チャート	96	流紋岩b	5	溶結凝灰岩	4
砂岩	41	流紋岩c	1	石英斑岩	1
頁岩	5	流紋岩d	20	軽石	2
ホルンフェルス	6	流紋岩e	1	サヌカイト	3
安山岩	3	流紋岩f	2	石英	2

G　その他（542）

三角形状をなし角は丸みをもつ。中央に穿孔がみられるが、明確な調整痕や使用痕は確認できず、人為的なものかどうかはわからない。

石材（集石遺構に使用された礫は除く）について

出土した石器の使用石材は、宍戸章氏の肉眼観察により、砂岩　、チャート、安山岩、サヌカイト、頁岩、ホルンフェルス、軽石、黒耀石、流紋岩、溶結凝灰岩等に分類した。さらに流紋岩については次のように細分した。また、黒耀石は藁科氏による蛍光X線分析により産地同定をおこなっている。

流紋岩(a)　緻密で縞状。無斑晶質岩で、金属音を出すものがある。いわゆるリソイダイト。産地は不明である。

流紋岩(b)　一見するとシルト質頁岩のように見える。灰白～暗灰～黒灰色のまだら模様の縞が見られるほか白斑（風化進行した長石斑晶？）が並ぶことがある。石基部分は、やや粗い。産地は五ヶ瀬川流域の可能性がある。

流紋岩(c)　石基部分は(a)より粗く、(b)より細かい。（但し中はガラス質）風化面は少し白っぽく、微細な凹凸がある。産地は長崎方面の可能性がある。針尾産のガラス質岩などに近い。

流紋岩(d)　黒色岩の中で最も頁岩に似たグループ。緻密な部分もあるが、やや粗いため、つやがない。白斑が点在することもあり、(b)としたものとは同一岩体の可能性が高い。五ヶ瀬川での転石と類似している。（なお、岩石名は無斑晶質安山岩というべきなのかも知れない。）円磨表面に爪形穴がみられることがある

流紋岩(e)　石基が粗く、微細な黒雲母？で構成。有色鉱物（輝石？）斑晶が点在する、明確な火成岩。

（岩石名は安山岩が正しいと思われる。）

流紋岩(f)　つやの少ない頁岩様岩。河床礫の一部であり(b)(d)と同様のもの、同様の産地と考えられる。

流紋岩(g)　黒色ガラス質で、黒耀石に近い。長崎の東浜や針尾のものと同じような岩石だが、産地は不明。

出土石材は黒耀石が290点で一番多く、次にチャートが96点と続く。これは黒耀石やチャートなどは小型の石器に使用される頻度が高く数量が多い。しかしながら同じ用途で使われることがある頁岩が5点と極端に少ない。また、サヌカイトが3点ではあるが出土している。

黒耀石はL7グリットで169点（総重量988.7g）の桑ノ木津留産（第1群）が径約1.0mの範囲で確認された。黒耀石は長さ2～5cmの親指大で平均重量5.85gである。原産地で採取されるものと比較すると、風化面は少ないが、形状、規模とも類似している。それ以外の黒耀石は、桑ノ木津留産が1群と2群を合わせて44.5%で、次に腰岳産の39.9%と続く。また、鹿児島方面（上牛鼻、三船）の黒耀石は出土していない。これらの黒耀石は形状様々で1cmに満たない大きさのものもある。

流紋岩は7類に分けられ、d類が20点で多く、b類、a類と続く。それ以外は1～2点と少ない。

表5　包含層出土土器観察表(1)

遺物番号	挿図	図版	出土地点	文様・調整 外面	文様・調整 内面	色調	胎土	備考
4	18	—	G-13	②縦方向の沈線 斜方向の条痕	②ナデ	㊱Hue 10 YR 7/4 にぶい黄橙色 ㊲Hue 10 YR 7/3 にぶい黄橙色	・1㎜以下の乳白色粒少 ・〃　白色半透明粒多 ・〃　黒色粒少	
5	18	—	F-14	②斜方向の貝殻腹縁刺突文	②ナデ	㊱Hue 10 YR 7/4 にぶい黄橙色 ㊲Hue 10 YR 6/4 にぶい黄橙色	・1㎜位の黒色粒少 ・1㎜以下の乳白色粒少	
6	18	16	C-10	①ミガキ ②押引文 貝殻条痕	②ミガキ	㊱Hue 5 YR 6/6 橙色 ㊲Hue 10 YR 7/4 にぶい黄橙色	・1㎜以下の乳白色粒少 ・〃　白色光沢粒多 ・〃　黒色粒少	
7	18	—	F-14	①ミガキ ②貝殻腹縁刺突文	②ナデ	㊱Hue 10 YR 8/3 浅黄橙色 ㊲Hue 10 YR 8/3 浅黄橙色	・1㎜前後の半透明粒多 ・1㎜以下の乳白色粒少 ・1～2㎜の小石少 ・3㎜位の赤褐色粒1個	
8	18	—	E-11	②縦方向の貝殻腹縁刺突文 貝殻条痕	②ナデ	㊱Hue 10 YR 6/4 にぶい黄橙色 ㊲Hue 10 YR 5/4 にぶい黄褐色	・1㎜以下の乳白色粒少 ・〃　白色半透明粒少	
9	18	16	H-12	①刻目 ②横方向の貝殻腹縁刺突文 クサビ形凸帯	②ていねいなナデ	㊱Hue 7.5 YR 3/3 暗褐色 ㊲Hue 7.5 YR 4/3 褐色	・1㎜位の透明粒少 ・1㎜以下の乳白色粒少 ・〃　黒色粒少 ・〃　半透明少	
10	18	—	E-10	①刻目 ②横方向の貝殻腹縁刺突文 クサビ形凸帯	②ナデ	㊱Hue 7.5 YR 7/6 橙色 ㊲Hue 7.5 YR 5/8 明褐色	・1㎜以下の白色半透明粒多 ・1㎜位の黒色粒少 ・1㎜以下の黒色光沢粒少	
11	18	—	G-16	①刻目 ②横方向の貝殻腹縁刺突文 クサビ形凸帯	②横方向のていねいなナデ	㊱Hue 10 YR 6/4 にぶい黄橙色 ㊲Hue 2.5 Y 4/1 黄灰色	・1㎜以下の黒色粒少 ・〃　光沢粒少 ・〃　乳白色粒少	
12	18	—	G-14	②クサビ形凸帯	③ナデ	㊱Hue 10 YR 7/4 にぶい黄橙色 ㊲Hue 5 YR 5/6 明赤褐色	・1㎜以下の半透明粒多 ・〃　黒色光沢粒多 ・〃　乳白色粒少 ・1㎜位の透明粒少	
13	18	—	G-16	②縦方向の貝殻腹縁刺突文 クサビ形凸帯	③ていねいなナデ	㊱Hue 5 YR 5/4 にぶい赤褐色 ㊲Hue 5 YR 5/8 明赤褐色	・1㎜以下の黒色粒少 ・1㎜位の透明粒少 ・1㎜以下の乳白色粒少	
14	18	—	G-10	②縦方向の貝殻腹縁刺突文と クサビ形凸帯	③ナデ	㊱Hue 7.5 YR 7/4 にぶい橙色 ㊲Hue 7.5 YR 5/6 明褐色	・1㎜以下の黒色粒少 ・〃　白色半透明粒少 ・〃　乳白色粒少	
15	18	16	F-11	①刻目 ②横方向の貝殻腹縁刺突文 斜方向の貝殻腹縁刺突文とクサビ形凸帯	②ナデ	㊱Hue 7.5 YR 8/4 浅黄橙色 ㊲Hue 10 YR 8/4 浅黄橙色	・1㎜位の黒色粒少 ・〃　白色半透明粒少 ・1㎜以下の乳白色粒少 ・1㎜位の茶色半透明粒少	
16	18	—	F-10	③縦方向の貝殻腹縁刺突文 斜方向の沈線	③下から上へナデ	㊱Hue 7.5 YR 6/6 橙色 ㊲Hue 5 YR 6/6 橙色	・1㎜位の透明粒多 ・1㎜以下の透明粒少 ・〃　黒色粒少 ・〃　乳白色粒少	
17	18	—	F-12	③縦方向の貝殻腹縁刺突文	③ていねいなナデ	㊱Hue 7.5 YR 6/6 橙色 ㊲Hue 10 YR 4/2 灰黄褐色	・1㎜位の透明粒少 ・〃　黒色光沢粒少 ・1㎜以下の乳白色粒少 ・〃　半透明粒少	